

雲のない雨空の下で

Under the rainy sky without a cloud

足音。

夕陽の街に、夜景の空に、足音が響く。
鼓動。呼吸。靴底の衝撃。銀杏の雨。

11月24日。雲のない青空の下。

私こと遠野有希は、自らの信念を曲げぬ
ままに現実から逃げた。

たったそれだけの事が、私と蒼腕の魔女を
引き合わせるなんて、思いもせずに。

逃げる。

そこにどんな意志が、正義が、結末が
あったとしても、私達のアクションは一つ。

逃げる。

ただそれだけの、他愛も無い物語。
卑怯で、皮肉的で、
それでもどこか、ひたむきな物語。

女子高生と現代の魔女の、物語。

雲のない雨空の下で

吉村麻之 今野隼史

雲のない雨空の下で

吉村麻之 今野隼史

2006.8 Mayuki Yoshimura <http://mukiryokukan.sakura.ne.jp/>
むきりよかん。

Takashi Konno <http://www2.chkai.ne.jp/~frontier/>

Under the rainy sky without a cloud

白鷺堂 十社 秋野



よしむら まゆき
吉村 麻之

1982年生まれ。横浜在住の茨城育ち。
システムエンジニア2年生として
過酷な業務に追われながらも、
日々の製作にも勤しんでしまい、
枕を鼻血色に染めている。

可愛い嫁と
犬が欲しいと思い始める今日この頃。

【吉村麻之作品集】

星のない空の下で
雨のあと、晴れの前。
ごがつのそら。 / はちがつのゆき。
こぼたとすばる
雲のない雨空の下で

こんの たかし
イラスト 今野隼史

1981年生まれ。秋田県在住。
イラストレーターと自称するものの、
一人で手掛ける作品は
メイドさんマンガやら大根RPGやら。
節操のない創作には定評がある(かも)。
いえいえ、ちゃんと挿絵も描いてます。



爆破系魔法少女

まぢかる ゆきちゃん

The Deadly Angel

第1巻 激戦! ベーリング海!

このアニメには
暴力シーンや
グロテスクな表現が
含まれています。

デッドリーエンジェルまぢかる☆ゆきちゃん ①

吉村麻之・今野隼史



「あああ…ローンがまだ20年残ってるのに…」
「てへっ☆」
瓦礫と化した一般住宅。そんな尊い正義の犠牲も可愛さで全部カバー♪
それが、悪の軍団ニョッカーから世界を守る魔法美少女まぢかる☆ゆきちゃん!
今日も必殺の「まぢかるどろっがきっく」は敵に当たらず、そのまま一般家屋へ大炸裂だっ☆

「お、おい魔法少女! 流石にそれはやりすがすっ。

「貴様様の永眠に感謝しちゃいます」

頭蓋が砕ける音。倒れるニョッカー。私が隙を作れば、まぢかる☆たなちゃんのまぢかる直刀が一撃撲殺☆
小さなお子様には「ほんのちょっぴり」酷な血塗れ画像だけど笑顔で無修正放映!
今日もPTAからの抗議電話がオフィスに殺伐と鳴り響く!

次々と現れる謎の怪人、ニョッカー。果たして私達は世界に平和を取り戻せるのか!?

頑張れゆきちゃん! 負けるなゆきちゃん!
『まぢかるゆきちゃんに家を破壊された人を励ます会』の会員は一万人に近づいているぞ!

貴方のハートにトラウマを強制プラグイン♪
『デッドリーエンジェルまぢかる☆ゆきちゃん』は、73チャンネル
月曜19時から大絶賛放送中!

来週も再来週も絶対見てね!
見なかったら君の三親等以内の誰かの鎖骨がブチ骨折っ♪


防げない。
触れられない。
抗えない。
逃げられない。

コールネーム、蒼腕の魔女。
その手が為すのは、
圧倒的武力による殲滅。強圧的撤退。

「 貴方の決断に感謝します 」

私は立ち向かう。有希の為に、逃げる為に。伊勢崎多奈は、そういう信念で動いている。

雲の ない 雨空の 下で
Under the rainy sky without a cloud



遠野有希三大行動原則

1. 自分の正義を貫く事。
2. 人生に妥協しない事。
3. 常に胸を張って歩く事。

「逃げるよ！」

私は逃げる。私の為に、正義の為に。遠野有希は、そういう信念で出来ている。

そして神は貴方に言った

「このパンが欲しければ、手遅れから逃げることだ」

Pe'z 『Amny』





雲のない雨空の下で

Under the rainy sky without a cloud

CONTENTS

- 6 FirstSteps, Falling.
- 14 Escape 1. 渡瀬町東商店街撤退戦
- 56 Escape 2. 千年谷市上空六百フィート空撃戦
- 102 Escape 3. 伊勢崎多奈による謙虚で律儀な情報戦
- 154 Escape 4. 新4号国道追討戦
- 182 Escape 5. 遠野有希による我儘で身勝手な戦争
- 234 Escape 6. 遠野有希三大行動原則 その4
- 254 LastSteps, Sounding.
- 260 あとがき

Under the rainy sky without a cloud
Mayuki Yoshimura + Takashi Konno 2007.5



First Steps, Falling.

追われている。だから、逃げている。

状況はどこまでもシンプルで、行動はどこまでも緊迫していた。

ちとせだにし
千年谷市を縦断する国道4号線。時速七〇キロで黒のセダン^{ちとせだにし}は走る。

三階層程度の中規模小売店が立ち並ぶ、中途半端な日本の市街地が窓越しに流れていく。

街路樹として等間隔に植えられたイチヨウは鮮やかな黄色に染まり、晩秋の青空に綺麗なコントラストを描いていた。

バックミラーを見れば、空色のワゴンが後方五〇メートルの距離を保ったまま、同じ速度で追走しているのが見える。この状況が既に四〇分も続いていた。

「逃げる以外の対処は無いですか!?!」

助手席の少女は、自分の声に焦りが籠っていた事を少しだけ後悔した。焦らせた所で状況の打開に繋がらない事は理解していたつもりだった。

発言を恥じるようにストレートの長い黒髪を僅かに揺らし、バックミラーに注意を戻す。黒の双眸は鏡越しのワゴンカーを睨むように凝視し続ける。

髪と同じくらいに黒いミディドレスとショートボレロを纏った姿は、人によってはピアノコンサート用の衣装に見えるだろうし、少々奇抜なカジュアルファッションに見えなくもない。

膝までを覆う黒のブーツには、大仰なベルトと金具が数本巻かれている。

デザインよりも走りやすさを重視した物だが、彼女はそれが気に入っていた。

黒で包んだその姿を『西洋童話の魔女みたい』と言われた事もあったが、言いえて妙だと思ったのを僅かに思い出す。

路上停車中の車の脇をすり抜け、車内には右向きの遠心力が発生する。フロントガラスにイチヨウの葉がぶつかり、後方へと流れる。

車内には、少女の他に三名の男がそれぞれ周囲に注意を向けていた。

年は二十代後半のように見えるが、一人だけ十八歳の少年がいることを彼女は知っているし、全員の名前も食べ物の好みも知っていた。

ビジネススーツに身を包んだ姿は一般的なサラリーマンにしか見えない。

差異は、名刺の代わりに小型のゴム弾銃が内ポケットに忍ばされている事だけだった。

車内には張り詰めたような緊迫感が漂っている。鳴り続けるFMのラジオからは流行のナンバーが流れていたが、気に留める余裕は誰にも無い。

「多奈たな。今は逃げるしかないんだ。……いや、違う。逃げるっていうのは最良の選択肢だ。俺らは逃げれるんだ」

運転手は半ば自分に言い聞かせるように言った。エンジンの駆動音が響き、速度メーターは八〇キロ

を超え、九〇に近づいていく。

多奈と呼ばれた少女はその男の顔を覗く。

スーツの上に黒いコートを着込み、シヨートレイヤーの黒髪がエアコンの風と車内の振動で僅かに揺れている。

七歳離れた兄の表情には若干の焦りが、前方を見つめる瞳には決意の意思が浮かんでいた。

「確かに、多奈ならば後ろの車を数秒でスクラップにすることも出来るかもしれない。……けれども、逃げる。俺らが無事で、あいつらも無事。これがベストなんだ」

「……ごめんなさい、兄さん」

「不良品だったんだ。多奈のせいじゃない」

多奈は自分の右手首を見つめる。

模様は一切無いシルバークラッシュには、一筋の亀裂が縦断していた。

右腕に秘められた力を他者に感知させない為のアイテムであり、それこそが監視の視線を多奈から逸らす為の唯一の手段だった。

この逃走劇の発端は『腕輪が不良品だったので見つかった』という、単純な理由から始まっている。「追跡車を撒くぞ！ 適当に掴まってろ！」

脇道に左折したのは、殆ど言葉と同時に。タイヤからは高音の悲鳴が上がり、後輪は運動エネルギーを殺しきれずにスライドする。

車内には強烈な慣性が発生し、多奈の頭は運転手の兄の肩に思いつきりぶつかった。長い髪が一本、

サイドブレーキに絡まって僅かな痛みを生む。

車はギリギリで二車線を維持出来る様な細い住宅街路を、速度は八〇キロのままに走り抜けた。

「通行人がいませんように！」

無茶苦茶な祈りの言葉と共に、車は停止線で止まることなく右折する。後部座席から小さな呻き声が聞こえ、静寂の流れる平和な住宅街にはタイヤの悲鳴が響き渡った。

祈りが通じたのかは定かではないが、右折後の街路には人影も見えない。カーブで殺されたスピードを蘇生させるように、エンジンの駆動音が鈍く響く。速度メーターは八〇に近づいていく。

乗員には落葉を終えた街路樹を見る暇も無い。後輪に巻き上げられた枯葉が空に舞う。

「願わくは、次も、その次も、通行人がいませんように！」

強烈な慣性を生み出しながら車が左折する。道幅は車が一台通過出来る程度。

突き抜け、右折する。エンジンを唸らせ、すぐさま左折。上下左右に車はバウンドする。進行方向が変わる度、乗員達の体は揺れに揺れた。

十一月二十四日。雲のない、平和な青空の下。陽光は眩しくて、温もりは淡かった。

伊勢崎多奈はフロントガラス越しの空を見上げる。慣性に従うままに揺れる頭の中で、あと数十分後には平和で穏やかな日常へ戻っていく事を強く信じ、願っていた。

* * * * *

「兄さん。とりあえずは退けたようです」
何度頭が揺れたかは数えていなかった。

バックミラーに追跡していたワゴンが映っていない事を再度確認し、胸に食い込んだシートベルトを緩めながら、多奈は運転手に告げた。

渡瀬ニュータウンと書かれた看板を確認し、先程まで駆け抜けていた真新しい住宅街の名前を知る。眼前には一直線に伸びる車道。車内には安堵の雰囲気の流れた。

後は大通りに出て、ちゃんと作動する腕輪を受け取るポイントに向けて走ればいい。

「ふう……。これで当分は大丈夫だろう。今のうちに休んでおくんだ、多奈」
「はい」

多奈は柔らかい笑顔を浮かべ、隣でハンドルを握る兄を見つめた。

寝る事を選択し、瞼を閉じようとした、その瞬間。

「……あ……っ!?!」

『飛び出し注意』と書かれた看板の裏から、人影が現れる。

反射的に踏まれたブレーキペダル。先程よりも甲高い声でタイヤが悲鳴を上げる。

進行方向に立ちすくむ人影が多奈と同年代程度の少女と気づいたと同時に、殺しきれない速度がその少女に衝突することに気づく。

呼吸も出来ない一瞬の中、その少女と目が合う。丸く開いた目からは驚きだけが映っていた。

間に合わない。重たい鉄が彼女を破壊する。誰もがそう思った。そして、誰もが願わなかった。

だから、伊勢崎多奈は選択する。

「……上につっ！」

ばんっ！

その右手で、ダッシュボードを思いっきり叩く。

瞬間。

慣性は変わらない。しかしながら、次の衝撃音は聞こえない。ただ単に道を歩いていたという理由で命を落とさねばならなかった少女の衝突音は聞こえない。

慣性は変わらない。速度も変わらない。ただ、フロントガラス越しの景色だけが変わっていた。

一面の青空。何の隔たりも無い、一面の青が広がっていた。

地上十メートル。瞬間的に、進行方向を上に変えた、車は、まるでイルカのジャンプのようなシルエツトで、原色の青空へと跳ね上がっていた。

十一月二十四日。雲のない、平和な青空の下。陽光は眩しくて、温もりは淡かった。

伊勢崎多奈はフロントガラス越しの空を見上げる。重力加速度に従って落下を始めた車内から、あと数十分後には平和で穏やかな日常へ戻っていく事を強く願ひ、同時に諦めた。

これは、夜と、血液と、足音の物語だ。
もしかしたら、ひたすら逃げ続けるだけの話かもしれないし、
少しだけ皮肉的な、ありふれた話なの
かもしれない。

これは、夜と、血液と、足音の物語だ。

そして、きっと。正義の物語でもある。



渡瀬町東商店街撤退戦

Escape 1.

1.

「ああーっ！ 嫌になるー！ 毎日毎日勉強勉強勉強勉強ーって！ まったく、何が楽しくてこんな事するんだかつ！」

『……大学に入るため』

「んなことはわかっているっつのー！ ……くうっ！ 折角の……折角の青春時代なのにー！ 青春かむばーっく！」

携帯電話を左手に、握った右手を悲しさと悔しさとで震わせて、遠野有希は過ぎ去りそうな青春に叫んだ。

電波で伝わらないオーバーリアクションをする度に、若干赤茶がかったショートボブの髪が揺れる。好奇心を凝縮した子供のような瞳には、窓の先に広がる十一月の青空を映していた。

差し込む柔らかな陽光が、折り癖のついていない参考書が置かれた机と、本棚に置かれた化粧水とライフル弾の薬莢を照らしている。

電話越しの幼馴染に何度も『女の子の部屋じゃない』と言われ続けている部屋だが、有希はそのアンバランスさが気に入っていた。

『何言ってるんだか……。もう高校三年生の秋だよ？ 青春時代はもう終わったようなものじゃないっ？』

「終わらせてたまるかーっ！　まだあたしは夕陽に向かって走ったり、日本全土を騒がせるようなこと
もしてないんだよ!？」

『しないでもいいわよそんなの……』

「くっ、老けた高校生め……」

人には情熱が必要だ。有希は心の中で断言する。

少なくとも、遠野有希にとっての人生の全てと言ってもいい。その上にロマンスや逆境や青春がトツ
ピングされれば最高だ。

その為ならば、いかなる努力も苦勞も惜しまない。むしろ、その努力と苦勞こそが目当てなのかも
しれない。手に入らないからこそ、人は必死に手を伸ばすのだ。

誰に語るわけではなく勝手に自分の中で盛り上がってみる。しかしながら、そんな熱いハートと裏腹に、
目の前の参考書達は徒党を組んでクールな現状を伝えていた。

思わず溜息をこぼす。青春溢れる高校生活の最後のイベントが参考書とノートと友達になる事だなん
て、何と悲しい結末なのだろう。

——散歩でもしようかな。そういえば、そろそろイチヨウの見頃だったっけ……。

窓の外に広がる、雲一つない快晴。きつとイチヨウの彩りは綺麗に映るだろう。想像は胸を高鳴らせ
た。

——自分の正義を貫く事。人生に妥協しない事。常に胸を張って歩く事。

遠野有希三大行動原則を心の中で唱え、自分の考えを完結にまとめる。

——私はイチヨウが見たい。勉強もそれなりにやる。だから、どっちもやる。私は人生に妥協しない。決定を下せば後は簡単だった。携帯電話で喋りつつ、ノートを閉じ、参考書を閉じる。思わず頬が緩んだ。

しかしながら、それも僅かな時間だ。散歩は一時間もせずには終わる。例えイチヨウが散り終えても、参考書達は恋人のように有希を待ってくれている。

数時間後には椅子に座り、彼らと熱い視線で見つめ合う事は避けられない。

——何かこう、物凄いハプニングでも起きちゃわないかなあ……。

携帯電話を握りながら、立ち上がる。

——そう、例えば。

「くうっ、この胸を熱くたぎらせるような事起きないかなーっ！ 黒服のお兄さんに追いかけるとか！」

* * * * *

電話が終わって、お気に入りのトレンチコートを着込んで家の外へ出る。

木枯らしの吹く季節。冷たく澄んだ空気を目一杯吸い込むと、体までもが澄み渡っていくような気がした。

チエックのミニスカートをなびかせ、ミリタリー風の編み上げロングブーツの足音を高らかに鳴らしながら、枯葉の舞う住宅路を歩いていく。

腕を上げて背筋を伸ばす。見上げた空は、原色の青をどこまでも広げていた。

遠野有希。千年谷高等学校三年C組三十一番。身長一五四センチ、体重……普通。スリーサイズは未
来への希望で一杯という意味で、発展途上国。

クラスの中では、明るくて騒がしい元気娘として大ブレイク中。

残念ながら、予知能力無し。

2.

——マグロの一本釣り。

混乱した頭で物事を考えるべきではないと、口をあんぐりと開けっぱなしの有希は思った。

見上げた視界に映ったのは、青空、雲、小鳥。そして、車。

太陽の光を逆光にして、有希に突撃してきた黒のセダンが、イルカのジャンプのようなシルエツトで

上空に浮かんでいた。

エンジン音が聞こえる。タイヤは高速で空回りをし続けている。

空気は決してタイヤに運動エネルギーを与えない。事実はこちら前の事だが、光景はひたすらに異常だった。

散歩に出て五分と経っていない。鼻歌交じりのいい気分で少し歩いて、コンクリの塀が高くて見通しの悪い道を抜けたら轆かれそうになり、次の瞬間には車が上空に吹っ飛んでいた。

思わずぺたんとして座りこむ。硬く冷えたコンクリートは氷のように冷え切っていたが、その感触は爆発しそうな鼓動にかき消された。

「……え、えーと、遠野有希的状况把握開始。車に轆かれそうになりました。はい、把握。んで、目の前でいきなり車が垂直に飛びました。はい、把握。さあ、ここから出てくる答えは！」

一秒もせず、車は少しずつ落下し始めた。重力加速度に従って、異常な車が正常な落下軌道を描く。臉がさらに大きく開くだけの瞬間。逃げる暇も無く、車は地面へと接近し……。

「……夢を見ているんだね、あたし」

くるりと、一回転。まるで車輪が回るように、車が何の反動も無しに、物理法則を全力で無視しながら空中で綺麗に一回転を決めて、静かに着地した。

住宅街に静寂が広がる。先程まで上空十メートルに吹っ飛んでいた車は、数秒後の事が全部嘘だったかのように、何の傷も、何の衝撃も無く、そこに在るのが当たり前のように有希の目の前で止まっている。

——落ち着け！ とにかく落ち着け遠野有希！

状況だけがあまりに現実離れし過ぎてている。鼓動が止まらない。呼吸が乱れっぱなしになっている。頭の中が真っ白になる。

ミニスカートから露出した太ももがコンクリートの冷たさを伝える。車からのエンジン音と排気ガスの臭いを感じ取れている。濃密過ぎる現実を有希は悲しいまでに理解した。

——夢じゃない……！！ ……ああもう！ 容赦なく現実！

混乱する有希を放置して、事態は次々に進んでいく。『着地』した車からキーロックの解除音が聞こえ、運転席と左右の後部座席がほぼ同時に開いた。

中から現れたのは、サングラスをしたスーツの男が三人。

後部座席から出てきた男二人は右手を内ポケットに入れ、有希を警戒するような視線を送っていた。

——何て分かりやすい悪人スタイル！

どこかのエージェントのような風体の三人を、有希は勝手に悪人と断定した。少なくとも、こんな住宅街で顔をサングラスで隠す理由があるのだ。普通では無い事は確かだった。

ほのぼのとした住宅街。彼ら三人の格好は質の悪すぎるB級映画のように、どこまでも浮いていた。「……確実に見られましたよ。どうします？」

右後部座席から出てきた男が、運転席の男に問いかける。視線は有希に固定したままだった。運転手の男は小さく舌打ちする。

「気は進まないが、このまま帰らせるわけにも行かない」

——無事に帰れると思うなよお嬢さん……。

有希の悪人フィルターを介して、相手の言葉は若干ニュアンスを変えた形で翻訳される。

——見られたからには死んでもらう！

勝手に次の言葉を連想し、男達の内ポケットに仕込まれた拳銃で撃ち殺される自分の姿を脳裏に映した。

——に、逃げなきゃ……！

そう思うも、有希の足は恐怖で震えていた。走って逃げるどころか、立ち上がる事すら怪しい。

スーツの三人組は有希を用心深く見ながら、何かを話し合っている。大して屈強とも言えないが、だからと言って女子高生一人では何の対抗も出来そうに無い。

——それでも……それでも！

頭の中のレッドランプが爆音のように鳴り騒ぐ。逃げなきゃ、逃げなきゃ。その単語だけが頭の中を飛び交う。

「……最低限、記憶は消さないとならないでしょうね」

左後部座席だった男の一言は有希にとつて、目の前が真っ暗になるかと思うような衝撃を生んだ。

「とりあえず、館長に指示を仰ごうと思う。この事態は、俺らで判断していい状況じゃない」

運転手の席の男はそう言つて携帯電話を取り出す。

長身にショートレイヤーの黒髪をなびかせた涼しげな姿に、有希は案外いい男でないかと思ひ、思つている余裕があるのかと自責した。

他二人も、僅かに聞こえる通話音を聞き取るためか、男の携帯電話に視線を向けていた。

——今なら……！

岩でも担いでいるのかと思える程に、立ち上がるのは力を要した。

足は恐怖で未だに震えている。若干の情けなさを感じたが、今はただ、走るだけの機能があればいい。

車の黒いボンネットを見る。フロントガラス越しの助手席には、黒服の少女……多奈が驚いた顔で有希を見つめていた。轢かれる瞬間のように目が合う。

——この子も被害者って事……!?

有希の胸が一気に熱くなる。何をされるか分からない恐怖は胸を潰そうとしていたが、それ以上に目の前の男達に怒りが沸いた。

怖かった。ただ、助手席の少女もずっとこんな恐怖を感じていたのだと思うと、男達を睨みつけずにはいられなかった。

——決めた。あの子を助ける。助けて、逃げる。あたしは、自分の正義を曲げない！

恐怖は怒りと信念に消えていた。今、一人で逃げる事は出来るかもしれない。けれども、助手席の女の子を置いて逃げたら、自分は一生後悔し続けると確信した。

——自分の正義を貫く事。人生に妥協しない事。常に胸を張って歩く事。

遠野有希が遠野有希であるための三箇条を復唱する。混乱していた思考を、目的を達するための形に再構成していく。身体感覚がシャープになっていく。自分の目に意志の炎が灯ったのを感じる。

黒服の一人が有希に気づく。サングラス越しの視線を感じた。

——一発ぐらいぶん殴ってやりたい所だけ……!

運が良かったのか、あるいは女子高生如きに逃げられないと考えていたのか。どちらにしろ、助手席までのルートに男達はいない。

たんっ。テニス部時代に培ったステップで、後方に一步。右に数歩。すぐさま助手席のドアを思いっきり開ける。男は驚いた声を上げた。

助手席に礼儀正しく座っている多奈は、驚きで一杯といった表情で有希を見つめている。右手を伸ばした。

「逃げるよ!」

「え? ……あっ!?!」

伸ばした右手で、多奈の左腕を掴む。理解を待っている暇なんて無かった。そのまま全力で引っ張り、無理矢理に車から引きずり出す。

助手席のドアを蹴り上げて、向かってくる男を牽制する。

「途中でコケてもいいからね! 引き摺ってでも逃げるんだから!」

足に力をこめて、一気に駆け出す。繋いだ手を思いっきり引っ張る。肩を脱臼させてしまうかもしれないと思う余裕は無い。

思考が吹っ飛んで、鼓動が爆発する。足だけが暴れるように動く。足が外れてしまうのではないかと思うくらいスピードで、住宅路を一直線に走り抜ける。

逃げる二人の脇を空色のワゴンが通り抜けた事など、有希が気づく事など無かった。

「……はあつ、はあつ……！」

息が上がる。心臓が痛いくらいに暴れる。視界が光度を上げて、頭の中が真っ白になっている。勝手に大地を蹴り上げる足が、前進のエネルギーを生み出していく。

状況は意味不明。もしかしたら危険かもしれない。そんな事を考えながらも、飛び跳ねたい気分だった。

自分の周りに、物凄い事が起き始めている。そして自分が今、その舞台に立っている。そう思うだけで頬が緩んでしまうのを抑えられなかった。

——そう！ あたしはどこかで、映画の主人公になったみたいな、こんな瞬間を待っていたっ！

いつもの平和な住宅街に二人の足音が響く。トレンチコートがマントのようにはためく。路上の枯葉が走り抜ける風圧で僅かに舞い上がった。

揺れる視界で青空を見上げながら、有希は心で叫んだ。

——ああ神様！ 願いを叶えて下さって有難う御座います！ ……でも状況がバイオレンス過ぎで

す！ 後で三発殴らせろっ！

* * * * *

一キロは走ったかもしれない。もしかしたら数百メートルかもしれない。

感覚は曖昧なまま、爆発しそうな鼓動を鎮める為に、有希の足はやっと活動を停止した。

「……はあつ……。はあつ……」

膝に手を当て、有希は乱れに乱れた呼吸と痙攣する足を落ち着けようとする。

「……あ、あの……」

よく通る、高音で落ち着いた声。発したのは多奈だった。

有希に握られっぱなしだった左腕を押さえながら、息一つ切らさず、少し切れ長で伏せ気味の瞳を有希に向けている。

満面の笑顔で、有希は多奈に答えた。

「いやー、危なかったね！ 大丈夫？ 怪我は無い？」

「あ、はい。大丈夫です。と言うよりも、」

「あー！ 滅茶苦茶怖かったー！ いやもう、六回は死んだと思ったね、六回は！」

「そ、そうですか……」

「さあー、これからバシバシ逃げて、逃げて、逃げまくるぞー！ バイオレンス・エスケープ・アクションがこれから始まるのだよ！」

「は、はあ……」

多奈は不思議そうに有希を見つめていた。実際は、あんなに走ったのに一つも息を切らさない多奈の方が不思議だったのだが、有希のテンションは用心深さという単語から背を向けて驀進し続けていた。

「しっかし、一体何だったんだか、あの連中。いきなりあたしを轢きそうになったら車はぶっ飛ばし、一回転して着地するし。しかもいきなり、『無事には帰さないぜ』って！」

「えーと……」

「特に運転手つぼいのが一番悪者つぼかったよねー。何ていうかさ、笑顔で人殴れるタイプだよ、アイツ」

「あ、あの、すいません……」

有希のガトリングトークに圧倒されている多奈は、言葉の掃射の中で何とか発言権を勝ち取った。躊躇いがちに、一言。

「……その人、私の兄です」

有希が土下座するのに、一秒もかからなかった。

「しよぼーん……」

数分前に駆け抜けた住宅路を、有希は肩を落としてトボトボと歩いていく。

多奈は有希の落ち込み様を不思議そうに見つめながら、隣を歩いている。

その中、多奈は先程の一連の出来事を話した。

運転手は多奈の兄であり、他二人も友人だという事などの真実を含めつつ、重要な箇所はしっかりと濁している。

『定期健診へ向かう途中、敵に追われてました』とは言えなかった。

そのせい、多奈の説明は淡々と、どこか感情の籠っていない口調で伝えられる。眉毛を八の字にしながら、有希はその説明に頷いていた。

——正直、嘘っぽいけど……。もう、どうでもいい事かなあ……。

有希にとっては真相がどうあれ、先程からの出来事は多奈を兄に返す事で終了する。謝る言葉も複数考えておいた。

「しょぼーん……」

ケーキを目の前に出された後でお預けをくらったかのような気分だった。

もしかしたら、映画の主人公のようなロマンスとバイオレンスに満ちた逃亡劇が始まるかもしれないと、そんな淡い期待は早々と砕かれてしまった。

これからの有希に待っているのは愛しい参考書達だ。強く抱きしめて放さない、熱烈でうんざりする時間が待っているのだ……。

汗が冷えてきたのか、手袋もしていない手に十一月の寒さを感じる。日は少しずつ傾き始めていた。二つの足音を響かせながら、角を曲がる。

有希が轆かれそうになった場所には、先程のセダンが停まっていた。囲むようにスーツの男が三人。少し離れた所に空色のワゴンが一台。

「いやあー。先程は妹さんを誘拐してスイマセンでしたー」

必殺の笑顔に強烈な台詞を添えながら近づくと有希はスーツの男を見る。途端に違和感が走った。

——あれ？ 何か小太りなのが増えてるような……？

三人の男全てが先程と別人になっている事に気づいた次の瞬間、スーツの男達の視線は多奈へと移る。途端、周囲には緊張した空気が張り詰めた。

「……っ！」

多奈の表情が一瞬にして険しいものへと変わる。先程までの落ち着いた雰囲気は消え去り、その瞳に冷静な激情を映していた。

さあーっ……。

波が引くような音を響かせて風が凧ぐ。イチヨウの葉が空中を通過する。周囲から、風音以外の音が消える。

緊張が広がる。ガラスが弾ける瞬間のような、硬質の緊張。

スーツの男が驚きと若干の怯えの表情を浮かべ、口を開く。

「……蒼腕そうわんの魔女……!!」

ばあんっ！

破裂音のような足音。スーツの男の言葉と、有希の左手が多奈に思いつきり引つ張られるのは同時だった。

有希の足が地上から離れる。視界が高速で動き出す。

「な、な、何ー!?」

「逃げます！」

たんたんたんたんたんっ！

二倍速の足音。異常なスピードが一気に距離を離れていく。有希は、突っ走るバイクの後ろを掴んで走っているような感覚を味わっていた。

「うわっ、うわっ、うわっ!?! 早いっ、早すぎるって多奈っ!」

「有希! 説明は後にします! 今はとにかく一緒に逃げてください!」

「え、え、え!? これって何!? 多奈って実は、悪に追われる薄幸の美少女とかいう設定!?!」

「何でもいいですから! とにかく走ってください!」

「くあーっ! 熱い展開になってきたあーっ! おーけいおーけい! 地の果てまでも逃げまくってやるさー!」

「何で心底楽しそうなんですかつ!?!」

足音が響く。背中越しではスーツの男が追撃を諦め、張り裂けそうな大声で叫んでいた。

「こちらグループB! 魔女を確認! 繰り返す! 魔女を確認! 魔女は徒歩で渡瀬駅方向へ逃亡

中! 必ず拿捕せよ!」

——魔女?

走りながら、有希は多奈を見つめる。長い黒髪、黒のドレスに黒のブーツと、黒一色の彼女は確かに魔女という言葉が似合っているかもしれない。

足音が住宅街に響く。叩きつける風が髪の毛を巻き上げ、トレンチコートは生き物の様にはためいた。

「あ、多奈! その角を右!」

「了解です!」



角を曲がった先に広がったのは、満開のイチヨウ並木だった。黄色の吹雪の中、硬質な足音と散ったイチヨウを踏む音が同時に響く。走り抜けた風圧で葉が巻き上がった。

「うひゃー！ やつぱり見ごろだったねー！」

状況と合わない有希の声に、多奈は少しだけ歩調を緩め、周囲に広がる世界を見つめた。

十一月の凜とした空気。等間隔に植えられた太く巨大なイチヨウの木。雨のように散り落ちる黄色の葉。空の青とのコントラストが幻想的だった。

圧倒的な黄色の世界。思わず見惚れそうになる感情を多奈は必死に抑える。

——これは後。今はただ、この状況から逃れる事に集中しなければ……。

たんっ、たんっ、たんっ。足音が一定のリズムを刻む。視線の端にはイチヨウの木が何本も通り過ぎていく。

「……はあっ、はあっ……！」

有希の荒い呼吸音。足が一步を踏み出す度、繋いだ手が上下に揺れた。

「有希、ごめんなさい。追手はいませんが……距離を離したいんです。もう少しだけ、頑張つて下さい」
「はあっ、はあっ……。お、おっけい！ フルマラソンでも日本縦断でも何でも来いっ！ はあっ……。」

こっ、これでも、体力には、自信、が！」

多奈が振り向くと、有希は息を絶え絶えにしながらも笑顔を返した。その目は玩具を貰った子供のように爛々と輝いている。

——彼女を、守らなければならない。こんな事態に巻き込んだのは私達。私は責任を持って、普段の日常に戻してあげないとならない……。

多奈は胸に使命感を灯した。

ほどよい緊張と明瞭な思考が生まれる。現状で考えられるだけの未来を想定して、覚悟を行い、対処を考えなければならぬ。

走りながら、多奈は有希の手を握った右腕を見つめる。そこには青色の光が淡い霧のように漂っていた。

——ターゲット、有希の重力ベクトル。垂直方向から、徐々に十五度前方へ移行。

青の光は、多奈の意志に反応するように輝きを増した。同時に、有希の足音のテンポが加速する。

「……あ、あれ!? こっつて下り坂だったっけ?」

視界には平坦なイチョウ並木が映っている。その中で有希は、急斜面を駆け下りている感覚を味わっていた。

「うわっ、うわっ! と、止まらないっ!」

「私達は逃げてるんです! 止まる必要はありません!」

足音を高らかに鳴らし、加速していく。切り裂いた風が地面のイチョウを盛大に舞い上げた。並木道を走る自転車に追いつき、追い抜く。

二人は八百メートル続くイチョウ並木を一気に駆け抜ける。

そのまま駅前の商店街へ弾丸のように突っ込み、有希は理髪店の看板に激突した。

3.

渡瀬町東商店街唯一のファーストフード店の二階席。

周囲の壁はガラス張りで、暮れ始めた日の光が柔らかく差し込んでいる。

一時的な隠れ場所とはいえ、周囲はあまりにも平和な空気で満たされていた。

多奈は右手にチキンカツバーガーを握り、頬にマヨネーズをつけたまま、真剣な顔を有希に向けている。

「……有希、驚かずに聞いて下さい。……私は超能力りよわぶっ」

有希に突き出された紙ナプキンが多奈の頬を拭う。

「あははっ。多奈って意外に可愛さ指数高めだねー」

一気に頬を赤くして俯く多奈を、にこにこしながら有希は見つめる。

「ゆ、有希……。真剣な話をしようとする時に、邪魔しないで下さい……」

「ごめんごめん。今時、頬っぺたにマヨネーズくっつけて気づかない娘なんて久しぶりでさー」

「うう……」

多奈は思わず『こういう店に来たのが初めて』と言いそうになったが、寸前で言葉を飲み込んだ。それ以上に、伝えておかねばならない事があった。

「と、とにかくですね、有希。真剣に聞いてほしいのですが……」

「うん、何？」

多奈は真剣な顔で、有希の目を見つめる。

一呼吸置いて。

「私は、超能力者です」

「へえ、そうなんだー」

多奈は右腕を青く光らせ、フライドポテトを空中に浮き上がらせた。

有希はオレンジジュースをストローで吸い込み、口の中で広がる酸味と甘味を楽しんだ。

フライドポテトがくるくると回る。オレンジジュースのカップから、ずずずつ、という音が鳴った。

一呼吸置いて。

吹き出した。

飛散したジュースをふき取り、テーブルに跨って、『あたしの時代が来たー！ サイキックアクションだー！』と叫ぶ有希を何とか席に戻した後。

周囲の視線を感じながらも、多奈は説明を始める。

「私には、鳳仙花ほうせんか、という、人の願いを叶える種が植わっています」

「種？」

「はい。強い願いによって発芽し、その願いを開花させる……そういう、種です。そして、願いを叶えきった時。植わっていた鳳仙花は弾け飛び、次の人へと飛んでいきます。鳳仙花という名前は、触れた

瞬間に種が弾けて飛び散る植物から取っているそうです」

「ほえええー……。夢を叶える種？ 何かロマンチックだねー！」

目を輝かせる有希に、多奈は首を横に振った。

「……いいえ。いい事ばかりではありません。一度開花した人間が鳳仙花を失うと、開花した能力に関する記憶を全て失ってしまいます。それに、開花して手に入れた能力を行使する際は代償が必要になります。代償は人それぞれですが」

「代償？ 多奈も超能力使うと何かあるの？」

「……私は、開花した直後に代償を全て支払いましたから……」

多奈は目を伏せて俯く。両親を失う事になった、など、初対面の有希に言えるはずも無かった。

悲しげな雰囲気放つ多奈に、有希はその内容を聞くのを止めた。

「そーいや、その鳳仙花つてのは願いを叶えるんだよね？ 多奈の願いつて何だったん？」

「幼少の頃だったので原因は憶えてませんが、変えたい、という意志です。それが開花して……」

フライドポテトが再び宙に浮きあがった。ラジコン飛行機のように多奈と有希の間を8の字で滑空する。

「重力に限らず、全ての力の向き。つまり、ベクトル。私はそれを変える事が出来ます」

「おおーっ!!? ……ってことは、逃げてた時にいきなり道が下り坂になったのも、この超能力って事

!?!」

豪快に立ち上がり、有希はテーブルに両手を着いて多奈に言い寄る。多奈はチキンカツバーガーに齧

り付きながら、首を縦に振った。

「んきゃー！ おもしろー！ すごい事になってきたあー！」

有希は叫びながら横回転し、足をテーブルに引っかけ、『びたーん！』という音と共に顔面から床に激突した。

「……有希、落ち着いてください」

多奈の溜息と、倒れたままの有希のサムズアップは同時だった。

「……有希、説明を続けていいですか？ 時間がありません。私の居場所は常に敵に捕捉されています」
椅子に座りなおした有希の返答は、軍隊式の敬礼だった。

「ラジャーでありますっ！ ……って、え？ バレてるの？」

「はい。敵には、サーチャー、と呼ばれる鳳仙花を探し出す能力者がおり、常に私達を監視しています。普段なら……」

右袖を捲ると、多奈の右手首にはヒビの入ったシルバーレスレットが嵌められていた。

「……これが探查網を切り払ってくれるのですが、誤って故障したものを持ってきてしまいました。その為に追われている……間抜けですが、これが真相です」

「サーチャーって……。もうちょい気の利いたネーミングは無いのかー！」

「……有希、そこはあまり重要な所ではないんですが……」

有希は腕を組み、呆れたように首を横に振った。

「ロマンつてのを分かってないな。全く、折角の超能力だつてのに！　んで、そんなネーミングセンスのない敵って一体何なの？」

真剣な表情で、多奈は答えた。

「製菓会社です」

「ごんっ。有希がテーブルに頭をぶつけた音が店内に響いた。

「ええーっ!?!　悪の組織とか、悪の超能力者団体とか、そういうんじゃないの!?!　地味過ぎない、製菓会社って!?!」

「栄養補助食品や、入れ歯安定剤などを販売しています」

「あたし達、入れ歯安定剤の会社に追われてるのかーっ!?!」

「はい。それでも……。世界で唯一、鳳仙花の存在を認識している企業です。彼等は鳳仙花の研究の為に私達を狙い続けています。私は、彼等から逃れる為の施設で育ってきました。今回のような彼等の襲撃は時折発生し、捕縛された仲間もいます。そして」

「かつん。」

小さく音が響き、多奈の説明は中途半端に止まった。普通なら聞き逃してしまうような、革靴の微かな足音。

瞬間的に多奈は足音の方向を見つめる。視線の先、一階へ降りる階段の前に黒スーツの男が三人。

ハンバーガーのトレーを持つ事無く、サングラス越しの視線は明らかに多奈を見据えていた。場にそぐわない雰囲気撒き散らす男達に、周囲の客が不審な視線を向けている。

「……来ちゃったね、入れ歯安定剤の人達」

椅子を鳴らして、多奈と有希はほぼ同時に立ち上がる。五メートル先の男達と視線が交錯する。

一人の男は階段に待機し、二人がゆっくりと多奈達に近づく。

「あちゃあ……。退路、塞がれちゃってるし……」

「そうですね」

多奈の返事には焦りが一片も籠っていない。

「……有希。説明が途中になりましたが、伝えたい事はあと二点です。敵は鳳仙花を持つ私を狙っています。有希に手出しはしなはずです。あと、彼等は私を殺しません。ゴム弾銃やスタンガンと言った、鎮圧用の武装のみのはずです。ですから、私にもしもの事があっても、有希は安心して逃げて下さい。これは私達の問題ですから」

「断るっ！、置いて逃げる、なんて、あたしの正義感が許さないからね！」

胸を張って断言する有希に、多奈は小さく溜息をこぼした。

「……今までの説明は、ここでイエスと言ってもらう為のものだったので……」

かつん、かつん。二人の男は革靴をゆっくりと鳴らしながら近づいてくる。一般客のざわめきが一段階音量を上げる。

「……有希。これからまた走りますが、走れますか？」

落ちていた口調が、どこか現実感を帯びぬままに漂う。有希は走りっぱなしだった足の状態を考えて、素直に答えた。

「無理」

「分かりました。逃げます」

多奈は何も分かってくれなかった。さらにそのまま、一八〇度回転して後ろを向く。

「多奈？」

そこにはガラスの壁しかない。

高さにして三メートル、横幅十数メートルの、ただ単に外が見えるというだけの、壁。

多奈は人差し指を突き出し、まるでエレベーターのボタンを押すように、ゆっくりとガラスの壁にくっつけた。

もしかしたら、壁を透過するなんて能力もあるのかもしれない。そんな甘い妄想を抱く有希に投げかけられた言葉は、ロマンスの欠片も無かった。

「離れてください。破壊します」

腕を伸ばして人差し指を前に押し出す。多奈のアクションはそれだけだった。

「う、嘘だあ……」

分厚いガラスの壁が、か細い女の子の人差し指に押され、湾曲を始める。まるで薄手のカーテンを押しているような、一切の抵抗感を取り除いた湾曲。

多奈の右腕には青色に発光する霧が帯び始めていた。抵抗力のベクトルを逆向きに変えた魔女の指は、ガラス板をゆっくりと突き抜けようとしていく。

一秒もかからず、多奈の右手はガラスの膨らみに隠れて見えなくなる。多奈は更に指を押し込んでい

く。

ばしっ！

微かな音を立て、壁全体に無数の白の筋が走る。次の瞬間。

ぱあーん！

巨大な風船を割ったような破裂音を立て、ガラスの壁は粉々に砕けた。

光の雨。

落下する無数の破片は陽光を乱反射し、周囲に光を撒き散らす。きらきらと輝く破片は一秒の間だけ、周囲に輝く雨を降らせる。

その光景は幻想的で、破滅的で、見惚れてしまう程に美しかった。

見惚れる有希、そして目撃した全員が驚きに動きを止める中、多奈だけが素早く動く。

「うわわわっ!?!」

有希をいわゆる、お姫様だっこで抱きかかえ、破壊した窓の先へ飛び降りる。

重力を制御し、音もなく着地した多奈は暴れる有希を下ろし、手を繋ぎ、商店街を疾走した。人通りの少ない商店街が喧騒に包まれる。

「どいたどいたどいたーっ！ 今日のあたしは問答無用で止まらないんだからー！」

周囲の悲鳴とざわめきの中、当人はまるで他人事のように走り続けていく。

八百屋『みずたに青果』は有希に売り物台を蹴り飛ばされ、大根三本を砕き折られた。

セトモノを宅配中だった運送業者の青年は多奈に吹き飛ばされ、陶器の破壊音を聞いた。

手を繋いだ二人は商店街を疾走する。走り抜けた後には悲鳴と怒号が置き去られていく。

「多奈っ！ 逃げるって言っても、どこまで逃げるのさ!？」

「千年谷公園です！ 不測の事態が起きた場合は、事前に決めたポイントで兄と落ち合う事になっていきます！」

荒い息、高まる鼓動。風圧にトレンチコートをはためかせながら、有希は満面の笑顔を浮かべていた。

「よーっし！ 楽しくなってきたねー！」

空と商店街が赤く染まり始めていた。視線の先の鮮やかな夕陽は、疾走する二人の影を長く伸ばしていた。

4.

間違いと言うものは、瞬間の出来事ではない。有希は常日頃からそう思っている。

何かを選択し、間違ったと思った時は、大概の場合はそれ以前からの選択を間違っている場合が殆どなのだ。

例えば、調理実習で熱々の鮭のムニエルを思いつきり友人の顔面に叩き付けた間違いは、フライパンが熱くて思わず一本釣りのように振り上げてしまった事が問題ではなく、それ以前にフライパンの持ち

手に炎が当たっていた事を見落としていた事が間違っていたのだ。ちなみに、その際は結構真面目に謝った。

クリームシチューを注文した後にトマトスープが食べたくなかったとしても、それは事前からトマトスープを選んでなかった事が間違っているのだ。

自転車に乗っていたら電信柱にダイビングしてしまった場合も、ゲームに夢中で徹夜した事が間違っていたのだ。

そう。間違いは、積み重ねの結果なのだ。

後ろも左も右も黒服の敵がいたから、前に進んだ。進んだ先には歩道橋があって、その階段を登っていくと、しつかりと待ち伏せされていた。

これは歩道橋を登った事が間違いではなく、それ以前に『上手く追い立てられていた』事に気づけなかったという間違いの結果なのだ。

「……何ていうか……いわゆる絶体絶命ってやつっ!?!」

「前方に十名、後ろに七名。前後合わせて十七名です。……見事に囲まれましたね」
時間は夕暮れ。沈む太陽は赤く染まり、周囲は美しく赤色に染め上げられていた。

歩道橋の上、十七の銃口が有希と多奈に向けられている。

下には休日なのにロクに車も通らない道路が伸び、寂れた町並みには通行人の一人もいない。
地上五メートルから空を望む。赤色に染まる晩秋の秋空には朱色の雲が浮かんでいる。

「私の後ろにいて下さい」

多奈は有希をかばうように左腕を伸ばす。まるでお姫様を守る騎士のようだった。

間違いと言うものは、瞬間の出来事ではない。有希は常日頃からそう思っている。今、自分がすべき反応は、恐怖に怯える少女の反応のはずだった。

しかしながら、胸の鼓動が止まらない。あまりにも日常からかけ離れた事態が、楽しくて楽しくて仕方がないのだ。

一番致命的なこの間違いは、自分が生まれた時から間違い続けていて、きっとこれからも間違い続けていく。

それを一切後悔しないことが本当の間違いであり、それこそが遠野有希であるのだと、そんな事を思っていた。

数メートル先から向けられた銃口が、光を反射して輝く。その日は、夕日がとても綺麗だった。

「お初にお目にかかります、蒼腕の魔女。ついでにその他一名」

歩道橋の上。十七名の包囲から、一人の白衣の男が眼鏡のブリッジに指を当てながら歩み出る。年齢は二十後半。茶髪とねっとりとした口調が見た目の知性を粉々に粉碎していた。

「その他一名ってあたしか!?! 紛れも無くあたしの事かー!?!」

「おおう……。写真では拝見致しましたが、実際に見れば何とも美しい……」

有希の突っ込みを完璧に無視したまま、白衣の男は多奈の手を握ろうとした。

難なくその手は振り払われ、ぱしっ、という乾いた音が響く。

「ふふふ……。お敵しいですね、蒼腕の魔女……。もとい、伊勢崎様。私は二宮にのみやかずと一刃。我々はただ、伊勢崎様と少々のお話をさせて頂きたいのですよ。我々も好き好んでこんな鬼ごっこをしているわけでは無い事を、ご理解して頂けませんか？」

「十六の銃口を向けてなければ、もう少し言葉に説得力が出ると思いますが」

「おやおや、これはこれは失礼致しました。ですが、伊勢崎様ならば、我々の清い意志をご理解されて頂けると信じております」

銃からライフルまで、突きつけられていた十六の銃口は二宮の一挙動で下げられた。

有希は多奈に耳打ちする。

「ねえ多奈、逃げようよ？ 間違はなくこいつ変態だよ？ こんな場所で白衣だし」

「聞こえてるぞ小娘！ 白衣を馬鹿にするな！ これは全世界科学者全員のアイデンティティだ！ 言うなれば神より与え賜れた純白の法衣！」

大声で怒鳴りつける二宮に、二人は思わず一步引いていた。

「……多奈、やっぱり変態だよ」

「違う！ ……まあ、頭の悪そうな付属品娘には、この知性溢れる世界を理解出来ないでしょうがね」

「あー!? 誰が付属品だ!? 自分の人生、誰もが皆主人公って言葉を知らんのかー!?」

多奈は勝手に一触即発になる有希を腕で押さえ、二宮を鋭く睨み付ける。

「残念ながら、私は貴方達に髪も血も採取させるつもりはありません。研究材料にされるつもりは一切

ありません」

「おやおや、これは手厳しい……」

肩をすくめるポーズは、大仰過ぎて似合っていないかった。

「我々は紳士です。伊勢崎様にご来訪されるのであれば、後ろのオマケ娘も平和にご帰宅される事を保障致しますよ」

「脅迫する事が紳士の心ですか？」

二宮の笑顔は消えなかった。周囲の緊張感だけがゆっくりと高まっているのを感じる。

後ろで控えるスーツの男が、じりつ、と足音を立てた。

一時の沈黙の後、多奈が口を開く。

「……一つ聞きたい事があるのですが、答えていただけますか？ 返答次第では貴方達に従う事も考えます」

「ほほう……？ 私で宜しければ、何でもお答え致しますよ」

レンズ越しの二宮の目が一層細くなる。

「これで全員ですか？」

「は？」

「私を追っていたのは、これで全員ですか？ と、聞いているんです」

「真意が全く見えない多奈の質問。二宮の目が丸くなる。

「……何故、そのような事をお聞きになられるのです？」

「質問の答えだけ話してください」

多奈の言葉は年頃の少女とは思えない程に冷淡で、威圧的だった。

「……今、ここにいる十七人で全てもたります」

「……そうですか、ありがとうございます」

周囲の男達と有希は一樣に疑問符を浮かべていた。

秋風。飛ばされたイチヨウの葉が舞い上がる。歩道橋の上まで到達した葉は、夕日に照らされて紅葉のように赤く染まっていた。

多奈はその葉を見つめながら、淡々と語る。

「……有希。先程のお店で言い忘れていた事がありました」

「う、うん？」

「今まで起きた事、そして、今から起きる事に対し、絶対に誰にも口外しないで下さい。推測されそうな単語すら話さないで下さい」

「え？」

有希は最初、別れの言葉なのではないかと思つた。

混乱を置き去りにして、多奈の言葉は続く。

「口は堅い方ですか？ これから起きる事に対し、沈黙を守る自信と覚悟はありますか？」

「う、うん！」

反射的に出た答えに、多奈は相変わらずの淡い笑顔で答えた。

そして次の瞬間、その右手を大きく開き、前に突き出す。

「貴方の決断に感謝します！」

瞬間。多奈の言葉と同時に、光が爆発した。

* * * * *

光は一瞬だった。

目を開ければ、そこには一瞬前と変わらない情景と、多奈達を囲む十七人。

そして。

とんでもなく長い刀を右手に、警察機動隊が用いる巨大な透明の盾を左腕に。そこには、武装を終えた伊勢崎多奈が静かに立っていた。

周囲の男達も有希も何が起きたのか分からずに、ただ多奈を見つめている。

当の多奈は目を瞑り、静かな声で話し出す。その右腕には蒼い光が漂っていた。

「……国宝、直刀ちよくとう、金銅黒漆塗平文拵こんどうくろうるしぬりへいもんこしらえ、附刀唐櫃かたなからびつつき。全長二メートル七一センチ。日本最古にして最大の刀。別名、平国剣」

文章を読み上げるように、淡々とした言葉が響く。

「……とはいえ、私がつっているのは、『直刀』の複製品なのですが」

多奈のぶら下げた右手に握られた『直刀』はあまりに巨大だった。道幅の狭い歩道橋の上を狭そうに

しながら、威圧的な存在感を放っている。

白い手に握られた柄は黒く、装飾の無い無骨な鋼鉄が伸びていた。

反りの無い刀身は日本最古という言葉を疑ってしまいうくらいに錆一つ無く、鏡面のような美しさを保っていた。刀身は夕日を反射し、褐色に染まっている。

左腕に固定された透明盾は、ポリカーボネイトという特殊な物質で作られた警察機動隊用の盾。

ハミリの薄さながら、弾丸すら防げる最新鋭の透明盾だった。縦長の盾は、多奈の頭から足先まで完全に防げる程に大きい。

あっけに取られていた男達は我に帰り、慌てて銃を構えなおす。二宮にも驚愕の表情が浮かんでいた。「有希。……確実な逃亡。布団に入る際に一切の不安も残さない、確実な逃亡とは何だと思えますか？」淡い笑顔を浮かべて多奈は振り向く。有希が何かを言う前に、多奈は言葉を続けた。

「それは、追いかける者を殲滅し、その上で逃げる事です」
ぶおん！

巨大な直刀が鈍い音を立てながら風を風ぐ。圧倒的迫力。小柄な少女が片手で振り回すには、その刀はあまりに巨大すぎた。

重力の方向を変える、という無茶苦茶な手段だけが、視界に映る不思議な現象を説明している。

「この機会を待っていました。全員の追跡を振り切れる、この機会を……」

多奈は二宮の方へ振り向く。

静かな、それでいて強い意志を持った瞳が夕陽の赤を映す。

ぶら下げた右手の巨大直刀が無音で周囲を威圧する。

「安心して下さい。刃は全て潰してあります」

風が凩ぐ。赤に染まったイチョウと、多奈の長い黒髪が空間に踊る。

黒いミディドレスを身に纏い、右手に最古の刀、左手に最新の盾を構えた、現代の魔女。

「殺すつもりはありません。……ですが、抵抗します！」

その言葉が、開戦の合図だった。

「うわああああーっ!?!」

直刀を横に一薙ぎ。それだけで、二メートルを超える刀身が男三人の腹部に突き刺さり、そのまま歩道橋の外へと吹き飛ばす。

有希を背にしたままに一回転。振りぬいた直刀が、反対側で啞然としていた男二人を空中へと吹っ飛ばした。

「……あと十二人！」

多奈が叫ぶ。たった一秒で五人を倒してしまった現代の魔女の気迫は周囲に動揺を与えた。

「撃てっ！」

二宮が指示を飛ばす。多奈はロックする十一の銃口を見つめるだけだった。

「多奈っ！」

有希が思わず叫んだ、次の瞬間。

ばばばばばばん！

十一の破裂音。十一の弾丸が多奈を襲い……。

「……な、何で……」

銃を構えた男の一人が思わず呟いた。その視界の先には、風に黒髪をなびかせて悠然と立つ、多奈の姿。その体に一切の怪我也見当たらない。

その足元には十一の弾丸が転がっている。弾丸は全て、進行方向を曲げられていた。

広がる動揺。多奈は音が鳴るくらいに地面を蹴り、前方の男達に突撃する。

「十一人！」

振り上げられた刀は一人を高く吹き飛ばし、歩道橋というステージから叩き落とす。

「十人！」

左手の盾で男の顔面を殴りつける。男は吹き飛び、空中で一回転し、階段を転がっていく。

「くそっ！」

仲間が次々とやられていく中、スーツの男は懸命にライフル型のゴム弾銃の銃口を向ける。

多奈はその銃口に視線を向ける。それだけで、放たれた弾丸は進行方向を反転し、男の額にぶち当たった。

「あと九人！」

弾丸が無駄だと感じたのか、一人の男がライフルで殴りかかる。

相当の威力だったはずのその攻撃は難なく左手の盾で受け止められ、振り上げた刀の柄がその顎を砕

いた。

黒髪が、黒のドレスが踊る。

流れるように敵を打ち倒していく多奈を見て、有希も男達も驚きを隠せなかった。

武装した十七人も男が一人の少女に駆逐されようとしている。その想像は、あまりにも常識から外れていた。

——あ、圧倒的過ぎ……。

多奈の戦闘技術は有希のような素人が見ても、かなり大雑把なものだった。

恐らく、技術だけなら周囲の男達の方が優れていただろう。

しかしながら、その技術と言うものは、殴ればダメージを負わせられる事、足を蹴り上げれば投げれる事、刃物で切れば血が噴出す事、相手に弾丸が当たれば殺せる事を前提としている。

決して、殴ろうとしても、弾丸を当てようとしても、全てを回避してしまう相手と戦う事は想定されていない。

前提条件すら覆している相手に、どうやって対抗すればいいのか。

視界に映るのは、圧倒的武力による殲滅だった。

夕日に照らされた蒼腕の魔女は、その黒髪を赤く染めて周囲を駆逐していく。

「有希！　しゃがんで下さい！」

何故かと問いかける余裕なんてなかった。有希は夢中でしゃがむ。

多奈はフリスビーのようなモーシオンで、右手の直刀を投げつけていた。頭上数センチを巨大直刀が

通過する。鈍い風切り音。背筋に寒気が走った。

投げつけられた超重量は男三人の胸や腹部にぶち当たり、沈黙させる。

さらに多奈は、左腕の盾を二宮に投げつける。ガツツ、という鈍い音を立て、盾は二宮の額を直撃した。そのまま、ゆっくりと倒れる。

「あと四人！」

前方に二名、後方に二名。

もはや、残りの男達の戦意は失われていた。目の前の少女は自分達を一瞬にして破壊する力を持っている事を確信した。そして、抗えない事も、逃げられない事も確信した。

魔法の力で相手を駆逐していく魔女の姿に、彼らは心底恐怖していた。

当の多奈はその状態を一切気にせず、容赦もしない。

半歩踏み出し、ガラスの壁すら砕ける拳を男の腹部に突き刺す。小柄な少女の拳は、大柄の男を二メートル上空に吹き飛ばす。

もう一人の男が半ばヤケクソに掴みかかる。黒のショートボレロを握った男は、そのまま力づくで背負い投げをしかけようとした。

しかし。

「……な、な……？」

男の体は逆さまになって空中に浮いていた。重力の方向を変えられていた。

多奈は宙に浮いた男の右腕を掴み、横薙ぎに投げ飛ばす。三メートルくらい飛んだ所で、正常な重力

に導かれるままに落下した。

「二人！」

既に残り二人は逃亡の準備を行っていた。

多奈は振り返り、両足で地面を蹴る。たったそれだけの動作で、歩道橋の端から端まで一瞬にして移動した。その勢いのまま、体当たりをぶちかます。

壁に激突した男は、ぐえ、という言葉を残してその場に倒れる。

「最後っ！」

気迫の籠った声と、残された男が階段を降りきったのは同時だった。

多奈はしゃがみ、数本のベルトが巻かれたブーツからパチンコ玉程度の金属球を一つ取り出す。

それを軽く横に投げると、その球は軌道を一瞬にして変え、多奈の周りを楕円軌道を描きながら旋回し始めた。旋回速度は少しずつ上昇していく。

——多奈の周りで、落ち続けている、……!?

多奈は右腕を上げ、ゆっくりと指鉄砲の形で構えた右手を下ろしていく。重力を曲げられた球は高速で旋回し続けていた。

まるで本当の拳銃がそこにあるかのように、逃げ続ける男の後頭部をロックする。細められた瞳が目標を追い続ける。

「ばん」

その瞬間、高速で旋回していた金属球は軌道を変え、伸ばされた多奈の右腕を何週も旋回し、人差し

指の指す方向に射出される。

音速の弾丸は逃げ続ける男の後頭部を直撃し、沈黙させた。

「…………ふう…………」

男が倒れたのを確認し、多奈が小さく息を吐く。辺りの緊張感が一気に消え去る。

「…………大丈夫ですか、有希？」

「う、うん…………」

周囲には男達が死屍累々といった様相で倒れている。

たった数分にもならない時間で十七人の相手を倒してしまった現代の魔女は、夕日を背に淡い笑顔を浮かべていた。

「…………実は、実戦は初めてでした」

多奈の笑顔が逆光に映えていた。赤に染まったイチチョウが風に舞う。

その日は、夕日がとても綺麗だった。



千年谷市上空六百フィート空撃戦

Escape 2.

1.

盛られている。だから、食べている。

バスケット上のフランスパンはどこまでもほかほかで、骨付き鶏肉はどこまでもジューシーだった。

「二いただきまーす！」

夜七時。遠野家のダイニングテーブルには見事な料理が並んでいた。

暖色のライトは部屋と椅子に座る三人を優しく包み、暖かな料理を魅力的に照らしている。

多奈の向かい合わせには、有希と、遠野三里とおのみさとという名前の有希の母親が腰掛けていた。二人とも、幸せそうに料理を口に運んでいる。

遠野家の夕食は非常に手の込んだ料理ばかりだった。

自家製フランスパン。骨付き鶏肉のトマトスープ。自家製フレンチドレッシングのサラダ（赤・黄・パプリカ、ミニトマト、アスパラ入り）。白身魚のカルパッチョ。ベイクドポテト。

「うひゃー！ こりゃ、ワインが欲しい所だね！ みーちゃん、昨日の赤ワイン残ってる？」

「ここら。有希は一応未成年なのよ？ まるで毎日のように飲んでるんじゃないかって多奈ちゃんに誤解されちゃうわよ？」

言葉とは裏腹に、その表情は優しい笑顔だった。髪を後ろでまとめて有希をそのまま大人にしたよう

な、そんな有希の母親は多奈にとって非常に魅力的に見えた。

「多奈ちゃん、どう？ おいしい？ 久しぶりにちよつと頑張っちゃったんだけど」

「は、はい！ とつてもおいしいです……」

遠野家の料理は全てが絶品だった。

トマトスープの鶏肉は箸で切れるくらいに柔らかく煮込まれ、色取りが見事なサラダは新鮮そのもの。バスケットに載せられた焼きたてのフランスパンは、もちもちとした食感と小麦の香りが抜群で、バターをつけずとも食べられる。

小麦粉からしっかりと作って焼いたというのだから驚きだった。

多奈にとつて、こんなに温かみのある料理は初めてだった。素直に感動していた。

「ふふふ。そう言ってもらえると、お姉さんは嬉しいわ」

返答は笑顔だった。オレンジ色の光に照らされたその笑顔は、多奈の鼓動を一度だけ強く高鳴らせた。

「四十歳へのカウントダウン始まるのにお姉さんー!」

「あらあらー。何か言ったかしら有希？ 私は生涯二十二歳の美人お姉さんよ」

笑顔で有希の頬をつまむ三里さん。その指に力が目一杯籠っている事は傍目にも分かってしまった。

「えううう……。ひ、ひたいでふ、ふおふえーふあん……」

友達のように仲のいい遠野親子を見ながら、ちぎったフランスパンをトマトスープに浸して食べる。口の中に広がる酸味と旨みに、多奈は思わず頬を緩めていた。

その笑顔は、数時間前に十七人もの相手を一方的に薙ぎ倒した現代の魔女ではなく、十六歳の少女に

相応しい笑顔だった。

* * * * *

「はあつ、はあつ……。や、やつと着いたねー……」

歩道橋での戦闘後。千年谷公園に着く頃には、既に日は完全に落ち、空には星が輝いていた。

緑豊かな運動公園は耳が痛くなるくらいに静かで、等間隔に設置されている白熱灯がどこか寂しげだった。

夜の冷気で冷えたベンチに座る事なく、白熱灯の明かりの下で二人は白い息を吐く。

「……無事だったんだな、多奈」

「うわっ、びっくりしたー!」

多奈の兄は広葉樹の暗がりから突然現れた。風に揺れるショートレイヤーの黒髪。黒のコートに身を包み、その表情には若干の安堵が映っていた。

有希のリアクションには一切反応せぬまま、ポケットから取り出したシルバースレスレットを二つ、多奈に手渡す。

「まずはコレを着ける。大急ぎで施設に戻って取ってきた。もう一つは予備だそうだ」

「……ありがとう、兄さん」

腕輪を装着した後、監視の探查網を振り切れた多奈は、やつと安心したようにゆっくりと白い息を吐

いた。

一呼吸分の沈黙の後。

「……さて、帰るか、多奈」

「はい、兄さん」

「ちよ、ちよつと待てー！ そんなあつさり!？」

有希は歩き始めようとする二人の肩を必死に掴む。

「ねえねえ、多奈。こっちのお兄さんって、多奈のお兄さん？」

「はい。伊勢崎いせさきかずほ一穂、私の兄です」

「うわっ、女の子みたいなお可愛い名前だね！ ちゃんづけで呼んでいい!？」

「全力で拒否する」

一穂は無表情で答えるが、別段怒っている訳でもなかった。伊勢崎兄妹は二人揃ってそういう性格なのだ。有希は理解した。

「ねえ、お兄さん。帰っちゃう前に少しお願いがあるんだけど、いい？」

「何だ？」

無表情の一穂と、手を叩いて笑顔の有希。多奈は不思議そうに首を傾げた。

「多奈、今日はあたしの家に泊まっていきなさい！」

「え……?」

有希の両手が多奈の右手を包み、多奈は思わず目を丸くした。

多奈にとって、有希の言葉は理解出来なかった。施設以外で過ごした事の無い多奈に、他人の家で寝るといふ発想は無かった。

「いいよね、お兄さん？ あたしの事、轢き殺す一步手前だったんだし、慰謝料つてやつで大目に見ようね！」

「ふむ……。探查網を払った以上、俺は構わないが」

「さんきゅー！ 期待していいぞ多奈ー。あたしん家、料理教室なんて小さく開いててね。美味しいもの用意しちゃうよー？」

善意全開の笑顔が白熱灯に照らされる。

——何故？

多奈はそれだけを考えていた。

敵は既に撃破した。偶然に巻き込んでしまった有希を無事に守りきるという義務も果たし終えた。

その後はそれぞれの日常に戻ればいいのだし、そうなるものだとも多奈は信じていた。

「私が有希の家に泊まるべき理由は無いと思うのですが……？」

「え？ 理由？ ……理由、ねえ……。んー……」

秋の夜空の下、有希はしばらく考えた後、笑顔で言い切る。

「友達を招くのに、理由なんていらないよね？」

「え……？」

思わず多奈は片手で胸元を押さえる。施設以外の人から『友達』という単語を聞くとは思っていなか

った。

自分のような異端の者と、普通の者が仲良くなれることなど無いと思っていた。

「ゆ、有希は、私が怖くないんですか……?」

「え? どこが?」

当然のように言い切る有希に、多奈は思わず声を荒らげた。

「どこがって……。今さっき見ましたよね!? 私は有希とは違うんです!」

「あー、悪いけどあたし、そういうの全然気にしないタイプなんだよねー」

笑顔は一切崩れなかった。あまりの簡単な物言いに、言葉に詰まる。

「今日みたいに、迷惑をかけるかも知れませんか……」

「それはむしろ大歓迎!」

力いっぱいサムズアップ。

「……に、兄さん……」

怯える多奈の視線に対し、一穂は兄としての厳しさと優しさを込めた視線を返した。

「多奈。……外の世界を見る、いい機会だと思う。あー……」

「あたしこと目の前の美少女の名前は、遠野有希ちゃんです。憶えとけ、一穂ちゃん?」

「……遠野有希。今晚だけ、多奈を頼んだ」

「任せとけー!」

一穂は早々と公園の入り口へと歩いていく。

その後姿を見つめながら、多奈は沈黙する。もはや何を言えばいいか分からなくなっていた。何を否定したいのかも分からなくなっていた。

「よし、そんじや納得した所で、れっつごー！」

右手を引かれる。

「ゆ、有希！」

「うん？」

「わ、私は……」

多奈は顔を伏せる。長い前髪が白熱灯の光を遮り、目元が隠れる。

「……私は、学校に行った事がありません……」

震えた声。それは多奈のコンプレックスだった。

幼い頃から能力の制御が出来なかった多奈は、一般の学校に行く事を許されず、施設での通信教育だけで学んでいた。

テレビや漫画で学生生活がどういものかは知っていた。けれどもそれは、あくまでも知識であり、経験ではなかった。

制御が出来るようになったのは数年前の事で、学校に行く事を薦められたが多奈はそれを断っていた。学力は既にある。今更行つてどうする。その時はそんな上辺だけの理由を並べたが、結局の所、理由の一つだった。

——ただ単に、私は怖がっているだけなのだ……。

多奈は素直にその事を認める。多奈の十六年間の生涯において、同年代の女の子と話した事は一度も無かった。

何を話せばいいのか、どう振舞うべきなのか。何も分からない多奈にとって、それは真つ暗な闇の中を歩くようなものだった。

頭上には星空が広がっている。鈴虫が鳴いていた。

冷たい風が周囲の木々を揺らす。白熱灯がステージの上の役者のように二人を照らしている。

十七の銃口に怯まない現代の魔女は、十七歳の女子高生の言葉に怯えていた。

そんな多奈を見て、有希は普段では想像できないくらいに優しい笑顔を浮かべる。

「……大丈夫。あたしは多奈を嫌わないし、裏切らないし、傷つけないよ。ただ、仲良くなりたいだけだから」

握られたままの右手が少しだけ強く握られる。夜の冷気の中、その部分だけが暖かかった。

有希に引つ張られるようにして、歩いていく。

自分の意志で、歩いていく。

二人の足音が静かな夜の住宅街に響いていた。街路から望む晩秋の星空は広く、輝いていた。多奈は右目を手で拭う。

この時はまだ、嬉し涙という単語を知らなかった。

* * * * *

「今日の良き日と、多奈との出会いと面白アクシデントに、かんばーい！」

三つの心地よいガラス音が響いて、ガラスの赤ワインが波打つ。

「ふはーっ！ あたしはこの一杯のために生きているー！」

「オヤジを娘に持ったつもりはないっ！」

相変わらずの遠野親子を尻目に、多奈は恐る恐るグラスに口をつける。

結局飲む事になったワインは、多奈にとって生涯初のアルコール飲料だった。

「……んっ」

ブドウのフルーティな味わい。そして、ワイン独特の酸味とアルコールの感触が口の中に広がる。思わず目を瞑る。

飲み込むと、たった一口なのに口の中が熱を帯びてるような感触が残っていた。

「多奈、どうよー？ 多奈は飲めるクチだったりするー？」

興味津々といった笑顔の有希。その右手のグラスは既に空になっていた。

「わ、分かりません……」

決して不味くは無かったと思う。ジュースと比べて美味しいかは分からない。

確かめるように、もう一度ワインを口に運ぶ。そのまま、喉を鳴らして一気に飲み干す。

「あらあら。多奈ちゃんってばいい飲みっぷりね〜」

グラスを置く。視界が少しだけ揺れる。自分の感覚全てに薄い膜を張られたような感覚。これが酔いなのだと、多奈は初めて実感する。体がやたら熱かった。

「よーし！ 多奈も飲めるクチってことで、もう一杯いこうかー！」

「こちら。お酒は二十歳になるまで一杯だけよ？ はい、没収〜」

ワインボトルは有希が掴む前に三里が颯爽と奪い取っていた。

「えうう……。そりゃねえっすよおっかさん……。もう一杯、もう一杯だけ〜」

「ああもう、ひつつくなっ！ ……しようがないわね。ここは一つ、多奈ちゃんに決めてもらいましよ
うか」

「え？」

「多奈ちゃん、もう一杯飲みたい？」

有希が期待と羨望の眼差しで多奈を見つめている。逃げるという選択肢は選べなかった。

「……は、はい」

「よーく言っただぞ多奈っ！ そんじやみーちゃん、もう一杯いこうかー！」

「はいはい。それじゃ、取って置きのチーズも出しちゃおうかしらね」

「ぐっじよぶー！」

暖かい光がグラスを反射する。ワインが注がれ、ガーネット色の水面が揺れた。

楽しい食事は、施設で十数人の兄弟たちと毎日取っている。

けれども、母親というものを知らずに育った多奈にとって、こんなに暖かさを感じる食事は初めてだった。

「かんばーい！」

三つの心地よいガラス音が響いて、グラスの赤ワインが波打つ。

口の中に広がる葡萄とアルコールの感触が心地よかった。

暖かい食事、暖かい光、暖かい空気。

繰り返しられる親子漫才を見ながら、多奈は小さく声を出して笑っていた。

こんなに気分が浮かれているのは、きつとお酒のせいなのだと、そんな事を思いながら。

2.

瞳を閉じて、呟く。

「これは勝負」

人間の歴史も、有希の人生も、それらは勝負の連続で綴られてきた。日常は、事ある毎に戦いの舞台を用意する。

そして、自分は全力でその舞台で勝利を掴まなければならない。栄光の輝きは常に勝者のみを照らすのだから。

右手を強く握る。自らの闘争本能に火をつけていく。

これからの戦闘における構想を終える。勝利の際に天に吼える準備と、敗北の際に晒されるであろう屈辱に耐える覚悟を終える。

瞳を開ける。

そこには、見慣れた風呂場の光景が広がっている。湯気が霧のように周囲を曇らせていた。

肩まで湯船に浸かっていた有希は勢いよく立ち上がり、未だに着替え中の多奈に聞こえるような大声で叫ぶ。

「よっしやー！ かかってこい多奈ー！」

風呂場は大声を容赦なく反響させる。突き出した右腕からは湯気が立ち上っていた。

決して、小さい、薄い、フラット、平面……といった侘しい単語ではなく、慎ましい、可愛らしいという言葉で描写したい胸は、残念ながら揺れる事は無い。

——勝たなければならない。勝つ事で、あたしは自信と誇りを手に入れるのだ。女としての、自信と誇りを！

最初から劣勢なのは覚悟の上だ。自分の持つカードが切なくなるくらいに弱い事は理解しているし、事実はいつも目にしていく。

しかし、だからこそ賭けるのだ。『どうせ貧乳だし』と認める程には、自分はまだ負け続けているわけではない。

——あたしは諦めない。どんなに負け続けていても、次に大勝利が待っていないなんて、誰にも言えない。

ドアが開く。冷えた外気が入り込む。

長い髪をアップにした多奈は俯き気味の顔を真っ赤にし、恥ずかしそうに体をフェイスタオルで隠しながらタイルの上に降り立った。

僅差だった。

しかし、明白な敗北だった。

「ガッツデム！」

シヨックのあまり、倒れるように湯船に沈む。水柱が豪快に立ち上るのを多奈は不思議そうに見つめていた。

酸素の届かない世界、涙がこぼれない世界で、有希は心の勝敗表に七十五個目の黒星を書きこんだ。

わっしやわっしや……。

「お客さん、かゆい所はありませんか？」

「……ないです」

シャンプーの白い泡は膨らんでいく。指先が長い黒髪を梳いていく。

湯気の立ち込める風呂場。二人は縦に並ぶように椅子に座り、有希は多奈の髪の毛を洗っていた。

「……」

元々大人しい多奈だったが、風呂に入ってから終始無言。

浴槽に入った時などは、端っこの方で体育座りのようなポーズで湯船に浸かっていた。

「恥ずかしいからです」

理由は、俯きながら言ったその一言。その様は男心をくすぐり過ぎるくらいに初々しかったが、残念ながら有希は女の子だった。

その時の真っ赤な顔を思い出し、有希はつついっつい頬を緩めてしまっていた。

わっしやわっしや……。

指を動かし、白い泡を増やしていく。長い黒髪は洗いがいのあるポリウムで、全体を泡立てるのに結構な苦勞を要した。

「はい、流すよー。普通のシャワーと滝壺突撃系ハイドロプレッシャー洗浄のどっちがいい？」

「……普通で」

「ちえっ」

シャワーの温水で泡を流し落としていく。心持ち、多奈は心地良さそうにしているように見えた。

泡の流れる多奈の背中是比较的小柄の有希よりも小さいかもしれない。傷一つ無い白い肌と細い手足。

「ねえ多奈。そーいや不思議だったんだけど、あのでっかい刀ってどっから出してたの？ 四次元ポケットか何か？」

多奈は右手を僅かに上げる。その手首には細いシルバーブレスレットがはめられていた。

「この腕輪を使います。この腕輪には、鳳仙花探査網の遮断と、直刀の召喚・返還能力が埋められます」

「おおー！ いわゆる魔法のアイテムってやつ!？」

「魔法と言うか……。他者の開花した鳳仙花を、物質に挿し木、する能力者がいるんです。この腕輪の中にも鳳仙花が根付いているという訳です」

「ほえー。便利だねー」

動かす手に意識を戻す。コンデイションナーを長い黒髪に満遍なく塗りたくっていく。

「ところで、多奈？ ここで一つお願いがあるんだけど？」

「……何ですか？」

「乳を揉ませろ」

神の意思だった。

視界一杯に天井が見えた。

蒼腕の魔女のアップーは、有希を一メートル上空に吹っ飛ばしていた。

3.

「星を見るのは好きですか？」

夜風が多奈の黒髪を僅かになびかせる。冷たく乾いた風は湯上りの体に心地よかった。

星の綺麗な夜空の下。二階のベランダには部屋からの明かりが差し込んでいます。

足にはスリッパ。体にはパジャマ。右手にココアを持った二人は、手すりに腕を置いて星空を見上げていた。

有希は湯気を立てるココアを口に含んだ。牛乳と砂糖がたつぷりと入った、優しい味が口の中に広がる。

「うん」

静かな夜が好きだった。広がる静寂と、凜とした空気の中、星を見上げるのが好きだった。

「……私の住んでる家には、屋上があるんです」

視線は星空に向けたまま、多奈は落ち着いた声で話す。緩やかな風が髪を揺らし、車の走る微かな音が遠くから聞こえた。

「その屋上は、星が綺麗に見える場所でした。空を見上げると、何も遮らない、視界一杯の星空が見える場所です。幼い頃の私は、そこでずっと星を見ていました。別段、何をするわけでもなく、ただずっと見上げ続けていたんです」

湯気を立てるココアを一口。多奈はその水面を幸せそうに見つめる。

「そこに行くのは、いつもお風呂に入った後。私が幼い頃、夜中に遊びに行つては、兄によく怒られていました。それでも私は、毎日のように屋上に行っていました。それが原因で何度も風邪を引いたりもしてました」

その頃を思い出したのか、多奈は少しだけ笑顔を作る。

「その頃の私は、寂しかったんだと思います」

「そうなの？」

「……有希は、遠足に行った事がありますか？ 運動会や卒業式は何回経験しましたか？」

突然の質問に指折り数える有希。多奈は星空を見上げた。長い髪が風に柔らかく揺れる。

「私の施設には二十八人の子供がいました。その内、学校に行けなかったのは私一人だったんです。幼い頃は能力の制御が全くできず、感情が動く度に右腕が光ってしまつて……。そうせざるを得なかったんです。理解と納得と覚悟は出来ていたんです。でも私は、一度もそういう経験をしていなくて……。幼い私には、それが羨ましくて……」

ココアを幸せそうに一口飲み、ゆっくりと白い息を吐いた。

「そんな時はこうして……。星を見るんです。ずっと、ずっと……。きっとそれは、逃避だったのだと思います。それでも、それ以上に……。星を見るのが好きだったんです」

晩秋の夜風が少しだけ強く吹いた。カーテンと髪が音を立てずに揺れた。

すっかり聞き役になってしまった有希も、星空を見上げながら話す。

「これから。卒業式とかは出来ないけど……。これから、色んな事をしようか？ 遠足だったら何度だつて出来るしね。昔の多奈はタイミングを逃したけど、次を逃さなければいいんだよ」

「……はい」

目を瞑り、多奈は答える。一呼吸して、少しだけ感慨深く一言を加えた。

「……初めて、兄にも話してない事を話してしまいました」

その言葉に、有希は緩む頬を抑えられなかった。

ココアの冷めるまでの間、二人は静かに星空を見上げ続けていた。

十一月の冷たい夜風。辺りには静寂が広がっている。

「……誰かと一緒に星を見るのも、いいものですね」

部屋から差し込む光に照らされて。多奈の笑顔はこれまでで一番幸せそうな笑顔だった。

夜空にはオリオン座が輝いていた。風が髪を揺らす。緩やかにゆっくりと流れる時間は心地よかった。静かな夜が好きだった。広がる静寂と、凜とした空気の中、星を見上げるのが好きだった。

* * * * *

「……あ」

静寂を破ったのは有希だった。多奈は視線だけで質問する。

夜空には、小さな赤の光点が点滅しながらゆっくりとした移動を行っていた。

「飛行機。あたし、実は一回も飛行機に乗った事ないんだよねー」

「私も乗った事ありません」

「一度乗ってみたいよねえ……。滅茶苦茶高い所から見た夜景が見てみたいんだよね。きっと綺麗だよね」

僅かな間をおいて。

「……見に行きますか？」

「えっ？」

多奈は夜風に髪を靡かせながら、淡い笑顔で有希を見つめている。部屋からの明かりが瞳に映る。

その右腕には、青の光が霧のように淡く発光していた。持っていたはずのマグカップが、空中で自然に固定されていた。

何も言わず、多奈は左手を差し出す。有希は半ば反射的にその手を取った。

「うわ……っ！ うわわわ……っ!!」

途端、上から引つ張られるような浮遊感に包まれ、ほんの少しの高さながら二人の足が大地から離れる。

何も踏む事の無い不安感から、有希は思わず足をばたつかせた。そんな様を見て、多奈は小さく笑う。

「大丈夫ですよ。いきなり空に向けて落ちるなんてことはありません。一秒に百回、重力ベクトルを上下に変えてますから」

有希には言葉の内容が凄いかどうかは分からなかった。それ以上に、初めての無重力に胸の高鳴りが抑えられない。

つまり、これは……。

「空……飛べるんだ？」

言って、自分の言葉に少しだけ酔う。叶うわけが無い憧れが、いきなり目の前に現れている。空中浮遊……もとい、空中落下の中。多奈は長い髪をふわふわ浮かしながら、笑顔で答えた。

「……この季節は寒いですから、着替えないとならないですね」

奇声を上げながら多奈に抱きつく。突然の出来事に能力の制御が出来なかったのか、そのまま硬いベランダに押し倒してしまっていた。

「ちよいと出かけてくるー!!」

玄関でブーツを履きながら大声で叫ぶ。今はもはや、ブーツの紐を結ぶ時間すら惜しかった。

開け放したドアの先では、多奈がいつもの黒ドレス、黒ブーツ姿で待っている。

それに合わせて、有希もトレンチコートとチェックのミニスカートといった、多奈と出会った時と同じスタイルでまとめた。

「あら。コンビニでも行くの？」

お風呂上りの三里がビール缶片手に聞く。有希は満面の笑顔で、上を指差した。

「空！ ちよっと飛んでくる！」

ブーツの紐を結びきって、走り出すように玄関から飛び出す。そこには星空案内人の魔女がいて、案内する星空がその背に広がっていた。

4.

有希の家からはいつも、一本の電波塔が見えていた。赤と白のストライプの入った、東京タワーのミニチュア版のような電波塔。

夕日に浮かぶシルエットが特徴的なその塔は、夜になるばライトが緩い間隔で赤い光を点滅させ、常に存在感を放っていた。

どこにでもある電波塔だったが、それはこの街で一番高い建造物でもあった。

小学生の頃、有希は何とかがして登ってやりたいと思っていた。

野望を胸に、友人と一緒にその根元まで向かった所、周囲に張り巡らされた鉄格子と有刺鉄線に愕然とさせられた記憶を思い出す。

意識を戻す。視界には一面の夜景が眼前に広がっている。痛烈にぶち当たる風が頬を冷やし、コート
の裾を強く揺らし続ける。

二人は今、その塔の遥か上空を飛んでいる。

「うっ……ひゃあー……っ！」

思わず上げてしまった大声。爆発しそうな血流。興奮のあまり、このまま心臓がスタミナ切れを起こして死んでしまうのではないかと、そんな事すら思っていた。

上空六〇〇フィートの夜空。重力加速度に従って、二人は地面と水平に落下し続けている。

鋼鉄の翼も無く、燃料を爆発させる動力も無く、ただ重力に引かれるままに落ちていくという、無音の夜間飛行。

何にも遮られない、フルパノラマの夜景を見下ろす。

マンションの窓の明かり、商店街のイルミネーション、駅のホーム、街灯。黒のキャンバス上に無数の光点が輝いている。

コンクリートの模様、電信柱の落書きですら知っている町並みは、上空からでは別世界にすら見えた。耳元では風音がごうごうと音を立てている。晩秋の夜風は痛いくらいに冷たかったが、溢れ出す興奮は勝手に痛覚を蚊帳の外へ追い出していく。

赤茶色の髪の毛が派手に暴れる。トレンチコートは、今にも脱がされそうなくらいの空気抵抗に立ち向かっていた。

速度は上がり続け、道路を走る乗用車を簡単に追い抜いた。二台、三台、四台……。次々に追い抜いていく。

有希は多奈と離れないように手を強く握る。この手を離したら、地面と垂直の重力に引かれ、爆雷投

下のような軌道を描いてしまうのだから。

極寒の空気抵抗の中、繋いだ右手だけが暖かかった。

「有希、寒くないですか？」

多奈は顔だけ向けて聞く。長い黒髪、黒のミディドレスが暴風に舞う。

右腕を包む青色の光が日中よりも強く輝いていた。速度に流されるように表面を僅かに削られ、光の粉末が夜空に青の軌跡を残していく。

「全然大丈夫！ それよりもさ、もっと下の方飛んでみない!？」

「分かりました」

瞬間、下向きの重力を感じる。今までひたすら地面と水平を描いていた軌道が放物線落下の軌道へと変わっていく。

下には車通りの少ない新4号国道がまっすぐに伸びていた。

仮にも四車線道路のためか、その道沿いにはそれなりに大きい店舗が所々に点在し、それぞれのネオンを輝かせている。

さらにその周囲には水田と畑と林が広がり、民家の明かりが所々に灯っていた。

まるで地図を見ていたかのような景色は少しずつズームアップしていき、道路脇のランプと同じくらいの高さまで高度を落とした。

重力は平行方向へと戻り、車と並走するように空中を飛行していく。

ランプが有希のすぐ横を高速で何度も通過していく。一定のテンポで光は近づき、離れるを繰り返し

ていく。

「ひゃーっ、ほおーっ！」

急な坂を自転車で一気に駆け下りていくような、そんな高速のスリルと爽快感を何十倍にもしたような感覚に、思わず有希は叫ぶ。

対向車線から走ってくる車が通り抜ける度に、風を切り裂く音が聞こえる。

しばらく飛んでいると、進行方向に水色で彩られた鉄骨の巨大なアーチが見えてくる。

新利根川橋と命名された巨大な鉄橋は所々がライトアップされ、周囲の闇の中でその存在をアピールしていた。

「よし、伊勢崎航空隊長ー！ とっつけきいー！」

「……了解です」

何のアクションも無く、慣性だけが左に曲がる。高速で走る大型トラックの上へと移動し、同じ速度で飛び落ち続けていく。

土手の傾斜に沿って上昇する。青色に点滅する信号を寸前にかわし、青色のアーチの下に入っていく。周囲のライトが二人を強く照らす。中心から魚の骨のような形で伸びていく鉄骨を一本一本横切っていく度に、ライトの光は体の上を高速で通り過ぎていく。

橋の外には川幅百メートルを越す日本有数の河川が流れているはずだが、今見えるのはライトの輝きを映す黒の水面だけだった。

「ねえ、多奈！ あのさ、あのさ！」

「何ですか？」

「このままさ、海まで行ってみない!？」

もっともっと飛んでいたい。有希の心にはそれだけしかなかった。

一番近くても、海までは約百キロの距離。今現在、八〇キロくらいの速度だから……と、数式を頭に並べ、一秒で計算を諦める。

「……、です」

対向車線に爆音を響かせるバイクが現れ、フロントライトの光を撒き散らしながら高速で過ぎ去っていく。

多奈の言葉は爆音に消されて聞き取る事が出来なかった。

「えー!? 何ー!? 聞こえなかったからもう一回ー!」

「だ、だから! ……あ、明日の朝食に、三里さんの作ったココアを出してくれるなら、いいです!」

自らの大声で顔を真っ赤にした多奈に、有希は満面の笑顔で答える。空いた左手のサムズアップを添えて。

「あははっ、それならいつでもオーケー!」

横切る鉄骨も終盤にさしかかり、視界には鉄橋の先の景色が広がった。

少しだけ高い土手から見下ろす街並には住宅が立ち並び、窓の明かりが光点のように浮かんでいた。

鉄橋を抜け、今度は上向きの重力が発生する。引かれるまま、二人は夜空に向けて落ちていく。

風は強く冷たく、上空に向けて加速し続ける。

「ねえ！　そういえば、あたし達が飛んでる所、他の人に見られまくったけど大丈夫だったんかな!?」
「大丈夫ですよ、有希」

視界の先には長い黒髪とその先の星空だけが見えた。

地面と真逆に落下し続けるという異常な状況の中、多奈は淡い笑顔で次の言葉を紡ぐ。

「人は、空を飛んだりしませんから」

* * * * *

ひたすらに南下を続けている。有希がそれを理解したのは飛行……もとい、落下を初めて二十分経った頃だった。

上空六〇〇フィートからの景色に、高層ビルやテレビで見た事のある繁華街が見え始めていた。

無駄一つ無く大地に建造物が敷き詰められた町並みは、夜になって輝き始める。

高層ビルを飛び越える。眼下の道路ではどうやら事故が原因の渋滞を起こしていた。

海まで、あと少し。あと、四〇キロ。

ばらばらばら……。

闇の中、有希はエンジン音が接近してくるのを聞いた。

足先から斜め下。体に響くようなその重低音は、巡航速度二百キロ、航続時間三時間で、五十メートル

ル四方の平坦な場所があれば離着陸が可能な、とある乗り物を連想させた。

音は明らかに、フルスピードで二人に向かってきている。

「……有希、この音って……？」

「いやー、まっさか、さすがに、それはないよね……？」

ゆっくりと後ろを振り向く。

ヘリコプターの運転手は獲物を狙うスナイパーのような視線を送り、その隣の白衣の男……二宮一刀からはウインクを放たれた。その手にはライフル銃。

有希と多奈は揃って頬を引きつらせた。鳥肌が背筋を疾走した。

「……うっひゃあああーっ！」

寒いから、という理由で抑えていたスピードは一切の枷をはずし、落下速度は重力加速度に従って急激な上昇を始めた。青色の光は輝きと範囲を増していく。

顔面に叩きつけられる風は痛いほどに冷たく、トレンチコートは千切れてしまいそうな程に暴れ回る。ぱしゅんっ。圧縮した空気を抜くような音と同時に、弾丸が有希の耳の脇を音速で通り過ぎた。

「振り切ります！ 絶対に手を離さないで下さい！」

風音とエンジン音だけが聴覚を支配する中、切迫した多奈の声を何とか聞き取る。

重力の方向は上向きに変化し、更に高度を上げていく。視界の先にはフルパラマの星空が広がっている。ショートボブの赤茶髪が暴風に流れた。言葉に従うように、有希は握る手に力をこめた。

空撃戦が、始まる。

5.

一八〇度ロール。背面飛行のままループ軌道を描いて真つ逆さまに落下し、一八〇度下方に向けて飛ぶ。

この、戦闘機用の空戦機動をスプリットSと言う。

特徴は、上方に向けて一八〇度方向を変えるインメルマンターンに比べ、重力の効果で素早く向きを変えられる事。そして、強烈なのが掛かる事。

有希にとって、夜景の広がる大地を見上げる、というのは初めての経験だった。軌道が変わる度に世界はぐるぐると回転していく。

「よっしゃー！ 次はバレルロール行ってみよう！」

「落ち着いて下さいっ！」

既に二人の落下速度は時速二〇〇キロを超えていた。空気抵抗と重力が均衡し始め、最終落下速度に限りなく近似していく。

ヘリコプターと並走する二人は、星空に青光の軌跡を描きながら地面と水平に落下し続ける。

旋回するヘリコプターのエンジン音。最大速度の違いか、少しずつ差が縮まっていく。

「甘い！ 空を制するのはスピードじゃなく、空戦能力だって事をその脳みそに刻ませてやるっ！」
「盛り上がりがないで下さいっ！」

繋いだ手の上方五〇センチ。弾丸が通り過ぎる。

もはや寒さを感じている余裕なんて無かった。首が痛くなりそうな程の空気抵抗が顔面に叩きつけられるけれども、有希は前方を見つめ続ける。

今度は上方へとループ軌道を描く。ひゅううー、と風の音が聞こえる。視界に一面の星空が広がる。ひねりを加えて水平飛行へ移る。再度Uターンをかけられ、ヘリコプターの運転手の顔が悔しげに歪むのが見えた。

「ねえ！ 何とかしてヘリコプター落とせないの!?!」

「破壊するだけなら十秒もかかりません!」

多奈はあっさりと言い切り、さらに続ける。

「空中で破壊するのは簡単です！ しかし、落下した機体が爆発炎上して、無関係の人を巻き込んでしまう事だけは全力で避けます!」

風音がやかましく鼓膜を叩いたためか、一メートルも離れてないのに多奈は大声を上げていた。

「じゃあ、どうする!?! 燃料切れでも待つてみる!?!」

「その案は使いません!」

「何で!?!」

「三里さんが、帰りの遅い有希を心配するからです!」

真顔で言い切る多奈に、有希は思わず目が丸くした。命の危機かもしれない事態で、そんな事を考えていたとは思わなかった。

そんな作戦会議を邪魔するように、ヘリコプターのエンジン音は近づいてくる。

「多奈！ とりあえず今は、ビルの間を飛び回って追手を撒くって案はどうよ!?」

「賛成です！」

多奈の右腕から光が一瞬にして消え、正常な重力による落下を開始する。

胃の中身が上に引っ張られるような、上向きの強烈な慣性。頭の中が真っ白になる。

高度は下がり続け、眼下に広がっていた光点の群れが高層ビル群だと分かる程に近づいていく。

その先には海が広がっているのを有希は知っていた。旅行ガイドブックでお馴染みとなっている、何もかもが真新しい港町が眼下に広がっている。

車輪全体を赤いネオンで輝かせる観覧車。国内最長と謳われる巨大なタワービルには法則性の無い明かりがストライプ状に灯っている。

そのタワーの下には、観光用の帆船がコンクリートで囲まれた水面に浮かび、煌びやかにライトアップされている。

街路樹すら電球を巻き付け輝く、夜景の街。コンクリートの断崖で囲まれた海だけが闇の中に沈んでいる。

「多奈！ ここって超有名な観光地なんだよ！ おみやげ買って帰ろうかー!?!」

「後してください！」

多奈のツツコミに切れが出てきたのを確信しつつ、有希は近づいていく夜景に見惚れていた。

光点の集合というよりも、街全体が光を放っているような圧倒的光量に頬が緩む。

下向きの速度は加速していき、高度は十メートルを下回った。

テニスコートが四つ入りそうな駅前広場には、碁盤目状に設置されたお洒落な街灯が光を放ち、その下でストリートミュージシャンがギターを掻き鳴らしている。

コンクリートの地面が視界の半分を覆う。衝突まで、あと一秒以下。

「た、多奈っ！ ぶつかる！ ぶつかるって！」

落下は続き、鼻先と地面が二〇センチの距離まで近づいて、そこで初めて落下軌道は水平へと移行する。

時速二〇〇キロでコンクリートの上を滑るように飛んでいく二人を、仕事帰りのサラリーマン達が啞然とした顔で見つめていた。

その二人の後ろを、ワンテンポ遅れてヘリコプターが地面ギリギリを滑走していく。

駅前広場は一瞬にして騒然となるが、お構いなしに騒動の元はすぐさま飛び去っていく。

右に旋回し、超低空飛行で爆風を撒き散らしながら、ビル街の歩道を飛び落ちていく二人を追いかける。

「こ、怖あ……」

「口は閉じていて下さい！ 舌嚙んでも私は治療できません！」

手を伸ばせば届く距離で、コンクリートの歩道が高速移動する。道沿いにはコーヒー店やケーキ屋といった可愛い店が並び、イルミネーションが輝いている。

その中、カップルや仕事帰りのサラリーマンが歩く歩道を、人の間を縫うように飛び落ちていく。



飛び去った後には驚きと悲鳴が残されていく。その音量は、追跡するヘリコプターの爆音でかき消されていく。

「あ、危ないっ！」

歩行者用信号は赤だった。交差点に差し掛かり、右から車が向かってくるのを寸前で左旋回してかわす。急ブレーキとクラクションの音が鳴り響く。

そのまま少しだけ高度を上げ、ビルの側面に沿って飛ぶ。窓越しの光が何度も二人を通過していく。後ろを見れば、ヘリコプターは周囲をビルに囲まれながらも器用に左折してみせた。

「た、多奈！ 何か拍手したい位に見事な操縦で付いてきちゃってるんだけど!？」

「予定外です……。まさかこんな狭い所までついてくるとは思いませんでした……」

乗用車を簡単に追い抜きながら、谷のような高層ビル街を飛行し続ける。電飾を体に着込んだ街路樹が何本も横切っていく。

立体交差のような歩道橋の下をくぐり、ヘリコプターはその上を跨ぐ。人とヘリコプターのドッグフアイトに、歩行者の悲鳴と騒音が軌跡のように広がっていく。

スピードを上げていく。風を切り裂く音が耳に響く。

周囲の建物は暖色の光に照らされた赤レンガの建物に変わり、突き当たりには客船ターミナルと書かれた建物が聳え立っていた。

多奈は空中で前転するようにくると一回転し、足を下にしながら落下を行っていく。手を繋いでる有希も自動的に同じように回った。

たんっ！ 客船ターミナル入り口前のコンクリートを音が鳴るくらいに蹴る。跳躍距離は三〇メートル。

ターミナルを飛び越えると、視界が一気に開ける。

その先には海が広がっていた。一面の暗闇に、体を電球で包んだような豪華客船が浮いている。

「多奈、このまま国外逃亡しちやおっかー!？」

「する気はありません！」

体を九〇度ロールして左に旋回していく。夜空に輝く滑らかな半円の軌跡が描かれていく。

一八〇度反転すれば、先程走り抜けた夜景の街が一望できた。一部では騒然としている事など感じさせないほどに、夜景はただ静かに輝いている。

しかし。

ばらばらばらばら……。

聞き慣れたエンジン音。二人揃ってゆっくりと振り向く。ヘリコプターのフロントガラス越しには、操縦桿を握った男が血走った目でこちらを睨みつけていた。

その表情は若干の笑顔すら浮かんでいて、狂気じみた雰囲気周囲に撒き散らしていた。

もう片方の窓からは、ライフル銃を持った二宮が半身のみを外に出してこちらを狙っている。

「うあー……。きつとあのパイロット、操縦桿を持つと性格変わるタイプだよ」

「あんな破天荒な操縦すれば、誰でもあんなものでは……」

視点を前方に戻す。

そこには赤色のネオンを輝かせる巨大な観覧車が、まるで巨大な盾のように待ち構えていた。円の中心には巨大な電子時計が埋め込まれており、今が二十一時四十三分である事を周囲に伝え続けている。

「た、多奈っ、ストップ！ ストップ！」

「えっ……？」

多奈が顔を向けた頃には、既に五〇メートル程の距離にまで近づいていた。

時速二〇〇キロのスピードが、その距離を一瞬にして縮めていく。

大急ぎで右旋回する。しかし、多奈が慌てた為に遠心力を操作し切れず、慣性が観覧車の方へと容赦なく引つ張っていく。

巨大電子時計が目の前に接近する。赤色の数値は丁度四十四分へと変わった。

ぶつかる。そう思った瞬間。

「……ごめんなさいっ！」

ばきいっ！

多奈は巨大電子時計の液晶画面を思いっきり蹴り碎いていた。まるで雪を巻き上げたように、細かく碎けた画面の欠片がスローモーションで舞った。

その勢いを得て、沢山のカップルを搭載した観覧車を横切っていく。間近で見るネオンは眼球に蔽しかった。

「多奈、これじゃ埒が明かないっ！ これ以上観光地をぶっ壊すのは、観光大好きっ娘として心が痛い

ぞ！」

「そうですね……。……。仕方ありません、武力行使を考えます」

「あのでっかい刀で一撃？」

「いいえ。あのヘリコプター内を制圧し、安全な所に降ろします。これがベストの手法です」

多奈は手短に手順を説明する。

手順と言っても、ヘリコプターのドアを巨大直刀で叩き割って、中にいる操縦者以外の人間を戦闘不能にし、安全な所に降下させるという、物凄くシンプルな作戦だった。

この作戦の重要ポイントは二つ。

一つは、その制圧する場所を海上としなければならない事。もし操縦者が暴れて墜落したとしても、被害を最小限に抑えられるためである。

そしてもう一つは、ヘリコプターの後ろを取って、ドアまで接近しなければならない事。

観覧車を横切り、ジェットコースターのコースをくぐる。視界には、コンクリートで囲まれた海が広がっていた。

前方には、赤いランプを輝かせる警察のパトカーが集まりつつある駅前広場。左には先程走り抜けたビル街が見える。

右手には日本最長のビルタワーと、ライトアップされた帆船。

夜景に囲まれ、ひととき夜の闇に包まれている海には一直線に橋がかけられ、駅前と遊園地を繋いでいた。

「……あそこでターンして、あの場所でループして……。……うん、うん。 よーっし！ これならいける！」

有希は、夢にも出てきた程にプレイしすぎたフライトシミュレーターゲームの画面を頭の中に展開していた。

三次元の箱の中を、自分達とヘリコプターが軌跡を残して動いていく。相手の背後を取るための空戦機動をシミュレートしていく。

「有希？」

「よーっし、計算完了！ 多奈っ！ 騙されたと思って、あたしの言うとおりに飛んで！」

多奈の回答は接近したヘリコプターの音にかき消された。ライフルから弾丸が発射させる音が聞こえる。

回答はイエスだったと勝手に信じ、多奈に大声で指示を飛ばす。

「急降下！ 水面ギリギリを飛んで！」

軌道が一気に垂直降下へと変わり、水面に激突する寸前で水平軌道へと戻る。

ホバー船のような水面ギリギリの高速飛行。切り裂いた風が水面に水柱を作っていく。

突然の飛行物体に驚いたカモメが散り散りに飛んでいった。

水面に水柱の航跡を残しながら飛ぶ私達の前に、橋が迫ってくる。

コンクリートブロックを積み重ねたような橋は複数のアーチを描き、一つ一つは小船がやっと通れる程度。

「橋の下をくぐって！」

指示通りに橋の下へ突入する。一瞬で真つ暗になる視界。見た目よりもずつと狭く、少しでも頭を動かせば、高速で動くコンクリートに頭蓋骨ごと削られてしまうような気がした。

一秒もかからず橋の下を通過する。目の前には高層ビル群が立ちふさがっていた。

「はいっ、ここで一八〇度ターン！」

水面から跳ね上がるように、上空に向けてループ軌道を描く。

追いかけていたヘリコプターを真下に捕らえた位置で、水平飛行へと戻す。

「今度！ あのタワーに突撃！ 寸前で急上昇！」

「は、はい！」

日本最長を誇る、三〇〇メートルのタワーを指差す。

後ろでは、何とか方向転換を終えたヘリコプターが追跡を再開していた。数百メートルの間隔は少しずつ埋められていく。

周囲からの煌びやかなライトを浴びる観光用帆船を飛び越えると、灰色のタワーは寸前にまで迫っていた。

駅とタワーを繋ぐ歩道から、突撃してくるヘリコプターを見つけた人々による思い思いの悲鳴が響いてくる。

落下軌道は一気に垂直に曲げられる。空に向けて長く続くタワーの表面はカタパルトを連想した。視線の先には夜空が広がっている。窓ガラスからの光が何度も通過していく。

速度は毎秒加速していく。強烈な空気抵抗に、顔面が冷たくなっている事を今更ながらに気づいた。視界が一気に開ける。

日本最長のタワーを五秒で登り切った二人の前には、一面の星空だけが広がっていた。距離感の全く掴めない光景。強烈な浮遊感と感動。

「九〇度ターン！ さっきの湖っぽい海に戻って！」

指示を飛ばし、背面のまま後方へと軌道を変更する。視界の先に、逆さまになった夜景が映った。エンジン音は相変わらず、しっかりと二人を追ってきている。

ひっくり返った世界が戻り、夜景に囲まれた海、その先の橋や高層ビル街が見えた時、有希は最後の命令を飛ばした。

「ここでループ！ 空中宙返り！」

視界が一気に縦に流れる。視界一杯の星空を見て、夜空に青色の円を描いた時には、丁度二人が飛んだ場所をヘリコプターが通過していた所だった。

完全に後ろを取っていた。そして、ヘリコプターまでの距離は数メートル。

女子高生パイロット遠野有希の初空戦は大成功だった。

「どうだ多奈！ あたしの操縦テクニクに惚れるなよー！」

多奈の驚きっぷりが有希にとって非常に心地よかった。左手の人差し指をターゲットに向けて叫ぶ。

「よし、多奈！ 後は任せたよ！」

「はい！」

ヘリコプターとの距離が少しずつ縮まっていく。数メートルという所で、多奈は空いた右手を前にかざした。

「貴方の策略に感謝します！」

溢れ出す閃光。光が止む頃には、多奈の右手には三メートル近い直刀が握られている。腕を包む青色の光は刀身を廻り、神秘的な輝きを放っていた。

ヘリコプターのサイドドアに接近する。フロントガラス越しには驚いた顔が二つ並んでいた。

多奈は直刀を上段に構える。

「てやあああああーっ！」

ガキイイイン！

鉄の塊が思いっきり振り下ろされ、ドアから火花が散った。頑丈なはずの鋼鉄は、振り下ろされた刀の形に落ち窪む。

ヘリコプターがその機体を大きく揺らす。フロントガラスに一筋のヒビが走る。

多奈は再度、直刀を上段に構えた。

振り下ろす、その瞬間。

サイドドアが突然開く。その先にいたのは、ライフルを構えた二宮。

一瞬だけ、多奈の動きが止まった。振り下ろす直刀が停止した。

それは僅かな、瞬き程度の一瞬だったが、トリガーを引くには十分な時間だった。ぱしゅん。

圧縮空気が弾丸を打ち出す。高速で打ち出された弾丸は多奈の喉に突き刺さった。白く、長細いダーツのようなフォルム。先には針が付いており、半分以上が多奈の喉に刺さって揺れている。

「……くっ！」

多奈は直刀を投げ捨て、針を抜き取る。

そして、その右腕に青色の光が無い事に気づいて、顔を蒼白にした。

「蒼腕の魔女と言えど、案外あつけないものですね！」

二宮の顔が笑顔で歪む。思わず、勝ち誇ったその顔に拳を叩き付けたくなるような笑顔だった。自然落下。

重力は正常に戻り、二人は自然界の法則に従って落下を始める。

ヘリコプターから離れていく。下には真つ暗な水面が静かに待ち受けている。

時間がゆっくりと流れていく。頭から真つ逆さまに落ちていく中で、有希は広がる夜景を見つめていた。

逆さまに映っていたが、それでも街全体が夜の黒をバックに輝く姿は、幻想的で綺麗だった。

——受験終わったら、絶対観光に来てやる。

静かな海に、水柱が立った。

6.

「……あつけない。非常にあつけないと思いませんか、蒼腕の魔女？」

「……すう……。すう……。すう……」

「……はああ……」

答えは寝息だった。その相槌は溜息だった。

有希と多奈は、電車の座席に並んで座っている。

窓越しの景色から、先程の夜景が高速で遠ざかっていく。ガタガタと縦に揺れる度に中吊り広告が揺れた。

多奈の頭が肩に乗ったまま、有希は背もたれに寄りかかり、全力の溜息をついた。

落下の寸前。巨大直刀が水面に大きな水柱を立てた後、多奈は全力を振り絞って落下軌道を変えた。

水面ギリギリを飛行して、コンクリートの大地に叩きつけられるように着地する。

倒れたまま、多奈は早口で状況を説明した。

さっきの弾丸には一時的に鳳仙花を眠らせる薬と、自分を眠らせる睡眠薬が入っていた事。自分はこの置いておき、その隙に有希は逃げる事。

それだけを言って、小さな呻き声と共に多奈は顔を伏せた。

「た、多奈っ！」

「……すうー……」

思わず叫んだ有希に、帰ってきた言葉は寝息だった。

分かっていたものの、少しだけ肩透かしを食らった気分になったのは正直な所だった。

その後の展開はもはや喜劇じみていた。

勿論、多奈を置いていくという選択肢を選ばない有希は、多奈を背負いながら海近くの階段の影で息を潜めていた。

そこに、先程の二宮と運転手が現れる。ヘリコプターは何処かに無理矢理着地させたようだ。

耳を澄まして、会話を聞き取る。

「……二宮主任。海に落ちちゃって、そのまま沈んだままだったら捕獲部隊の意味が無いじゃないっすか……」

「効き目が良すぎた。すぐに効果が出る事は無いと聞かされていたんだ。不時着する魔女を捕獲するというプランにおける対応としては間違っていない。それにだ、早川。俺が撃たなければ、今頃俺らは蒼腕の魔女に半殺しにされてたぞ？」

「そりゃ、そうっすけど……」

夜景をバックに、早川は静かな海を見ながら深い溜息をつく。

「蒼腕の魔女、上がってこないっすね……」

有希は会話も途中で立ち上がり、その場を後にした。そこから逃げ出すのは、多奈を背負ったままの状態です。改札を抜けるよりも断然簡単だった。

「……つかれたあ……」

思わず呟く。相当な距離を飛んだらしく、家に帰れるのはこれから一時間半後となりそうだった。ぐっすり眠る多奈の体温を肩越しに感じる。

電車は走る。この電車も上空から見れば一つの光点でしかないかもしれない。

顔を閉じる。未だに空を落ちる感触が体に残っていた。風が頬を通過するイメージを感じていた。夜を走る電車は今日も、人々をそれぞれの居場所へと運んでいく。

車掌によるアナウンスが聞こえる。知らない駅名が車内に響いた。

時折揺れる車内。椅子の感触が心地よく、足に吹き付ける暖房が少しだけ熱かった。



伊勢崎多奈による謙虚で律儀な情報戦

Escape 3.

1.

次回予告！

魔法のツナ缶を露天商のオジサンから買い取った有希ちゃん。

蓋を開けるとまあ不思議！ 溢れ出すサラダ油の香りと共に、フリル満載エプロンドレスに魔法ステッキのまぢかる☆ゆきちゃんに大変身！

魔法の力で地球の平和を守ります！ 山一つ消し飛ばす、まぢかるどろっぶきつく、が今日も無実の民家に炸裂するっ！

ある日、憧れの先輩が尿道結石と慢性関節リウマチで入院した事を知った有希ちゃん。

先輩の大好きなワンカップ酒を持ってお見舞いに行こうとする有希ちゃんだったが、病院は既に悪の軍団ニョッカーによつて占拠されていた！

どうする有希ちゃん！ そして、先輩の結石の行方は!?

次回、デッドリーエンジェルまぢかる☆ゆきちゃん第五話、『爆発炎上！ さよなら先輩…… く夢才子編く』をお楽しみに！

「来週も絶対見てねっ！ 見ないとお前ん家燃やすぞ！」



決めポーズをカメラに送る。ウインクのタイミングや人差し指の伸び具合まで完璧だ。その先には、フリル満載の黒色エプロンドレスを着込んだ多奈が立っていた。

「お、多奈く。やっほー」

「……」

多奈は答えず、右手を高々上げる。その手にはいつの間にか、巨大な直刀が握られていた。

「そ、それは、まちがる直刀!？」

そう、伊勢崎多奈は実はニョツカーの手先で、魔法美少女の有希を狙っていたのだ!

そのまま巨大な直刀は振り下ろされ、有希の視界は真っ暗になった。消えかかる意識の中、多奈の声だけが最後に聞こえる。

「貴方の安眠に感謝します」

* * * * *

夢だった。

目覚まし代わりにMDコンポから、ショパンのワルツ第一番変ホ長調作品十八『華麗なる大円舞曲』が爆音のように流れていた。

耳が悲鳴を上げつつも、包み込む布団の温もりがしっかりと有希を離さない。

「うー……。リモコン、リモコン……」

寝ぼけた頭で、MDコンポのリモコンを探す。

探すとと言っても、ベッドから腕を出してぶらぶら動かすだけなので、見つかるわけがないのだが。腕を僅かに開けると、机の上に見慣れた灰色のリモコンが見えた。

その間は二メートル。腕を伸ばしても届くはずのない距離だったが、布団は有希を包んで離さなかった。

寝ながら腕を伸ばす。広げた指の先にリモコンが見える。爆音がファイナーレへと向かっていき、さらにボリュウムを上げていく。

「ううー……」

自分の腕が自由自在に伸びない事を恨む。リモコン君も、もう少し優しさと誠意と言うものがあってもいいんじゃないかと思う。

自分はこのまま二度寝がしたい。本能の赴くまま、惰眠を貪りたい。

今日は月曜日なので普通に学校があったりするけど、目の前の睡眠欲にとっては些細な事に過ぎないのだ。

来い。この手の中に飛んで来い。リモコンに向けて念を送る。

この爆音を消し去るには、リモコンから発射される電磁波が必要なのだ。布団から出たくない自分にとって、それは必要不可欠なのだ。

腕を伸ばし、指の間の先にリモコンを捕捉しながら、念じる。

「……リモコン、来い」

来た。

机の上にあったはずのリモコンは瞬間的に姿を消し、有希の右手の中に移っていた。

赤色の電源ボタンを押し、爆音を退治して、再び臉を閉じる。

ああ、何て布団は暖かいのだろう。何て静寂は心地よいのだろう。ありがとうリモコン。全ては君のおかげだ。

温もりの中、意識は夢の世界へと落ちていく……。

……。

……。

「……あれ？」

がぼっ！ 上半身ごと一気に跳ね起きる。派手に布団がめくれ上がった。

「なーんか今、ものすごい事が起きちゃった気がするー！」

どたどたどたどた！

遠野家の階段は今日も重低音を家中に響かせた。

「大変だ大変だー！」

有希は階段を大急ぎで降り、ダイニングキッチンへと繋がるドアを豪快に開けた。

「どうしました、有希？」

そこにはキッチンに立つ三里と、可愛いクマのプリントパジャマを着こんで優雅にココアを飲む多奈の姿。

窓から差し込む朝日が平和な朝食の風景を演出していた。

トーストの香ばしい匂いが届く前に、有希は満面の笑顔とVサインを突き出して言い放つ。

「あたし、超能力に目覚めちゃいましたーっ！」

有希の元氣一杯ぶりに着いていけず、マグカップを口につけた状態で目を点にする多奈。

「……有希、立ったまま寝ては駄目ですよ」

「寝てないっ！ ここは論より証拠ってやつだ！ 多奈、とにかく黙ってスタンドアップ！」

「……は、はい？」

少々不安そうに、多奈が椅子から立ち上がる。

「ふっふっふ……。驚きすぎて泣くなよー？」

巻き起こる衝動を抑える為には有希は深呼吸した。昨日見ていた星空を頭に描き、思考をシャープにしていく。

体を横向きにし、右腕をまっすぐ伸ばす。右手を開き、不安そうな表情の多奈を人差し指と中指の間の空間で捕捉する。

能力発現におけるイメージを見る。

それは実際の映像ではなく、あくまでも有希だけのイメージだった。

背景は全て黒に塗りつぶされ、有希と対象……多奈だけが浮かび上がる。

——行けっ。

始まりは右肩からだだった。薄い緑に輝く三日月形の光が生まれ、有希の右腕の上を滑るように飛んでいく。

鳥のシルエットにも似たその光を、有希は『鳩』と名づけた。

『鳩』は指の間でホップし、対象へ向けて滑空を行う。滑らかな光の放物線が空間に描かれる。

——戻れっ。

『鳩』は多奈の胸元にぶつかり、今度は有希の方へ戻っていく。多奈の胸元には僅かな光点が輝いていた。

そして、『鳩』は私の手元まで戻り、壁にぶつかったかのように粉々に飛散する。小さい花火のように鮮やかな光の粉末が煌いて落ちていく。

——よし、成功。

時間にして一秒も掛かっていない。そんな瞬間的なイメージが終わると、有希の目の前には多奈が立っていた。

移動位置の設定に失敗したのか、唇が触れ合いそうなくらいの至近距離。

逸らす場所も無い程に接近した視線が合わさる。突然景色が変わった多奈は目を見開いて驚き、同時に顔を真っ赤にした。

「え……？ あ……？」

「実験成功ーっ！」

有希の笑顔と同時に、多奈は腰が抜けたように座り込む。

「ち、近すぎます……」

「あははっ。ごめんごめん。まだまだ不慣れでさー」

あまりに驚いたのか胸を押さえて俯く多奈。有希は右手で頭を掻こうとした。
その時。

「……ん？」

ぬるっとした感触と共に、右手がひどく濡れている事に気づく。
確かめるように右手を目の前に持つてくると、そこには。

血まみれの右手。

「……う、うふええええええー!?」

「ゆ、有希？」

多奈が見上げる。その時、多奈の頬に血の雫がぼたりと落ちた。
指で拭いて、その色を見て、顔を青ざめる。

「有希！ こ、これは一体!?!」

「いや、あたしにも何が何だか……」

びゅー。

その瞬間。注射器を思いっきり押し込んだような勢いで、血液が有希のこめかみから軽快なアーチを描きながら発射された。

爽やかな十一月の朝。外には原色の青空と、黄色に色づいたイチョウが風に踊っていた。

輝く朝日は街を照らし、空には小鳥の囀りが響く。そんな、雲一つ無い平和な朝の青空の下で。

床に血液の斑点が描かれる。

血に濡れた遠野家の食卓に、多奈の悲鳴が響き渡った。

* * * * *

「行ってきまーす！」

飛び出すように玄関を飛び出す。朝の騒動のためか、登校時間はかなり切迫していた。

——何かあたし、昨日っから走りっぱなしだなあ……。

駅までの道のりは徒歩で十五分。走れば十分。十二分後に発車する電車に遅れば、間違いなく遅刻する。

大して何も入っていない鞆を振り回し、制服のスカートを風に揺らしながら、イチョウの舞う街路を走っていく。

その右手首には多奈と一緒のシルバーブレスレットが嵌められていた。

何度も何度も多奈に能力の使用を禁じられた事を思い出しながら、噛み締めるような笑顔を浮かべる。「くうーっ！ 超能力美少女、遠野有希ってかー!? ってかー!? ああもう！ ドラマチック人生万歳ー！」

叫んで飛び跳ねた。いきなり手に入れてしまった超能力。血が噴き出すという事を代償に、離れた場所にある物を移動させる力。届きたい、という意志を叶える、魔法の力。

鳳仙花と呼ばれる、願いを叶える種、を持っていた原因は分からない。

これから自分がどんな事になるのかも分からなかったが、この偶然に遭遇できた事が楽しくて仕方が無かった。

緩い下り坂を一気に駆け下りながら、上空に広がる雲一つ無い青空を見上げる。

昨日、自分がこの空を飛んでいたのだと思うと、頬が緩んでしまうのを抑えられなかった。

——今日もきつと、楽しい事があるに違いないっ！

強く大地を蹴り上げる。

そうすれば重力が変わって飛んでいけるんじゃないかと、そんな事を考えていた。

2.

——無理だ。今は出来ない。

よくある公立高校の教室。中年教師の声がけだるく響く中で、千年谷高校三年C組二十六番である楠木遙は微分積分の計算を諦めた。

決して、解けないからというわけではない。彼女は赤茶髪の幼馴染と違い、授業を真面目に受けているので成績は常に上位だった。

ポニーテールにまとめた髪を揺らし、窓際の席を見つめる。

そこには、幼稚園からの幼馴染である遠野有希が、

「うへ、うへへへ……」

頬杖をつき、窓の外を見つめながら口元をだらけさせまくっていた。正直な所、怖い。

有希の奇行は今に始まった事ではないが、それでも気になって仕方がなかった。授業に集中なんて出来そうに無かった。

「ね、ねえ、可奈……」

周りから「大人しい子」として評される遙に、二席分離れた有希に話しかける勇氣は無く。前の席に座っている宇奈月可奈の肩を叩くのが精一杯だった。

宇奈月可奈は、同性ですら憧れるくらいに長くて綺麗な黒髪を空気に踊らせながら振り向く。

「ん？ 遙、どしたの？」

シャープペンシルで有希を指す。可奈は小さく、「うわあ……」と声を出した。

「何？ 有希ってば、ついに受験勉強の果てに壊れちゃったの？」

「そ、そんな事は無いと思うんだけど……」

少なくとも、昨日の昼に電話をしていた時はあんな状態ではなかった。散々と受験勉強の文句は言っていたが。

そしてそれ以上に、遙は幼馴染に対して一つの確信を持っている。

——有希は、おかしくなるほど勉強をするような子じゃない。

失礼な確信ではあるが、実際の所、この幼馴染の確信は正解だったりする。

「何か変なものでも食べたんかな？」

「犬じゃないんだから……」

数学教師からの注意が有希に向けて飛んだ。結果的に三回目の注意でやっと反応した有希の台詞、「起きてます！ 話は聞いてませんっ！」

は、教室内に若干の笑いと苦笑を生み出していた。

結局、楠木遙は幼馴染が空を見ながらニヤニヤしている理由を知る事は無かった。

例えば、休み時間に、

「そーいや知ってる？ 昨日、渡瀬駅前のハンバーガーショップの窓ガラスがど派手に吹っ飛んだんだ

って！ 爆破テロってやつかな？」

そんな情報が入ってきたとしても、

「へえ……」

といった、何とも普通の返答を返していた。

例え地元であろうと、彼女にとつてそんな話は遠い世界の話にしか聞こえなかった。

そういう事が起きているのは分かる。けれども、それは自分とは一切関係ない事なのだと、そう思っていた。

だから。幼馴染がその事件の当事者で、今さつきはその事を思い出していたなんて、考えもしなかった。

窓越しの席。赤茶髪の幼馴染は空をぼんやりと見つめ、時折頬を緩ませていた。

* * * * *

「体育だー！ 授業という名目の下、散々遊んでやるのだー！」

「堂々と言うことじゃないと思うよ……」

視界にはイチヨウ並木が続く昇降口。幼馴染である楠木遙の小言は一切気にせず、有希は授業で凝った体を伸ばしながら空に吼えた。

晩秋の青空は深い青色を広げている。十一月も終わりということもあり、体操着では若干肌寒い。

「そーいや、今日の体育は何やるんだっけ？」

「えーと……。確か、ドッジボールだったかな」

「よし、全員残らず皆殺しだー！」

「殺すなっ！」

ホイッスルの音色が高らかに響いた。

皆、受験勉強の鬱憤が溜まっているのかもしれない。そんな事を考えるくらいにドッジボールは白熱していた。

飛び交うボールは、乙女が放ったとは思えないほどの殺気と破壊力に満ち溢れている。

「唸れ必殺！ トリプルアクセル避け！」

「有希、邪魔……きやあっ！」

コンマ一秒で編み出した必殺技は非常に華麗な回避を見せ付けたが、同じ内野だった楠木遙に激突するという難点を持っていた。

大地に倒れた二人は仲良く、外野から放たれたボールの餌食となる。

「有希いい……」

「ドンマイドンマイ。必殺技には犠牲が付き物なんだって！」

ジト目で睨む幼馴染の視線は笑顔で回避する。この技はもう少し研究の余地がありそうだ。

その後も白熱を極めたドッジボールは、ついに三回戦目を迎えた。

体も温まりきり、さらには受験勉強という鬱憤を晴らさんとばかりに勢いづいた花の乙女達は、それに戦士の眼光を灯していた。

敵を倒し、自らの生存を勝ち取る。そんな殺伐とした戦場が学校の小さなグラウンドで展開されている。

「てやあああーっ！」

クラスメートの宇奈月可奈が黒髪をなびかせて跳躍する。自らの運動能力を最大限に発揮したジャンプショットが私のチームの内野の命を刈り取っていく。

気づいた時には既に、生き残っている内野は有希だけだった。全てのボールを回避しきった有希と、私以外の内野を刈り取った宇奈月可奈の視線が交錯する。

「有希、命乞いするなら今のうちだよ？」

ボールを持ち、宇奈月可奈が目を輝かせる。風に舞う黒髪に、蒼腕の魔女を連想した。

「そっちこそ！ これから授業終了の間まで、あたしに当てれると思うなよ！」

「上等おっ！！」

助走をつけて跳躍。体を最大限にまで捻ったジャンプショットを、軽やかなサイドステップでかわす。地面に叩きつけられたボールは、バウンドして外野の後ろまで飛んでいった。

ニヒルな笑みをお互いに交わした、そんな瞬間。

隣のグラウンドからカキーンといった、痛快な金属音が響いた。

「危ない！」

野球をしていた男子からの大声が聞こえる。上を見上げれば、硬球が有希達の方へ向けて飛んで来ていた。

気づいた女子から、甲高い悲鳴が上がる。

——当たる！

硬球の軌道は一人の女子に当たるルートを取っていた。当の本人はその場で座り込んでしまっている。腕で頭を防いでいるつもりなのだろうが、そうすれば頭に直撃しないなんて楽観は出来ない。

気づいた時には既に、有希は右手を硬球に向けて突き出していた。

「……鳥よ！」

授業中に考えていた『呪文』を唱える。言葉を発する必要は無いけど、実際に口に出した方がイメー
ジしやすいのも事実だった。

右腕を走り右手から発射される、三日月形の光を発現させる。

「飛べっ！」

瞬間。音速で射出された『鳩』が放物線を描いて硬球を捕らえる。そのままのスピードで『鳩』は手元に戻り、拡散した。

いきなり落下地点を変えた硬球は目の前の地面にぶつかり、身長よりも高くバウンドする。

状況が状況だったためか、誰も私の行動や硬球の軌道を不思議に思う事はなかった。

周囲の緊張が一瞬にして和らぐ。

「……ふう……」

思わず安堵の息をこぼす。いくら使っても疲れない能力ではあるが、気分的に僅かな疲労を感じる。「よし！ そんじゃあ試合再開ー！」

人差し指を勢いよく突き出したが、当の相手は驚いたような視線を有希に送っていた。見れば、誰もが心配そうな表情で有希の方を見つめている。

「あ、あれ？ どしたん？」

「……ゆ、有希……！！」

幼馴染の遙が、今にも泣きそうな顔で有希を指差す。正確には有希の首元あたりを。

——ま、まさか……。

手を当てれば、そこにはべったりとした液体。間違いなく血だった。

髪の毛の間を潜り抜けた血液が頬を通過し、首を濡らし、体操服の右肩を赤色に染め上げていた。

「あ、あははは……」

乾いた笑い声が逆に怖かったのか。

先程よりもポリウムの上があった悲鳴が、秋空の下に響き渡った。

3.

「ごめんなさい」

遠野家流し台前に、多奈の高音で落ち着いた声が響いた。

蛇口から勢いよく放たれた水は、皿にぶつかって無数の飛沫を作り出す。

窓の先には扉越しの青空が広がっている。オレンジに似た食器用洗剤の香りが周囲に漂っていた。

「多奈ちゃん？」

いきなりの謝罪に、遠野三里はスポンジを動かす手を止め、皿を拭く手が止まっている多奈を見つめる。

多奈は僅かに顔を伏せ、その表情は前髪に隠れていた。

「ごめんなさい。私のせいで、有希は……」

布巾越しに皿を強く握る。静かなキッチンに洗濯機の回る音が微かに届く。その中では、血液に染まった有希の寝巻きが洗浄液に揉まれている。

友達と言ってくれた人をこんな目に合わせてしまった。その事実が多奈には重く、辛かった。

「間違いないく、有希にあんな能力がついてしまったのは私のせいです。私なんか来なければ……」

…謝って済む問題では無いですけど、本当に」

「あ、別に気にしないでいいわよ？」

「え……？」

言葉の途中で三里は軽々しく答えた。多奈は思わず言葉を失う。

「だ、だって、いきなり血が出るような……」

「使わなければ問題ないんでしょう？」

「そ、そうですけど……」

「なら大丈夫よ」

簡単に言い切った三里の顔には笑顔が浮かんでいる。母親を知らない多奈にとって、その柔らかい笑顔を見る度に胸が締め付けられるような気がした。

土下座をしろと言われれば喜んでする覚悟さえしていた。辛い叱責が飛んでくるのだと思っていたし、それが当然だと思っていた。

「……」

「納得いかない？」

「……はい」

今朝方に三里が有希に言った台詞を思い出していた。

多奈が必死に能力を使わぬよう説得する中、三里が有希に言った言葉はたった一言。

「有希が選びなさい」

それだけだった。

「私は私の娘を誰よりも信じているの。ちゃんと、有希は有希なりの正義を貫くわよ」

窓越しの日差しが笑顔を照らした。蛇口からとめどなく流れる水流が音を立て続ける。

三里は小さく笑い、『親馬鹿ね』と呟いて、スポンジで皿の油汚れを落とす作業に戻った。

「多奈ちゃん、はい」

汚れと洗剤を落とされた白いプレートを渡される。多奈は反射的に受け取り、その表面に浮かぶ水滴を拭い取った。

白の表面がキュツと音を立てる。綺麗に洗われた皿の音と感触が、キッチンを照らす秋の日差しが、三里の隣にいる事が、何故か多奈には心地よかった。

「取って置きの話してあげよっか？」

笑顔を添えた三里の発言は、最後の皿を洗い終わった時であり、有希が小学校の頃の運動会で客席に巨大大玉を突撃させた話の後だった。

三里の『娘自慢』は聞いていて非常に楽しかった。抑揚のある説明と、ユーモアに飛んだ口調が相手を惹きつけていく。

「これ言うとな、有希は怒っちゃうからオフレコね」

片目を瞑り、可愛らしく唇に人差し指を当てる。多奈は思わず頷いた。

「有希ってさ、何だかいつつも笑ってるでしょ？ 小学校辺りからずーっとあんな感じ。……でも昔ね。一回だけ大泣きした事があるの。後にも先にも本当に一回だけ。それはね……」

語り部が窓越しの青空を見つめ、昔話が始まる。

* * * * *

わたらせ
渡瀬東小学校の校舎に夕陽が差し込んでいた。校庭のジャングルジムもブランコも、上塗りされた赤を輝かせていた。

教室。夕陽に照らされたランドセルが、何処か寂しげだった。

窓際に並び、逆光に照らされたクラスメート四人を前に、有希はただ一つの事だけを思っていた。

——私は絶対に屈しない。

例え小学校と言えども、そこは一つのコミュニティーであり、一つの社会であり、世界の縮図でもあった。

僅か一クラス三十二人によって構成される世界において、遠野有希は勢力として貧弱だった。ただ、それだけだった。

クラスで一番大きな女の子グループという一つの勢力が今、有希の幼馴染を引っ張ろうとしている。夕陽によって作られた長い影は教室を横断していた。

はるか
「遙は、」

小学生にしか通用しない論理で懐柔は開始される。

——遙なら、大丈夫。

それは確信だった。幼稚園以来の親友で、いつも一緒に、お互いがお互いを信じている関係は切断で

きやしない。

楠木遙は、自分の親友は、絶対に私を裏切ったりしない。確信していた。

当の幼馴染はポニーテールを左右に揺らしながら、有希の顔と相手の顔を何度も見比べていた。

その顔には紛れのない混乱が浮かび、目元は僅かに潤んでいた。

相手の言葉に、遙の肩がびくつ、と震える。有希はただ、その光景を見つめ続ける。確信を胸に抱き、幼馴染との友情を信じていた。

そして。

「……ごめん、有希ちゃん……。私、怖くて……」

幼馴染は顔を伏せながら、窓の方へ一歩進んだ。有希から一歩離れた。

窓際に立つ四人の、勝ち誇ったような哄笑。

——あれ……？

崩れる。有希の中で確かだったものが瓦解していく。

「……つく」

思わず口から出た音は言葉をなす事は無かった。

裏切られた。その単語だけが頭に浮かぶ。

衝動が一瞬にして駆け巡っていく。止まらない。止められない。止まる理由なんて、きつと、無い。

有希の中で、ぶつつ、と糸が切れるような音を聞いた。

何も考えず、考える余裕もなく、三步踏み出して、そして、振り上げた右手を幼馴染の頬に、

ばぁん！

空気と、音と、時間が止まった。静寂の世界で、ポニーテールだけが逆方向に揺れた。

右手には嫌な感触だけが残り、心には刃物を突き立てられたような痛みが走った。

遙は頬を押さえ、驚いた顔で、有希を見た。その大きな瞳には涙が溢れていた。

その視線は殴られるよりも強い破壊力を持っていた。有希はこの時、自分の敗北を確信した。

遙が目を瞑る。その目元から涙が溢れ、頬を伝い、床に落ちて弾ける。

その両手は硬く握られ、僅かに震えていて……。

「……有希ちゃんなんか大っ嫌い！」

有希の中で、もつともつと大きな物が壊れる音を聞いた。

気づけば、有希は教室を飛び出していた。ドアに右半身を思いつきりぶつけたけれども、痛みなんて全く感じなかった。

夕陽の帰路を走っていく。息が上がっているのに、足だけが勝手に動く。あの場所から離れるために逃げるために。

家の玄関まで来て、やっと有希は肌がふやけるくらいに泣いていた事に気づいた。

注射の時も、転んだ時も、絶対に泣いた事がない遠野有希が、絶対に負けないはずの自分が、ただただ泣いていた。

有希は初めて、部屋の鍵を閉めた。電気をつけず、カーテンを閉めて、ベッドに自らの体を打ちつけ、

真つ暗な部屋の中で泣き続けていた。

「……つく、ひつく……」

喪失感と、敗北感と。沢山の感情が体中を廻り、壊していく。そんな感触の中、涙だけが延々と流れていく。

「……有希？」

母親の三里の声がドア越しに聞こえる。しばらくして、鍵をかけたはずのドアが開いた。外からの光が、少しずつ有希の部屋を侵食していく。

部屋に入った三里はカーテンを開けた。窓から夕陽が差し込む。

そのまま、有希が倒れたままのベッドに座り、頭を撫でた。有希はその手を振り払いたかったが、振り払えなかった。少しでも顔を上げたら、涙まみれの顔が見られてしまうのだから。

「何か、あったの？」

「ううん」

生まれて初めての嘘と拒絶だった。初めての嘘は、胸に刃物が食い込むように痛かった。

自分は今、裏切ったのだと。自分の発想は勝手に言葉となって頭を廻り、涙腺を更に攻撃した。

「……つく、ひつく……」

嗚咽が止められなかった。有希に出来る事は、出来る限り声を小さくして、この状態を伝えない努力だけだった。

三里は何を言わずに、ただ有希の頭を撫で続けている。

それはたったの数分だったのかもしれない。有希にとってその時間は、数時間にも数日にも、永遠にも感じられた。

部屋には静寂が流れている。この静寂を打ち壊すには、有希が全てを話すしか手段がなかった。頭を撫でる手が暖かかった。髪を梳く指が心地よかった。

どこまでも愛に溢れ、優しく、柔らかく、暖かい、そんな拷問の時間は、有希が泣き止むまで続いていた。

「……遙と喧嘩した。……引っ叩いちゃった」

「……うん」

ついに白状した有希は、せき止められた水が溢れ出すように話し始める。

「そしたら、遙が、有希ちゃんなんか大嫌い、って……」

「うん」

「……ひっくっ……」

言い出して、思い出して。また悲しくなって涙が溢れる。胸が軋む。嗚咽が止まらない。

「ねえ、有希。有希は、遙ちゃんの事が嫌い？」

「……ううん」

悲しくて仕方が無いが、未だに遙の行動を怒っているのも事実だった。

それでも、嫌いになるというのは別問題だった。

一人の帰り道は嫌だった。隣にはいつも大人しい幼馴染がいて、馬鹿な話をして、少しだけいじめて、すぐ泣きそうになるから慰めて。

それでも笑顔でいられる、そんな時間がなくなってしまう事が嫌だった。

「有希のした事は、間違ってたと思う？」

「……わかんない」

間違ってるように思う。けれども、衝動を抑え切って笑顔でいる事が正しかったとは思えなかった。ただ、それでは正しい行動とは何かと思う。誰がそれを正しいと判断するのか。その誰かの正しさは誰が判断するのか。

勝手に始まる考察が形に成りかけ、涙と共に消えていく。

「うん。有希のした事は間違ってた。有希が間違ってたと思ってたんだから、間違ってたなかったんだよ。有希は有希の正義を貫いたの」

でもね。有希の頭を撫でながら、さらに言葉は続く。

「人によって正義は違うの。時々、その方向が逆な人もいたりする。どっちも正しくて、どっちも譲れない、そんな時が来るかもしれない。その時は……立ち向かうか、逃げなくちゃならない。逃げてもいい。それが正しいと思うのなら、それは正義なのだから」

言葉の内容は半分も理解出来なかった。ただ、大切な事を伝えようとしている意志だけを強く感じていた。

「……有希。有希は、有希が正しいと思う事……。有希なりの正義を貫きなさい。自分が正しいと思う

事を主張して、行動するの」

「正義？」

「そう、正義。とつても、大切な事。誰のものでもない、有希だけの意志。……だから……」
ゆつくりとした暖かい口調で、なだめる様に。

「自分の足で、自分の体で、自分の人生を選びとる事。有希が正しいと思つた事を貫きなさい。悪いと思つているのなら謝りなさい。そして、それは有希が選びなさい」

有希を顔を上げた。この時に見た、夕陽に照らされた優しい笑顔を、有希は一生忘れる事は無かつた。

「胸を張つて。そして、今日と明日と二年後を楽しい一日にするために、精一杯頑張つて、時々泣いて、物凄く落ち込んだりもして。それでも、有希も周りも一杯一杯笑えるような、そんな優しい子に……」
インターフォンが鳴つた。

ドア越しに、聞き慣れた幼馴染の、有希を呼ぶ声が微かに聞こえた。

「……有希が選びなさい」

再度、有希を呼ぶ幼馴染の声が聞こえた。微かで、弱々しい、そんな呼び声が有希に判断を問いかけている。

三度目の呼びかけは涙声だった。

有希は飛び跳ねるように起き上がり、階段を駆け下り、体当たりで玄関を開け放つた。

そこには、大粒の涙をぼろぼろ落とす幼馴染が、夕陽を背に立っていて。

「ごめんね、有希ちゃん、ごめんね……」

泣きながら謝罪の言葉を何度も並べる幼馴染に、『ああ、遙はあたしより強い子なんだ』と確信して。こんな時にも意地を張って謝れない自分が、何だか物凄く悲しくて。涙だけが勝手に溢れて、前が見えなくなつて。

だから。

初めて幼馴染に言った謝罪の言葉の後、有希は声を上げて泣いていた。

悲しくて、嬉しくて。泣かないと衝動を抑えられなかった。

夕陽が綺麗だった。その日、世界は鮮やかな赤に輝いていた。

* * * * *

「馬鹿っ！」

幼馴染の楠木遙は、思いつき有希の腕を引っ張って保健室へずんずんと向かっていく。

昇降口を土足で入り込み、普段からは想像できない位のヒステリックな大声を上げる。歩く度にポニテールが左右に揺れた。

すれ違う生徒が遙の只ならぬ雰囲気驚き、有希の体操服の血痕に驚いていく。

「だ、だからさ、大した怪我じゃないんだってば……」

「うるさいっ！ いいから歩くの！」

問答無用の怒り口調の中、その目は涙で潤んでいた。

落ち着いた口調でお姉さんぶる幼馴染の姿はそこには無く。有希は夕陽に照らされた十年前の光景を勝手に思い出してしまふ。

引き摺られていく。

いつの間にやらお姉さん役が変わっていた関係。この関係は、根本的な部分では何も変わっていない。有希は今も、この泣き虫な幼馴染を信じている。

「有希！ 笑ってる場合じゃないでしょう!？」

引き摺られていく。跡が付く位に強く握られた右腕の感触が、不思議と心地よかった。

4.

千年谷駅東口から総合体育館行きのバスに揺られる事三十分。

更に歩く事十分という非常に面倒な所に、児童福祉施設『リープリーフ』は住宅街に溶け込むようにひっそりと建っていた。

周囲は大人の背丈以上の白色コンクリートの壁で囲まれ、正面玄関は鉄格子のような重厚な門が待ち構える。

中にはサッカーグラウンド程の広大な芝生が広がり、所々が錆びたブランコが風に揺れていた。

二階建ての建物は白のコンクリートで形成されており、図書館のような風貌を見せている。屋根の頂点には丸く大きな時計が嵌め込まれ、二時を指す短針の後ろには、丸く反り返る広葉樹の葉が模様として刻まれていた。

多奈は門の前に立ち、二メートル強の鉄格子を飛び越える。

生まれ育ってきたその家は、子供の帰りを無言で歓迎しているように感じた。

「たーなちゃんっ、おつかえりいいいいーっ！」

「ただいま戻りま……あう……」

館長室に入った多奈に待っていたのは、館長の娘であり、副館長でもある沢目舞佳さわめまいかのタックルと抱擁だった。

年齢は二十代前半。ブラウン色の入った長い髪を緩い三つ編みにし、その顔にはフレームレスの眼鏡がかけられている。クリーム色のレディーススーツを着こなし、何も言わなければ、一流の秘書のような知性を放っていた。

「いやったね多奈ちゃん！ もー、お姉さんってば多奈ちゃんが帰ってこれないって聞いて、夜も全然寝れなかったよー……って、ごめん、実はかなり寝ちゃったりして。あははっ。そーいや、一穂から聞いたよー？ 追手ぶっ倒しちやったりしたんだよね！ さっすが多奈ちゃん！ 今年のカッコ可愛いで賞は私のものって感じ！？」 絶対、後で詳しく聞かせてね！ 最近ネタが尽きちゃってさー」

「……あー、はい……。分かりました……」

今度は多奈の右手を両手で握って上下に振り回す。多奈はされるがままだった。多奈にとっては幼い頃から世話をしてもらった姉のような存在であるが、未だに舞佳のこの勢いに慣れずにいる。

また舞佳の趣味（少女向け漫画描き）の為に、半日拘束されて根掘り葉掘り話さなければならぬのか……と、少しだけ気が沈んだ。

しかしながら舞佳は、鳳仙花による能力を拒絶し、サーチャーからの捜査網を振り切る『警鐘』と呼ばれる能力者である。

舞佳が四六時中、施設全体にバリアを張り続けている為、この施設の安全は守られていた。

「楽しんできたか、多奈」

「……はい」

低く渋い声が館長室に響く。館長は背後の大きな窓から差し込む光を逆光にし、重厚な机に両肘をつけて手を組んでいた。

名前は沢目道隆さわめみちたかと言うが、皆からは館長、あるいは『お父さん』と呼ばれる。

六十歳とは思えない程に広い肩幅。スーツ越しでも分かる、膨れ上がった筋肉。身長はほぼ二メートルあり、彫りの深い顔と強烈な眼光を供えていた。

口数も少なく、熊でも素手で倒せそうな姿からは、強烈な威圧感が放射されているようだった。

『サーチャー』と『警鐘』の二つの能力を開花させた、世界唯一の、双花。

「あははっ。お父さんってば昨日の夜ね、多奈ちゃんの事をすんごく心配してたのよ？ お酒飲みな

がら何度も、『多奈は仲良く出来てるだろうか』とか言っちゃってさー！」

「……………」

舞佳が腹を抱えて笑う横で、館長は表情を変えぬままに黙した。それは相変わらずの、親子の光景だった。

多奈は昨日今日の出来事を嘘偽り無く報告し、最後に質問で締め括った。

「……館長。質問があります。有希は何故、」

「遠野有希は昨日、鳳仙花を植えられた。よって、奴等の捜査網に引かかった。昨夜の追撃と今朝の開花は、そういう事だ」

「え……………」

質問の回答は早すぎた。

「多奈。お前の右腕には、数千万の鳳仙花の種子が埋め込まれている。その一つが、遠野有希に埋め込まれた」

表情を変えぬままの淡々とした説明に、思わず舞佳は声を荒立てる。

「ちよ、ちよっとお父さん!? その話って、多奈ちゃんには秘密って……………!?!」

「……鳳仙花は一人一つしか植えられない。それは多奈も例外では無い。右腕にあるのは、種房。花が枯れ、種として完熟し、弾けるはずだった種房が無理矢理に埋め込まれている」

「……………」

一時の沈黙。多奈は右腕を思わず見つめた。

十数年生きてきて、自分の右腕がどうなっていたのかも知らぬままだった衝撃。そして。

「……有希が鳳仙花を開花させてしまったのは、つまり……」

「……能力使用時に右腕が光るのは、能力に反応した種房が小さく弾け、種子がこぼれ出すからだ。その光に触れた人間は、鳳仙花を植えつけられる」

「つまり……私のせいなんですわね……」

館長の沈黙が肯定を示していた。俯く多奈の脳裏に、血液を流した有希の笑顔が浮かんだ。

イチヨウ並木を駆け抜けた際に、多奈の右手は有希の手を握っていた。植え付けはそのタイミングだったのだと確信する。

「……何故、今まで説明してもらえなかったのですか？」

「普段なら、腕輪の効能で種の拡散が防げていた。この施設内の人間は開花するしないの差はあるが全て鳳仙花持ちだった。腕輪の無い状態で一般人に接触する機会さえ無ければ問題が無かった。……今回は異常事態だった」

館長は手を組んだまま、大きく息を吐いた。

「そもそも……。何故に我々リープリーフは奴等……株式会社フロントグリップと敵対し始めたのか。全ては多奈の右腕に埋め込まれた種房から始まっている。……六年前の話だ」

「……話してください」

「……話したくなかったからこそ、今まで黙殺していたのだがな……」

館長の低い声が六年前を語り始める。
今日は昔話をよく聞かされる日だなど、そんな事を多奈は思っていた。

* * * * *

それは爆音にも似た、莫大な質量がねじれ、千切れ、砕ける音だった。

青白い月の夜。周囲を森林に囲まれた株式会社フロントグリップ商品開発研究所は、その重力を反転し、電気、水道、ガスその他全ての配線をねじ切り、コンクリートの楔を引き抜こうとしていた。

予備発電装置すら壊れ、停電による闇が建物を制圧する。コンクリートが断続的に軋む度、天井に叩きつけられた者達は弱々しい悲鳴を上げた。

「あ……あああああ……!!」

それは、このまま自分達はこの建物ごと空へと落ちていくのではないかという、経験しようもない恐怖だった。

それは、実験だった。

『結実した鳳仙花を、弾ける前の状態で保管できないか』という課題に対し、『人体に戻せばよいのではないか』という仮説の実証実験だった。

宇宙から来たその種は、人に根付き、人の願いを叶え、叶えきった時に記憶を全て奪い去り、人体か

ら飛び出す。そして、その種を撒き散らす。

決められた形を持たず、質量を持たない種。触れたら破裂し、触れなくともしばらくしたら破裂する種房を手元に置きたかった。

その日の朝方、老齢の研究員から種房が飛び出した事が始まりのきっかけだった。

勝手に破裂する物が相手である為、実験は即日敢行となる。

被験者の名前は伊勢崎多奈。既に鳳仙花を開花させた十歳の孤児少女が選ばれた。

この研究所には鳳仙花における調査機関が存在していた。鳳仙花を、感染症、とし、記憶を無くさずに種を殺す方法を追求する機関。

研究には状態の進行を長期に渡り調べる必要があり、『定期健診』という名目は絶妙だった。たまたま本日が『通院日』だった少女を連れてくる。捕縛方法はそれだけだった。

「沢目は？」

ラジオのスタジオのような実験室に入るなり、辻堂敦……株式会社フロントグリップ社長は、サブモニターに映る屈強な男が眠っているのを確認した。つじどうあつし

副社長であり、二十五年前に起業して以来の相棒であり、この実験に最も反対する沢目道隆に睡眠薬を盛ったのは初めてだった。

しなやかな体躯をスーツで包み、ナイスミドルと周囲から称される表情を一秒だけ曇らせる。

「よし……。時間が無い。やれ」

業務命令はその一言だった。ガラス越しの部屋に音声が届く。

何の計器も無い、ベッドだけの部屋。室内には白衣の男、黒い服を着て寝かされたままの伊勢崎多奈。そして、青い光を放ち、浮遊する球体……鳳仙花しか存在しない。

手術は一瞬だった。白衣を着た男が能力を用い、鳳仙花の、位置をずらすと、青に輝く球体が多奈の右腕に吸い込まれるようにして消えた。

一秒後。

青の光が多奈の小さい体を包み、ゆっくりと宙へ浮いていく。髪が重力を失ったかのようにゆらゆらと踊る。

映画じみたその光景は、どこか神々しさすら感じられた。

「……上手くいったのか？」

誰かが辻堂の声に答える前に、多奈の瞳がゆっくりと開く。視線がガラス越しの男達へ向かう。

その瞳は少女の物とは思えない程に冷たく、意志の無い、おぼろげな瞳だった。

そして。

ゴガアアアンツ！

轟音と共に、建物全ての重力が反転した。

床に固定されていない全ての存在が天井に激突する。悲鳴の反響。停電による闇が一瞬で建物を制圧した。

「あぐっ……あ……」

天井へ頭を打ち、辻堂敦は呻く。その視界の空中を、多奈が高速で通過する。その右腕からはガスバーナーのような勢いで青の光が噴き上がっていた。辻堂はその光を、鳥の片翼のように感じた。

音も無くドアが円形にえぐれ、穴が開いた。物質の結合におけるベクトルを全て逆にした結末は、宙を飛ぶ少女に道を提供し続けた。

多奈は廊下を高速で飛び落ちていく。その瞳に覇気は無く、意識も無かった。それは、暴走だった。

「……ん？」

正面玄関から正門まで真っ直ぐ伸びる道を、褐色のライトが柔らかく照らしていた。受付嬢としての仕事を終えた帰り道。真鶴成葉まなづるなるはは振動と破壊音を聞いて振り返る。

その腕には二歳になる息子の直人なおとが静かに眠っていた。

「あれ……？」

振り向いた先には暗闇。いつもなら煌々と照明が付き、不夜城と呼ばれる職場が全て消灯している。風が吹き、枯葉がカサカサと静かに音を立てた。

呆然と見つめる成葉の目に、青色の光の点滅が映る。

その光点は廊下のガラス窓を高速で移動し、正面玄関を通過する。そして。

「え……う、嘘っ？」

成葉の前まで到達するのに、一秒も掛からなかった。弾丸のスピードで接近した多奈は無反動で停止、浮遊する。

右腕から噴き出し続ける青の光。意志の無い茫洋とした瞳が成葉を見下ろしていた。

「あ……」

突然の出来事に、成葉はその場にへたり込む。直人を抱く腕に力を込めた。

多奈はゆっくりとその右腕を伸ばし、成葉へ向ける。

それは、本能だった。鳳仙花の繁殖本能。根付き、開花させられる人間を選んだだけの事だった。

「や、やめて……」

涙が目に滲む。成葉には何が何だか分からない。ただ、危険だという事だけを漠然と理解した。

成葉の目の前で光の片翼は折れ、右腕に吸い込まれるようにして消えた。

視線が交差する。しかしながら、多奈には成葉の声は届かなかった。

一瞬後。

「きやああああーっ！」

光の奔流が成葉を襲った。鉄砲水の勢いで青の光が多奈の右腕から放出され、成葉の全身に叩きつけられていく。

痛みも衝撃も無い濁流の中、成葉は直人を庇う様に抱きしめた。

「いや……。やめて……。やめてよお……！」

青色に染まる視界。成葉は強烈な眩暈を感じていた。

数十秒続いた光の蹂躪は、接近する足音で停止する。

「多奈あーっ！」

沢目道隆。スーツ姿の屈強な男が全速力で多奈へ向かっていく。

多奈は右腕を沢目へ向け、光の奔流を放った。

「遮れ！」

パキーン！

『警鐘』という名の、拒絶の力。硬質なガラスの音と同時に、沢目道隆の前に透明な膜が現れ、光の奔流を二つに割った。

沢目は滝を登る魚のように光の濁流の中を疾走し続け、多奈を力ずくで抱きしめる。

「隔絶せよ！」

キイーン………！

沢目を中心に透明な球体が展開する。

次の瞬間、球体の中で光が爆発した。荒れ狂う青の暴風に二人の姿は掻き消える。

「……な、直人………」

成葉の腕に抱かれた直人がゆっくりと目を開く。その瞳が成葉を見つめ、無邪気な顔で笑った。

その様子に成葉は心から幸せそうな笑顔を浮かべ、ゆっくりと倒れた。

満天の星空の下に、叩きつける拳の音が響いた。

「辻堂、貴様あーっ！ 貴様が何をしたか理解してるのか!？」

沢目道隆は辻堂敦の胸倉を掴み上げていた。その圧倒的な膂力は辻堂の体を僅かに浮かせていた。頭上の夜空。褐色のライトが、倒れた多奈と真鶴成葉を照らしている。

二人の視線が交錯する。怒気に震える沢目を、辻堂はの冷淡な瞳が捉えている。

「……」

一秒の沈黙を置いて、辻堂の腹部に強烈な二度目のボディブローが突き刺さった。

「がはっ、ごほっ……！ まさか、この年になって殴られるなんてな……。いつぶりだ？ 三十年前にお前の上さんを取り合った時以来か？ それとも」

再度、ボディブローが叩き込まれる。辻堂の立場を誰よりも理解していた沢目には、顔は殴れなかった。

「あぐっ……！ さ、沢目、お前は無駄に体を鍛えすぎだ……」

「……辻堂。何故、多奈を選んだ？ 被験者など、私でも良かった筈だ」

「お前はお前の立場を考えろ、副社長。社長より仕事の出来るお前がいなくなったら、この会社はどうなると思う？」

「そんなものが言い訳かっ！」

四度目のボディブロー。辻堂の体がサンドバッグのように揺れた。

「ぐ……あ……。なあ、沢目……。この研究施設は鳳仙花を安全に殺す為に、お前の提案で作ったものだ……。確かに、人を超えた力など卑怯だと思ったからこそ、俺も賛成した。……だがな、沢目。この

鳳仙花には殺すだけじゃなくて……利用価値があるとは思わないか？ 夢を叶える種なんだ。使い方によつては、俺たちだけしか知らない、正に夢を叶える種になる」

「……辻堂。貴様が先日の商談で鳳仙花の能力を使った事は知っている。三十年前の誓いを痴呆する年になったようだな」

襟を締め付ける握力が更に強くなる。喉を圧迫されながらも辻堂敦はサデイスティックな笑みを浮かべていた。

「……そう、年齢だ。俺等にはもう時間が無いんだよ……。なあ、沢目っ！」

瞬間、辻堂の瞳の色が緑色に輝く。歪む空間。脳に熱した鉄を叩きつけられるような激痛が辻堂に襲い掛かった。

「ぐ……ぐああああっ！」

沢目の手は辻堂の襟元から自身の頭に移っていた。理性を破壊する激痛に、全身から汗が噴き出す。理性を砕き、相手を屈服させる。それが辻堂敦の能力だった。

地面をのた打ち回る沢目を見下ろしながら、辻堂は淡々と語り始めた。

「昔、酒飲みながら言ってたよなあ、『俺は歴史に残る男になる！』って。俺な、実は本気なんだ。今でも本気なんだよ。目尻に皺が出来た今でもな」

パキッ。硬質な音が響き、沢目の能力遮断能力が機能する。

「なあ沢目。俺は娘からバースデーカードを貰う度に焦燥を感じていたよ。このまま一企業の社長として、俺の人生はこれで終わってくのか、折角生まれたのに俺はこの世界で何も動かせぬままに終わるの

か……ってな。……もう俺たちも五十歳を過ぎた。時間が無い。目標の為に、もう形振り構っている年じゃないんだ。……俺は俺の決意を曲げない。曲げるつもりは無い。だから、俺は進む。鳳仙花の力を使って、望む方向へと進む」

視線の力を打ち払い、ゆっくりと沢目は起き上がる。その顔は青ざめ、息は絶え絶えとなっていた。「……やっぱ、お前の方が強いよなあ……。昔から何でもそうだった。仕事も、人望も、女房の取り合いも。……けどな、展望だけは負けてないと思いたいでね。最後に俺のお願いを聞いてくれるか、親友？」

二人の視線が交錯する。三十年という、互いの妻よりも同じ時間を共有した親友の、決別を確信しながら。

「……その少女を、俺の養女にしたい」

辻堂は顔を殴られ、大地に叩きつけられた。

沢目副社長の辞任及び、とある研究部署の解散はそれから一週間後の出来事だった。

彼は自身の莫大な財産を使い、潰れかけの保育園を買収。リープリーフと名づけられた児童福祉施設には鳳仙花持ちの子供が集められた。

さらに郊外の研究施設を買占め、フロントグリップにて沢目副社長に心酔していた研究員達が密かに移動した。

全ては、辻堂から逃れる為に。鳳仙花という種を安全に殺す為に。

それから六年間、対立は続いている。

* * * * *

話を聞いている間、多奈はずっと右腕を見つめていた。思い出そうにも、六年前の記憶は一切浮かばなかった。

「……真鶴成葉という女性は今、どうしていますか？」

「……知らん。私の探査網に何の感も無い。警鐘の腕輪をつけているか、あるいは……」

死んでいる。その言葉を沢目は続けなかったが、多奈にはその沈黙を正しく理解していた。

無言で振り返り、ドアノブを握る。

「……多奈？ どうするつもりだ？」

「有希の……鳳仙花を潰します。全て私のせいです。こんな無駄な力のせいで、有希の人生を変えてしまうなんて事は耐えられません。鳳仙花を潰して、終わりにします。例え記憶が消えても一日二日……まだ間に合います」

「出来るのか？」

「……はい。潰す事なら、出来ます」

即答でできなかった。舞佳が心配そうに多奈の華奢な背中を見つめる。

「多奈ちゃん、私がこういう事言うのも何だけど……。……記憶って尊いものだよ、多奈ちゃん。それ

を消す事は、有希ちゃんと多奈ちゃんの関係が無くなっちゃうって事だよ？ 有希ちゃんは今もう、多奈ちゃんのことを呼んだりしない。思い出したりもしないんだよ……？ 初めての友達……なんだよね……？ それって……悲しすぎない？」

「私は……」

思い出す。いきなり車から引きずり出された時の腕の痛さ。イチヨウ舞う中を走り抜けた時の手の暖かさ。初めて食べたハンバーガーの味。歩道橋からの夕焼け。暖かい夕食。星を見た夜の冷たさ。手を繋ぎ、飛び落ち続けた夜景の街。自分の事を友達と言ってくれた、夜の公園。

記憶を消しても、この事実は無くならない。その時の感触を多奈はきつと憶え続ける。

けれども、有希にとっては全て無かった事になる。二人の出来事なのに、多奈の中だけでしか存在しなくなる。

あの時は楽しかったよね。そんな会話は一生出来なくなる。そしてこの先、有希との思い出は増える事は無い。

胸が軋みを上げる。

それでも。この先に有るべき有希の人生を自分の所為で捻じ曲げてしまうのは耐えられない。

血液を流した有希を思い出す。三里の顔が浮かぶ。彼女は笑顔で『別に構わない』と言ったが、それでも多奈は納得しきれなかった。

どんなに辛くとも、有希の為になるのならば、それを選びたい。だから。

「私は……。私は、遠野有希の記憶を、消します。私が、私の意志で、有希に別れを告げに行きます」
一礼して、振り返って、歩き出す。
館長室のドアが、大きな音を立てて開いた。

5.

「うーん、なんとも絵になる夕陽だねえ……」

晩秋の夕陽は空とイチョウを赤色に染め、鮮やかな世界を演出していた。

有希はお菓子とボールペン二本しか入っていない鞆を後ろ手に、帰り道を歩いていく。

息を大きく吸い込む。十一月の冷気が心地良かった。進む足は軽く、乾いた足音が響いていた。

歩き始めて五分。

家から十数メートル離れた住宅街路に、多奈と一穂が立っていた。

バックに夕陽を背負い、長い影法師が道路に伸びている。

風に揺れる黒髪は夕陽に照らされて赤く染まり、昨日の歩道橋での出来事を彷彿とさせた。

「お、多奈。一穂も一緒にどうしたの？」

疑問に回答することなく、多奈は有希に真剣な眼差しを送っている。

「有希」

強い風が吹いた。散り終えたイチヨウが空へと舞い上がり、多奈の髪が大きく靡いた。

突風が止み、吹き上げられた葉が夕陽を照らされて降り続ける中、多奈はしっかりとした声で言った。

「お別れを言いに来ました」

「ええつと……、お兄さんのお迎えが着たから今日は帰るって事？ そんなじゃ、帰る前に携帯の番号」

「有希」

多奈は静かに目を閉じ、有希の声を遮った。

「……これから私は、有希に植わってしまった鳳仙花を潰します。そして私は、二度と有希の前に現れません」

その顔は全くの無表情で口調もいつもと同じだったが、泣く寸前のような悲しい雰囲気が多奈を包んでいる。

多奈は握手を求めるようにゆっくりと右手を差し出した。その腕には、青色の光が輝いている。

「……何で？」

「有希の能力が非常に危険であると私が判断しました。私が、私の意志で、有希の能力を潰します」

「……確か、鳳仙花って、無くなっちゃうと」

「記憶が消えます。……大丈夫です。消えるのは昨日今日の事だけです。だから……」

「絶対に断る！」

有希は差し出された右手を横薙ぎに叩いた。多奈の悲しそうな表情が胸に突き刺さる。けれども、苛立ちの方が上回っていた。

「いい、多奈？ 記憶ってのは物凄く大事なものだよ？ あたしがあたしで在るって言う事は、今までのあたしの記憶を持つているって事だからね？ その蓄積こそが、自分なんだって思うもの。記憶喪失つてのは、死ぬ事と同じ。体は無事でも、今のあたしはそこで死ぬって事なんだよ。第一、昨日今日って言ったら多奈と会った日でしょ？ それが消えるなんて絶対に嫌！ この今の、多奈を知っているあたしは殺させない！ あたしは全力の抵抗を持つて、それから逃げる！」

一気に言い切る。多奈は叱られた子供のように肩を落としていたが、その悲しげな目には強い意志が浮かんでいた。

「……納得してもらえないのは承知の上です。私は、私の正義を、力づくで遂行します」

秋風が黒髪を揺らす。その言葉が誓いの言葉だったかのように、多奈の表情に任務を遂行する冷徹さが浮かぶ。

右手の光が一層光度を増した。

「ごめんなさい、有希。私は良い友達になれませんでした」

多奈が地面を蹴る。その瞬間。

「……あ……っ」

突然、多奈が前のめりに倒れる。

「多奈!？」

今まで沈黙を徹してきた一穂が駆け寄る。倒れた多奈の首元には、白いダーツのような麻酔針が突き刺さっていた。

「……手順が違うのよ」

声は多奈の背後だった所から聞こえた。夕陽を逆光にしたそのシルエットはゆっくりと近づいてくる。「今から捕まえます、つて言った後に捕まえるなんて馬鹿馬鹿しいと思わない？　そういう事は、問答無用に捕まえてから言えばいいのよ。建前なんて最後でいいのよ。よく言うじゃない、まずは行動、つて」

硬い革靴の音を鳴らしながら、その声とシルエットが近づく。

そこに現れたのは、多少崩した感じのセミロングヘアに眼鏡をかけた女子高生だった。

着ている緑色のブレザーの制服は明らかに有希の学校の制服とは違っている。

「はい、こんばんは。蒼腕の魔女とその他の方々」

夕陽が眼鏡を光らせる。高圧的な視線が二人を睨みつけていた。

「敵かつ！」

一穂は胸ポケットから拳銃を素早く取り出し、その女子高生に銃口を向けた。

その光景に、女子高生はわざとらしい溜息をつく。

「……だから、手順が違うのよ。まず撃つの。撃って、撃ちまくって、私をボロボロにした状態になつてからでいいのよ、その台詞」

銃口を向けられたまま、眼鏡の女子高生は平然と近づいてくる。

一穂の指が、ゆつくりとトリガーを引いていく。

「残念ながら手遅れよ、お兄さん。もう状況は限りなく手遅れなの。もっともっと最初の段階から手を打っておくべきだったのよ。さて……」

人差し指が、ゆつくりとした動作で目元を指す。

「はい、二人とも。私の目に注目」

明らかに異なのは分かっていたが、いきなりの言葉に二人の視線はその眼鏡の女子高生の目に向かつてしまっていた。

眼鏡越しの目には、輝くような緑色の黒目が映っていた。

瞬間。有希の中で爆風が吹き荒れた。実際に起きた風ではなく、ひたすらに体感だけが爆風の中に飛び込んだ。

脳を直接揺らされ、心臓をこのまま持つていかれるような、爆風。

「……………うぐ……………」

視線がその緑の双眸に固定される。金縛りに在ったかのように指一本動かせない。

「はいはい、気持ちに分かるけど、ちよっと蒼腕の魔女から離れてくれるかな？」

その言葉が甘く甘美なものに聞こえる。動かせないはずの体が勝手に動き、多奈を差し出すようにして離れていく。

——何やってんだ私！ 動け！ 抵抗しろ！

女子高生はゆつくりと近づいてくる。有希には、その姿を睨みつける事しか出来なかった。

そんな有希を見ながら、眼鏡の女子高生はサディスティックな笑みを浮かべた。

「視線って不思議だと思わない？」

答える訳が無い事を知りながらの質問だった。

「視線って、所詮は眼球がどっちを向いているかっただけの話なのよね。そこから物理的な運動は一切発射されてないの。なのに、私達は何故か視線を感じ取れるし、視線だけで侮辱されているように感じたり、恋が芽生えたりするのよ。不思議だと思わない？ そういう意味だと、この視線ってものは十二分に超能力の領域に入ってるような気がするのよね」

動け。その命令を体に送るが、どこかでそれを拒否する力が発生する。

「だからね、その中には、目が合っただけで、歯向かえない、って思わせる視線があってもいいかなって思うのよね。つまりそれが私の力です。地味で大変申し訳ありません……っ」と

眼鏡の女子高生は、同じ体型の多奈を重そうに担ぎ上げる。

連れてかれてしまう。しかも、自分の目の前で。

「……まあ、そういう敵意全開の視線も嫌いじゃないけどね。でも……」

空いた右手には散弾銃のような長い銃身の銃が握られていた。その銃口は有希をポインティングしている。

「少し寝ててくれる？ そんなでもって今日の夜とかに物凄い悔しがって、それでも勝てない事に気づいて、一年くらい経ったら綺麗さっぱり忘れてくれる？」

ぱしゅっ。

肩に白いダーツが刺さった。一瞬にして意識は混濁し、闇の中へと落ちていく。
——絶対、助ける。

それだけを強く思い、有希の意識は一気に停止した。



新4号国道追討戦

Escape 4.

1.

有希が目覚めた時には既に多奈の姿は無く、夕陽も落ちきっていた。

街灯の下、未だに意識を失っている一穂は、まるで倒れてる酔っ払いのようだった。その体を揺すって起こす。

「……多奈は!?!」

それが、目覚め、立ち上がり、状況を思い返した一穂の一言目だった。有希は横に首を振る。

改めて有希は一穂を見直す。年齢は二十代半ば。ショートレイヤーのサラサラとした黒髪。多奈に似た落ち着いた瞳。

長身に黒のコートを着込んだ姿は、知的でカッコイイお兄さん、と言える風貌だった。

「ね、ねえ、一穂……。多奈がどこに連れてかれたか分かる?」

声が震えていた。大変な失敗をしてしまった後の強烈な喪失感。胸が風穴が開いたように痛んだ。

どうしよう。どうしよう。どうしよう。その言葉だけが頭の中で連呼する。答えは出ぬまま、質問だけが反響する。

そんな有希の感情とは関係なく、視界は静かな夜の住宅街が広がっている。その静けさが、逆に更なる焦りを生み出す。

肺が心臓に圧迫されたような感覚が走り、何の異常もないのに咳き込んだ。吐き気すら感じる。

「……冷静になれ、遠野有希」

「なれるかっ！」

有希は思わず叫んでいた。一穂の冷静さが、返って有希を焦らせていた。

そんな様子の有希を見かねて、一穂は有希の肩を掴んで顔を近づける。

「……俺は多奈の行方を見かねない。館長に今から聞く。その間に……遠野有希。お前は家に帰って荷物を置いて、着替えて来い。その間に冷静になれ。……お前も俺も、今出来る事はそれだけだ」

視線が交差する。肩を掴む手は若干震え、痛いほどに力が込められていた。冷静を装っているだけなのだと、その事実を伝えている。

思わず、有希はその言葉に頷いていた。

有希は大急ぎで着替え、三里には多奈の家に遊びに行くと言えた。

夕暮れの商店街を逃げ切り、夜景の街でも逃げ切れたトレンチコートを縁起担ぎのように羽織り、玄関を開ける。

そこには一穂が大型で黒色のバイクに跨って待ち構えていた。駆動するエンジンからは重低音が発射されている。

月が綺麗な夜だった。凜とした空気に、思考がシャープになっていくのを感じる。焦りながら、思考だけが明瞭になっていく。

「一穂、冷静になれた？」

「……そっちは？」

「全然」

笑顔で答えた。

そのまま、促されるままにバイクの後部座席に乗り込む。

「あれ？ ヘルメットは？」

「二つとも破壊されていた」

短的な会話の連続に、『多奈を助けるかどうか』を問う質問は言葉として存在しなかった。その質問と回答は視線だけで交わされていた。

それは二人にとつて根本ともいえる意志であり、二人の信頼を繋ぐ紐だった。

エンジンが唸り、バイクは夜の住宅街に騒音を撒き散らしながら加速する。

振り落とされないよう、有希は一穂の体に掴まる。冷たい夜の風が二人の髪とコートをはためかせた。

「ねえ、一穂！ これからあたし達、どこいくんだっけ!？」

「宿河原センタービル。多奈はそこに連れてかれてる。新4号国道を南下し、二時間後には着くはずだ。その後、多奈を奪還する」

「あははっ。ドラマチックになってきたねー！ きつと、また何十人もの黒服さんが邪魔するんだろうね。……出来るかな？ あたし達二人だけで」

「無理だろう。……だが、援軍を待ってる暇も無い」

「そうだね。あたしもそう思う……」

交差点を左折した。時速八〇キロのスピードで周囲の景色が通り過ぎていく。

自分は少しだけおかしくなってしまっているのかもしれない。有希はどこまでも冷静な頭でそんなことを思っていた。

きっと無理なのだろう。自分は現代の魔女ではない。銃を持った男達を数分で殲滅する事なんて出来ないだろう。

恐らくは、どこかで負けて、捕まって……それだけの結末が待っているのだろう。

「馬鹿だなあ……あたし」

結局の所、それだけの理由なのだ。自分は逆境が好きで、自分の正義を貫かなくてはいられなくて、多奈が好きだった。

だから、助けに行く。一度で良いからヒーローになりたかった。常に胸を張って生きたかった。もう一度、多奈と一緒に星空を見上げたかった。

総じて言えば、馬鹿なのだ。遠野有希という、この偏屈な自分は。

思わず笑いがこぼれた。今はただ、冷たい風の感触が頬に心地よかった。

空を見上げれば、雲ひとつ無い夜空が広がっている。月が綺麗な夜だった。

2.

「は、速あーっ！ ちょよ、ちょっと一穂！ 速すぎるってば！ 死ぬ！ 死ぬうー！」

「このくらい普通だ！ 黙って掴まってろ！」

今日も車通りの少ない新4号国道。ヘルメット未着用のままで二人乗りしたバイクが時速一〇〇キロで南下していく。

風音とエンジンがごうごうと爆音を鳴らす。頭上では褐色のランプが高速で過ぎ去っていく。一般車の両の脇を次々に追い抜いて走っていく様は、一人ぼっちのカーチェイスの様相を見せていた。

僅かな地面の段差ですら車体は踊り、そのまま空中に投げられそうな恐怖感が連続する。有希は足を閉じる力を強め、一穂の腰に腕を巻く。皮製のコートの感触が頬に心地よかった。叩きつける強烈な風。髪の毛とコートが暴れだすように踊り狂っている。

「うひゃー！ うにゃー！ うひえうー！」

「うるさいぞ遠野有希！ 少し黙れ！」

物静かを超えて無口と思われていた伊勢崎兄妹の兄が大声で叫ぶ。

バイクはエンジンをフル回転して夜を走る。次々に乗用車を通り越す。二人の背中にフロントライトが眩しく照らされる。

「うわっ、うわっ！ 浮くっ！ か、一穂っ！ シートからお尻が離れたりしちゃったりなんですけど

「！」

「掴まり方が弱いからだ！ もっと体全体をくつつける感じに掴まって、体を固定しておけ！」

「ら、らじゃー！」

スピードと一穂の声に急かされるようにして、有希は一穂の背中に抱きつく。言われた通りに、体全体を押し付けるように。

——まるで恋人達の乗り方のように。

——まるで恋人達の乗り方のように。

——まるで恋人達の乗り方のように。

頭を振る。勝手にリピートし始めた自分の発想はやっと消える。

「……落ち着け、あたし」

状況は切迫していた。そんな思春期の乙女の胸のときめきを演出している暇も余裕は無かった。

それでも。既に有希の頬は真っ赤になっていた。鼓動が今までとは違う理由で激しく脈打つ。

これが遠野有希の、唯一にして最大の弱点だった。普段からは想像できない程に、こういう演出にひたすらに弱かった。意識し始めると、途端に抜け出せなくなる。

足の下三〇センチが時速一〇〇キロで移動していく。風がコートををはためかせ、褐色のランプが何度も頭上を通過していく。

有希の沈黙を一穂は落ち着いたのだと解釈し、運転に集中する。現実はその真逆だった。

「……ううう……」

有希は緊張を誤魔化すように唸る。今は乙女心を感じてる場合じゃないと心の中で叫ぶ。

しかしながら、頬にくっつくコートの感触が、抱きつく腕に感じる体温が、胸に伝わる一穂の呼吸の動きが、腹立たしいくらいに有希の冷静さを投げ飛ばしていく。

爆音の中、お互いに沈黙が流れる。

本当に自分は馬鹿だと、そんな事を思いながら。有希はさらに少しだけ腕に力をこめた。

しばらくして、バイクは強烈な減速を行う。

理由は単純で、目の前で赤信号が点滅していたからだだった。

停止線の前でバイクはきちんと停止し、有希は一時の安心を感じた。

エンジンは車体を小刻みに揺らした。

「何か間抜けだよなー。こんな時にも交通法規を遵守するってのも」

「赤信号突っ込んで、車に突撃される方が間抜けだろう」

左右の歩行者信号が赤に変わる。前方の赤信号は点灯を始める。

一穂は体を捻り、有希の方へ視線を向けた。

「……遠野有希。少々言いにくい事があるんだが」

「な、何？」

少し冷たさを感じるような一穂の瞳が有希を映す。ランプに照らされたショートレイヤーの黒髪が僅かに揺れる。

悔しいが、その姿は掛け値なしにかっこいいと思ってしまった。

気づけば有希は、先程までの頬の赤さを一瞬にして取り戻してしまっていた。

「……遠野有希」

「う、うん？」

鼓動が跳ね、信号が青に変わった。

一穂の視線が有希の胸に向けられる。まるで、捨てられた子猫でも見ているかのような、そんな哀れみの視線で。

「お前は毎日牛乳を飲んだ方がいい。多奈ですらもう少しは」

ぶん殴った。

「うるへー！ これはこれで需要があるんだよー！」

虚しい抗議が交差点に響き、バイクは再度加速を始める。

「遠野有希。人の価値は胸部で決まるものじゃないぞ」

「励ますなー！」

見上げた空には綺麗な月が浮かんでいる。何だか自分の悩みがちっぽけなものに思えてきて、もう一回だけ一穂をぶん殴った。

* * * * *

「ねえ一穂！ あたしと多奈でね、昨日の夜、この橋を飛んでたんだよ！」

新利根川橋は昨日と同じように、鉄骨で出来た水色のアーチをライトアップさせていた。

限界ギリギリの速度でバイクは走る。日本有数の河川の上を架ける橋は長く、体にぶつかる風に若干の水分を感じた。

爆風に鼓膜が慣れていく中、有希は大声で話す。

当の一穂は話など聞いてもいないかのように無反応だった。背中越しではその表情は見えない。

「おいっ！ 聞いているのかー!?!」

締め付けるように腕に力をこめる。毎日の牛乳が必要と診断された胸部が、一穂の背中中の体温を感じる。

「……遠野有希。後ろが見えるか？ 後ろに車両は何台見える？」

切羽詰った口調。有希は首が痛くなるくらいに後ろを振り返った。

「後ろには車はいないよー!!」

有希の言葉に対し、一穂は舌打ちしながらハンドルを悔しそうに叩いた。

「……してやられた!」

「え、何？ どうしたん？」

「前を見てみる」

一穂の背中前方の景色は全て隠されている。無理矢理に頭を動かすと、道の先、橋の終わりにフロントライトの明かりが五つ見えた。

目をこらせば、それは全てバイクのライトであり、まるで道を閉鎖するように並んでいる。「あれって……いわゆる、待ち伏せってやつー!」

有希は昨日の歩道橋の事を思い出していた。逃げ場のない所に追い込んで挟みこむ手法。

二人が橋に入った途端に封鎖したのだろう。長く巨大である橋には、二人以外の車両は存在しなかった。

「何故だ？ わざわざ俺達なんかをマークしてたのか……？」

「あ」

「……何だ、遠野有希」

「いやー。あたし、いつの間にか腕輪取られてたみたい。アレが無いと、サーチャーってのに位置がバレなんだっけ？」

あはは、と笑う有希に対し、一穂は片手で頭を抱えた。

「……報告が遅いぞ……」

「って、一穂！ 落ち込んでる場合じゃないよ！ どうするどうする!!」
スピードは落ちない。橋の終端は近づいていく。

「……どうせ後ろも封鎖されている！ まともにやりあっても勝てない！ このまま突っ込む！」
エンジン音が更に一段階大きくなる。体全体に加速を感じる。

「ああ神様！ アグレッシブな人生に感動します！」

ぶち当たる風にコートと髪の毛は激しく踊る。鉄骨を通り過ぎる度、視界にランプの光の筋が高速で走る。

迫るバリケード。有希は一穂に強く抱きつき、服を握り締めた。右手の感触に、有希は自分の力の存在を思い出す。

「……ねえ、一穂！ ワープって懂れない!? 胸に熱いものを感じない!？」

「はあ？ よく分からんが落ち着け！」

「あたし、滅茶苦茶に最高な名案を思いついたよ！ 上手くいったら盛大な拍手と賞賛の嵐をよろしく！」

「何をするんだ!？」

「このまま突っ込め！」

「変わってねえー！」

三桁のスピードでバリケードは迫る。ついにはライダーの服装まで分かるくらいの距離になった。衝突まで、あと数秒。

まさか突撃してくると思わなかった彼らは、バイクを置いて逃げる者、驚いて何も反応出来ない者の二種類に分けられた。

バイクとバイクの隙間にはハードルのような工事現場の看板が敷かれていた。バイク一台すら通りぬける隙間も無い。

衝突、三秒前。

「鳥よ！」

有希の右腕を走る緑の光。それを全力で広げ、二人を包むイメージを見る。

右手を前方に向け、光の『鳩』を射出する。放物線を描いた光は前方のバリケードを飛び越え、その先で拡散した。

衝突、一秒前。

「飛べっ！」

瞬間。二人は障害を越える。

3.

「一穂！ もっとスピード出ないの!? 追いつかれちゃうよ!?」

「これでもアクセルは開けっ放しだ！ 型落ちの中古品にしては良く働いてる！」

橋を越え、高架に入ると新4号国道はさらに交通量を減らした。前方に車両のランプは見えず、後方からは二人を追う五つの光点のみ。

二車線の道路に沿って、高さ四メートル以上の防風柵が張り巡らされている。外の景色はおろか、対

向車線の車すら全く見えない。まっすぐに伸びた道路を暖色の照明が等間隔に照らしていた。

速度は既に時速一三〇キロを超え、僅かなカーブや段差ですら振り落とされそうな慣性を生む。有希は一穂の体に抱きつく力をさらに強めた。

晩秋の夜風がコートを躍らせる。手袋をしていなかった手が凍える。エンジン音と風音が鼓膜を派手に揺らす。全てが高速で動く世界で、夜に浮かぶ月だけが静寂を保っていた。

「……うーん、やっぱりコレってまづいよなあ……」

有希の右手は抱きつきながらも握ったままだった。その指の中には、先程の跳躍によって溢れ出した血液が握られている。

「何か言ったか!?!」

「この窮地は美少女のあたしに対する試練だって言ったの!」

「現実逃避している暇なんて無いぞ! 第一、その台詞はもう少し牛乳を」
殴打。

「うるへー! とつとと運転しろー!」

体を曲げ、後方へ視線を送る。くだらないやり取りをしているうちにも、後ろの光点は少しずつ距離を詰めて来ている。

ばぁん!

後方で破裂音が響き、有希は空気を切り裂く弾丸の音を聴いた。

「あーもう! そっちがその気ならこっちだって容赦しないっ! 鳥よ!」

有希は右手を一台のバイクに向け、光の鳩を射出する。

「落とせ！ ……って、あ、あれ？」

バイクから運転者を引き摺り落とす為に発射した光の鳩は、相手に当たる寸前、弾ける様にして消えた。

「ちよ、ちよっと一穂！ 何か、あたしのミラクルスペシャル能力が効かないんだけど!?!」

「……大方、俺等から奪い取った腕輪でも使ってるんだろう。アレを付けてる限り、鳳仙花の力は一切効かない」

「えええー!?! 何その卑怯設定ー!?!」
「ばあん！」

破裂音。黒のバイクスーツに黒のヘルメットをかぶった五人は、既に十メートルの所まで近づいていた。

——逃げ切れない。でも、逃げなきゃならない。だから……。

血に濡れた右手を強く握る。ヌルヌルとした感触が非常に不快だったが、覚悟を決める事においては効果的だった。

——覚悟を決める、遠野有希。そして、やる時はとことん派手に、かっこよくやれ。

目を瞑る。息を思いっきり吸う。これから自分の始める事に対し、全力を尽くす事を誓う。

締め付けるくらいの勢いで抱きつく力を強める。もしかしたら、この感触は二度と味わえないかもしれないのだから。

「よおーっし！」

手を開き、右腕を勢い良く横薙ぎに振る。手の平から数滴の赤い雫が飛んだ。僅かに開いた一穂と有希の間に強烈な風が吹き込み、トレンチコートが巻き上がる。

思わず頬が緩む。大きな瞳が興奮で輝いていた。

「……どうした、遠野有希？」

不思議そうな一穂が愉快で仕方が無かった。テンションだけが勝手に上昇していく。

「あのさー！ このコートってー！ 高かったりするー!？」

風音とエンジンがごうごうと爆音を鳴らす。頭上では褐色の照明が高速で過ぎ去っていく。

後ろに光点が五つ見えるのを確認しながら、有希は風音に負けないように大きな声で質問する。

声は爆音で消されてしまったが、一穂は『安い』と言ったと有希は思った。

「これからー！ このコートねー！ あたしの血まみれになっちゃうけどー！ 笑って許してねー！」

一穂の質問が飛ぶ前に。

両手で押し込むように、一穂の背中を思いつき叩く。生まれた斥力が、有希を後方に突き飛ばす。

「有希っ!？」

一穂の叫びが届く前に。有希はバイクの後部座席から自ら飛び降りていた。

——昨日の夜、空を飛びまわって培った、このあたしの空中感覚を見よ！

そう言いたかった。

空中で回転し、足を突き出す。そのまま、後方に控えていたバイクの運転手に強烈なドロップキックを打ち込む！

予定だった。

「によへえええー！」

現実是有希に対して厳しかった。回転しようとして捻った体はあらぬ方向への遠心力を生み、思わず出た声は果てしなく格好悪かった。

ドロップキックどころではなく、有希の体は空中で横ばいになる。

一メートルちよつとを落下するまでの僅かな時間。ゆつくりとした相対速度で、後方を高速で走るライダーへと有希の体が出っ込んでいく。

ライダーは腕で思わず顔を覆っていた。ヘルメットに隠れて表情は見えないが、その中ではこんな事を思っていたのかもしれない。

何だこいつは、と。

「ごふえふ！」

そのヘルメットに目がけて、有希の脇腹が激突する。その姿は何とも言えないほどに間抜けだったと有希は確信した。

相対速度と全体重を掛け合わせた運動エネルギーがライダーを座席から吹き飛ばす。同時に、有希もそのまま吹き飛ばぶ。脇腹に激痛が走る。

落下していく。九〇度傾いた視界。その左側ではコンクリートの地面が高速で移動していた。一秒も

無い瞬間が鉛のように伸ばされていく。

バイクが横転するのを見る。夜に光るランプが綺麗だった。地面が迫る。自分を殺せる衝撃と摩擦力が目の前まで迫る。

右腕を突き出す。その先には驚いた顔でこちらを見つめる一穂。

——鳥よっ！

時間がスローモーションで流れていく。コートの肩が地面に擦れて音を立てた。

一穂の背中感触を思い出す。あの場所に戻る。それだけを強く祈って光の鳩を飛ばす。

「運べえええーっ！」

キイーン……。耳にノイズ音が響く。

瞬間。視界は一面の黒に切り替わり、それが一穂のコートだと気づくのに一秒を消費した。振り落とされないように大急ぎでしがみつく。

「な、何やってんだ!？」

「あ、あははは……。し、失敗しちゃったい……。つた、いたたたたー!」

驚きと興奮と痛みが一気に溢れ返る。踊り狂う鼓動。激痛に呼吸が乱される。

後ろを振り向けば、横ばいに倒れた一台のバイクが高速で遠ざかっていった。

「はあっ……はあっ……。あ、あははは……。い、一機撃破ーっ!」

ガッツポーズも出来ないで、溢れ出す興奮を抱きつく力に変換する。そうでもしないと収まらないし、それでも収まりきれていない。

達成感なのか爽快感なのか分からない、ただただ跳ね回りたくなるような感情だけが有希の中で暴れ回っていた。

「な……なっ……。……遠野有希！ 失敗したらどうなるのか分かったのか!？」

「一穂、覚悟するのは無茶するためにする物なんだよ！」

言葉を失う一穂。そのコートに有希の血が滲んでいく。傷口のない右手から血液が滲み出ていく。流れ、失っていく血液の感触。思わず意識が暗転しそうになるが、気合を振り絞って耐え抜く。

——大丈夫。まだ全然大丈夫。

自分に言い聞かせる。人間はどのくらい血液を失うと死ぬのか……そんな発想を頭から追い出した。ばあん！

すぐそばから破裂音。右に一車線離れて並走するライダーは、左手に持った拳銃の銃口を二人に向けていた。

ばあん！ があん！

二発目はバイクの車体に直撃する。僅か数グラムであるはずのゴム弾が数百キロのバイクを揺らした。「……遠野有希、顔を伏せていろ！ 当たっても死ぬ事は無い！」

「一穂！ そーいや拳銃持ってたよね！ ちょっと借りる！」

抗議の前に有希は一穂の胸ポケットを強引にまさぐり、拳銃を取り出し出していた。

右手にずっしりと重い拳銃。グリップが血で滑る。それでも横撃ちに構え、銃口を相手に向けた。「自称、下町の銃撃小町をなめるなあっ！」

ばあん！

『命中率なんて気にしない。スタイルが命』を合言葉に、鍛えに鍛えたガンアクションゲームでは抜群の自信があったが、実際の銃では容赦なく明後日の方向へ飛んでいった。

更には発射時の反動が腕を走る。グリップが血で滑る。

「自称が無理するな！」

「うっさーい！」

ばあん！ ばあん！ ばあん！ ばあん！

連射するも、弾丸は対象に当たることなく飛んでいく。更には頭皮を伝って流れた血液が右目を濡らし、大急ぎで拭う。

「……ったく！ こう狙うんだ！」

一穂は銃を握った有希の手を握った。強引な力で、銃口が無駄の無い動きで相手を捕らえる。

「え、あ……」

見かけによらず逞しい手の感触。思わず頬を赤くした有希にとって、トリガーを引けたのは僥倖だった。

ばあん！ がんばっ！

放った弾丸はバイクのハンドルに直撃。強制的に右ハンドルを切らされたバイクは防風柵へと突っ込んでいった。

「す、すげえー！ かつこいいー！」

「……。すまない。流石にアレはまぐれだ」

「……」

頂点まで盛り上がったテンションがそのままマイナス値になるような感覚に襲われたが、一穂にツツコミを入れる暇も無く状況は高速で流れていく。

ばぁん！

破裂音が背中越しに聞こえ、少しの間離れた緊張を取り戻す。一穂の手は離れ、ハンドルへと戻った。

延々と真っ直ぐに続く道路には相変わらず車両の陰も無い。時速一〇〇キロを超えた中での戦闘が続いていく。

顔に当たる冷たい風が、流れ出た血液を急速に固まらせていく。

「と、とにかく、あと三機！ ちやきちやきぶつ倒すよ！」

「倒すのが目的じゃないんだが……」

背中にフロントライトを感じる。有希は後ろ向きに銃撃を放つものの、相変わらず当たる事は無かった。

月夜の下に四つのエンジン音が響く。差は開くことなく、相手の数は減らしても、追い立てられる構図だけが崩れない。

「くううっ！ 弾切れたー！」

「……無駄撃ちしすぎだ」

有希は背中越しの溜息を感じる。武器の代わりになる物を探し、高速で過ぎ去っていく褐色の道路照

明を見つめた。

「ここで遠野有希、必殺奥義ー！」

有希は右手を伸ばし、道路脇へと向けた。

高速で過ぎ去っていく道路照明の一つに向け、光の鳩を射出する。

「鳥よ……攫え！」

瞬間。ぶつつ、という電気の切れた音と共に、一本の道路照明は支柱の中間をくりぬかれていた。

ガシャン！

派手な金属音を立てて、道路照明は道路を横切るようにして倒れる。

一台のバイクがそのまま突っ込んでいき、派手に飛び上がった後に火花を散らしながら横転した。

「……派手な事を……」

「えへへ。初戦にしてはなかなか冴えた発想だろー？」

「道路工事のおじさんが泣くぞ」

これではばらく足止め出来たかと思っただけのもの、追いつかれるのに一分もかからなかった。

爆風を浴びてはためく有希のトレンチコートに、フロントライトの光が照らされる。

二人にまで減らされたライダー達は、左右から挟み込むという手法を取った。

左のライダーは銃の代わりに一メートルほどの鉄の棒を手にし、徐々に近づいて来る。

ばあん！

右のライダーからの銃撃。弾丸は有希の後ろを通過し、高い防風柵に当たって衝撃音を生む。

遠くからでは当たらないと踏んだのか、近づき、再度銃口を向ける。その射線は一穂に向けられている。

「一穂、危なっ！」

当たってしまった。そう思った瞬間に有希は右肩を押し出し、一穂の体を覆うように抱きついていった。ばぁん！

「あ……っ！ くううう……っ！」

激痛。有希の右肩に直撃した弾丸は、大男に殴られたのかと思うくらいのもので、予想を遥かに超えた衝撃。思わず呻く。

「有希っ!？」

「騒ぐなっ！ ……あーもう！ 勝手に体が動いちゃったんだからしょうがないだろー!？」

銃撃された部分がずきずきと痛む。思わず涙が出た。

ばぁん！

右からは先程の成功を励みにしたかのように銃撃が飛んでくる。

「黙ってる！」

一穂は素早くコートのポケットからもう一丁の銃を取り出し、その銃口を相手へと向ける。ばぁん！

一穂の銃撃はライダーのヘルメットの側頭部に直撃し、座席から落下させた。

乗り手を失ったバイクはそのまましばらく走行を続け、火花を散らしながら横転する。

「あと一機！」

二人の声が同時に響く。

その間にも、最後の二機は着実に二人との間を詰め、右手に携えた鋼鉄の棒を振りかぶっていた。振り下ろす先は、有希の頭部。

「あ……」

有希はただ見つめるだけしか出来なかった。

——間に合わない！

腕は一穂にしがみ付く為に使われている。振り下ろされる凶器。接近する鉄が有希を、

ばあん！

一穂の銃撃。破裂音と共に、ライダーの振り下ろす腕が再度振り上がる。肩に直撃したのか、右肩から大きくのけぞっていた。

「……この距離ならば外れない」

ばあん！ ばあん！

左腕に、右足に。二発の銃弾がライダーに直撃する。それでもバランスを崩さなかったのは奇跡だった。

鉄の棒を持ったライダーは距離を離していく。

「逃がすかつ！ 鳥よ！」

痛む右肩を堪え、その手をライダーの持つ棒へと向ける。



「奪え！」

瞬間、右手にずっしりと重い感触。血で滑り落ちそうな所を左手で握って支える。

「……あ、武器は奪えるんだ。そっかそっか。そんなじゃあ……！」

両手を鉄の棒で塞がれ、バランスを失う。そのまま一穂の背中を強く押し、バイクから飛び降りた。

「鳥よ……」

「有希っ!? お前また……!?」

空中に放り出され、一瞬にして距離が離れる。瞬間の開放感を感じつつ、視線をライダーへと向ける。意識の中で光の鳩が飛んでいく。

「運べ！」

次の瞬間、有希の視界はライダーの背中を見下ろす景色に変わる。思いつき鉄の棒を振りかぶった。振り向いたライダーのヘルメットに有希の姿が映る。

有希は背中に大きな月を背負い、コートを大きく広げていた。照明を反射して褐色に輝く鉄。襲い掛かるその姿は、自分とは思えないくらいに格好良かった。

「てやああああああっっ！」

一閃。

派手な衝撃音が雲のない月夜の下に響き、バイクチェイスの終わりを告げていた。

4.

赤信号だった。停止線の上で、エンジンが小刻みな振動を生む。

有希は無言のまま、もたれるようにして一穂にしがみついている。

頭が重く感じる。動悸が激しかった。文字通りの貧血の症状を起こしていた。

「……多奈から、どういう能力なのかは聞いていた」

一穂は有希の右手を握る。滴るくらいに血液で濡れた手を。

夜風で冷えた手に、暖かい体温が心地よかった。

「……すまない。妹の為にこんな無茶をさせてしまつて」

——あたしは、あたしの為にこうしているんだけど……。

反論は頭痛に消される。血液に濡れたトレーナーが背中に張り付いた。

——あたしは、ただ自分の正義を貫きたいだけで……。

考えた言葉は勝手に消えていく。今はただ、右手の暖かい感触が心地よかった。

しばらくの間、お互いに沈黙が続く。今はただ、落ち着いた静寂が心地よかった。

青信号になった。右手は離れ、バイクは加速を始める。

振り落とされないように、有希は強く一穂にしがみ付く。

その日は月が綺麗だった。冷たい風が心地よかった。
いつまでも続くような十一月の月夜の下。

非現実的なカーチェイスを終えた有希にとって、背中越しに伝わる体温だけが、現実的だった。



遠野有希による我儘で身勝手な戦争

Escape 5.

1.

「らららく♪ お前は黙ってコレを食え♪ 四の五の言わずに食って寝れ♪ 栄養抜群♪ 糖分全開♪ 死なない体に一日一本、ぼくらすすすういぐんぐ♪」

顔の血痕はハンカチで拭い、血まみれのトレーナーはトレンチコートで隠す。

そんな手間暇をかけて夜のコンビニでバランス栄養食を買った有希は、月夜の下、二十四時間光り続ける照明に照らされながら歌声を響かせた。

「……何だ、その奇天烈な歌は？」

「あれ、一穂は知らない？ これこれ。これのCMソング。はっちゃけた感じが個人的にグツと来るね！」

一穂に手渡したのはバランス栄養食の包装紙。中身は既に有希の胃の中に投下されている。

『バランススウィング』と力強い文字で英語表記された赤色の包装紙の裏には、異様な長さの成分表が書かれていた。

「……まあ、鉄分とかタンパク質が摂取出来れば問題ないが」

「そんな速攻で血が出来るとは思わないけどねー」

一穂はバイクに寄りかかりながら肉まんを頬張る。

時間は二十二時を超えており、周囲は夜の静寂が広がっていた。何も食べてない二人は空腹に負けて、

今こうして簡単すぎる食事を取っている。

これから親友を悪者から救出しに行くヒーローとしては、最悪に地味な光景だった。

「んー、最後の晩餐がコレっても何だかなあって感じ」

「最後の晩餐と決まったわけじゃないだろう……」

一穂は有希の背中越しの景色を仰ぎ見た。有希もつられて後ろを振り向く。

宿河原センタービル。約二百メートルの巨大なビルが威圧的に二人を見下ろしていた。

四十階建ての二本のビルが並ぶように聳え立ち、その中間を渡り廊下が繋いでいる。

ガラス張りのエレベーターが上下している。月夜を背にし、アルファベットのHのようなシルエットは煌々と光を灯していた。

正面広場には等間隔にケヤキの木が植えられ、地面に埋め込まれた照明の光で照らされている。

その先には噴水があり、そろそろ深夜に近いというのに、溢れ出す水が煌びやかなライトに照らされて輝いていた。

「多奈はあれの何階にいるんだっけ？」

「三十六階から四十階のどこかだ。どっちの建物かは知らん」

再度、ビルを見つめる。これから自分が戦争を挑みこむ、戦場を見つめる。

「……」

包装紙をゆっくりと握り潰す。

やたら甘くて腹にたまるバランス栄養食品の製造元の欄には小さく、株式会社フロントグリップの文

字がプリントされていた。

しばらくして、合図も無しに二人は歩き出す。静寂の夜に足音が響いていた。

冷たい夜風が葉の落ちきったケヤキの枝を揺らす。地面に設置された周囲の照明が二人の影を多方向へ伸ばしていく。

ゆっくりと息を吸い込む。夜の冷気が心地よかった。瞳をしつかりと開け、胸を張って歩く。

血を拭い取った右手には汗が滲んでいた。

高揚感だけが先走る。恐怖と好奇心と闘志と焦燥が複雑に混ざり合い、鼓動だけが高鳴っていく。

雲のない月夜の下。静寂の空気に二人の足音が響いていた。

遠野有希による、我儘で身勝手な戦争が始まる。

2.

「……………ん……………」

ぼんやりとした意識の中で、多奈は先程まで見ていた夢を反芻していた。

有希と同じ学校の制服を着て、椅子に座って授業を受けて、短い休み時間に談笑する。そんな夢。

自分の制服姿が驚くくらいに似合っていないかった。もしも自分が普通の女の子として生まれていたらば、もう少し似合っていたのだろうか？

胸が、少しだけ軋んだ。

「おはよう、蒼腕の魔女」

「……っ!？」

知らない声に起こされ、多奈は冷水を叩きつけられた気分で目を開けた。

薄暗い、小さめのパーティ会場のような部屋。

天井に設置された白熱灯からは褐色の弱々しい光がスポットライトのように落とされ、ガラス張りの先には月の浮かぶ夜空と綺麗な夜景が広がっていた。

床には柔らかいカーペットが敷き詰められ、幾何学的な文様が刻まれている。

そして、目の前で屈み込むスーツの男。その手が多奈の頬に触れていた。

「美人に育ったもんだ。あれから六年も経てばこうなるか……」

「……辻堂敦……!」

彫りの深い顔つき。整った黒髪。すらっとした体軀にノーネクタイのダークスーツを着込んだ姿は六十台の男には見えなかった。

低く通る声。口元に笑顔絶やさない様は正にナイスミドルと言えたが、その瞳は表情とは裏腹に冷たい印象を与える。

株式会社フロントグリップの社長であり、六年前の多奈に鳳仙花の種房を埋め込んだ人物が笑顔を浮

かべていた。

「その通り。沢目は元気してるか？」

「……っ！」

返答する事も無く、多奈は辻堂の手を振り払い、素早く立ち上がった。

その一瞬、辻堂と目が合う。緑色に輝いた瞳を多奈は見た。景色が、空間が、絞られるように歪んだ。

「……蹲え」

多奈を襲ったのは、脳をドリルで直接削られるような頭痛だった。

「あ……あああああああ……」

頭を抱え、のた打ち回る。痛覚神経を直接千切られるような痛みに、多奈の理性は一瞬で吹き飛んだ。

何も考えられない。目は見開き、顎はガクガクと震え、手足の全てが痙攣した。

「いやあああああ……っ！ やめて！ やめてえええっ！」

「……久しぶりなんだから、落ち着いて話したいんだがね」

途端、多奈を襲う頭痛が消える。

「……はあっ、はあっ……」

それは時間にして数秒だったが、多奈の全身には汗が滲んでいた。口元の唾液を拭う。涙が一筋、頬を流れた。

痙攣する手足で座り直す。目を離すべきでは無いと理解していたが、先程の狂気に対する恐怖で顔を上げる事が出来ない。

がちやつ。

鍵の開く音。薄い闇に沈むカーペットに光の線が描かれた。足音が続く。

「パパ。連れて来たわよ」

「ご苦労様、都。今日は色々と手伝わせて済まないね」

ブレザーの制服、セミロングの髪と眼鏡。お嬢様のような風格を持った辻堂都の後ろに、白衣を着込んだ痩せぎすな男が続いて歩く。

「別に。……あ、起きてるのね、蒼腕の……魔女だっけ？ 変な名前」

「ネーミングは私なんだが……悪くないセンスだと思ってるんだがね。まあ、六年ぶりの邂逅だ。感慨深くてね。都、あの時沢目が首を縦に振ってくれば、この子は養子としてお前の妹になる予定だったんだ」

「へえ……」

辻堂都は多奈を見つめる。その視線に関心は込められていなかった。

「……さて、蒼腕の魔女」

俯いたままの多奈の髪を辻堂都の右手が触れる。多奈の体がびくつと緊張に震える。

「君の右腕に埋め込まれた、鳳仙花の種房を返して貰うよ。そもそも、それは我々の物なのだしね」

「……どうやって？」

「そこにいる白衣の男は君に種房を埋め込んだ能力者だ。まあ、君の友人と同じ能力者と考えて貰っていい」

「……別にいいわよ」

目を逸らしながら眼鏡の位置を直し、辻堂都が部屋を退出する。

「……可愛い娘だろう？ 少々尖がってる所はあるが……自慢の娘だよ」

多奈に向けられたその言葉は、娘を思う父親そのものだった。

「……何故、私の右腕の鳳仙花を欲しがるのですか？」

発声し、震えている事を多奈は改めて理解した。あの狂気に対して本能が怯え竦んでいた。それでも、言葉を紡ぐ。

「こんな能力があつたって、別にいい事なんてありません。家族には迷惑をかけ、友達ですら失います。私はただ、普通の人生を進みたかった……」

「そう。鳳仙花が無ければ、今頃は女子高生として青春を謳歌出来ていたのだろうね？」

「……っ！」

多奈はその言葉に、ただ唇を噛むだけの反応しか出来なかつた。辻堂は大袈裟に肩をすくめ、溜息をつく。

「……沢目らしい、何とも保守的な考え方だ。まあ、分からんでもない。十年前までは私もそうだった。卑怯な力だと思っていたよ。ただ……」

辻堂はガラス張りの窓へと歩く。その先には青白く輝く月が浮かんでいた。

「蒼腕の魔女。私はあえて、君の生き方を否定する。……君は何の為に生きている？ 普通に学校へ行き、普通に就職し、普通に家庭を営み、ゆっくりと幸せに死んでいくのは素晴らしいと思う。だが、

私はそれに満足出来ない。辻堂敦という個性が集団に没していくのに満足出来ない。私の人生テーマは挑戦だ。目の前には世界という、とんでもなく強烈な濁流がある。数億の人間が作り出す濁流の中、自分ほだけだけの影響力を及ぼせるのか。それを挑みたい。世界に対する自己主張だ。子供の虚栄心と蔑むのもいい。だが、折角生まれたこの命だ、歴史書に名前が載る位の事をしてみたいんだ。……そう、歴史を動かしたい。どう動くのかは問題ではなく、ただ動かしたいのだよ。私の手でね」

演説は更に熱を帯びていく。

「その一つの手段が起業だった。異常ともいえる激務の中、私は一時の満足感を味わっていたよ。年々伸びていく業績。無二の親友であり、優秀すぎる相棒。私に心酔し、どこまでも着いてきてくれる社員達。家に帰れば貞淑で美しい妻と娘が待っている。それは人として紛れも無い幸福だったのだろう。……ただ、それでも間に合わなかった。動かしたのは金と株価と一部の流通だけだった。だから、私は沢目と誓った禁忌を破った。相手を屈服させる為の力を行使した。状況が一気に加速した途端、歯止めは効かなかった。私の欲求の為に数千、数万人は泣かせたのだろうね。取引先では原因不明の自殺者が数名出たそうだ」

歪んだエゴだ。多奈はそう思った。

「しかしながら世界というのは本当に大きいもので、それでも間に合わない。凡人一人が故の限界だ。だから、仲間が欲しかった。鳳仙花を宿し、特異の力を持つ者が必要だった。最初は、沢目と同じ鳳仙花探知能力者を手に入れる事で確保しようと思っていたが、既に沢目によってあらかた引つ張られていたよ。次の案として、蒼腕の魔女。君の右腕が選ばれたと言う訳だ」

「……何故、そんな事を私に教えるのですか？」

「君が私に従ってくれるのがベストなのでね。半分は説得。残り半分は……私には演説癖があつてね。こうして語るのが堪らなく楽しいのだよ」

辻堂敦は自信に満ちた満面の笑顔を浮かべる。多奈はその表情を睨み付けた。

「私は、従いませぬ。力づくで従わせるなら、その前に死を選びます」

「まるで侍だな、蒼腕の魔女。そう言うだろうと思つたから、君の種房を奪うのだよ。……調査研究の見地からは、私が鳳仙花の種房を制御しきれた場合がベストなんだが、制御し切れなくとも構わないと思つている。種房は破裂し、鳳仙花は飛び散る。数千万の種の詰まった種房だ。かなり広範囲の人間に鳳仙花を埋め込む事になるだろう。数千万に根付いた内、その数百、数千は開花するだろう。超能力者が溢れだす時代になるのだよ。……どうだい、蒼腕の魔女？ 歴史が動きそうな予感がしないかい？」

「……貴方は狂っています。ただの……愉快犯です」

多奈は思わず俯いていた。月を背に、辻堂敦は口元を吊り上げて笑う。

「私は死に際のベッドで妻と娘の手を握り、楽しい人生だった、と言いたただけだよ、蒼腕の魔女。何とも小さな夢だろう？」

3.

宿河原センタービル十六階。イーストタワーとウェストタワーを繋ぐ渡り廊下には、静寂と夜の冷気が漂っていた。

外から見れば、ビルとビルの間には浮いているようにすら見える程の細い通路。歩く度に床が僅かにしなるのを感じた。

「ねえ一穂！ 外がすごい綺麗だよ！」

左右はガラスが張り巡らされ、有希の指差した先には一面の夜景が広がっていた。

マンションの明かり。ビル正面広場で照明に輝くケヤキの木々。駅のホームに並ぶ人々。そのホームへと走る電車。

その先には大きな川が流れ、光の点描の世界に一筋の黒を描いていた。

渡り廊下に設置された蛍光灯からの光は弱く、若干薄暗い。その事が逆に、視界一杯に広がる夜景を際立たせていた。

有希は右手をガラスにくつつけて、顔をぶつかる寸前まで近づけて夜景を見つめる。

綺麗に磨かれたガラスは外の夜風が吹き込んできそうな程に、その存在感を確実に消していた。

「……そんなのを見てる暇は無いと思うが……」

ショーケースのおもちやを見つめる子供のような有希に、一穂は疲労をたっぷりと含んだ溜息を吐い

た。

「はふうう……」

うっとりとした溜息を吐きながら、有希は多奈と一緒に飛んだ夜の事を思い出す。このガラスの先の空間を飛べたら、どんなに綺麗な景色が見えるか……。

「……遠野有希、行くぞ」

一穂は有希の右手を掴み、引つ張る。

「あっ!? あ、えと、うん! わ、分かっているって!」

「……? 顔が赤いぞ?」

「う、うるへー! いきなり手を握るなー!」

有希は手を引かれながら走る。二人は軽やかな足音が、三十メートルほどの渡り廊下に響いた。

ガラス窓の先にはウエストタワーの外壁が見える。未だに明かりのついた窓の中にはパソコンに向かう社員の姿がちらほらと見えた。

このタワーのどこかに多奈は囚われている。夕暮れ時の別れを思い出して、胸に悔しさが滲んだ。

——待っててね、多奈。もうすぐ、あたしと一穂が華麗に助けに行くからね……。

たんっ、たんっ、たんっ。

ブーツを鳴らし、コートをはためかせて走る事、数十歩。

先を走っていた一穂が突然止まり、勢いを殺しきれなかった有希がその背中に突撃した。視界が黒コト色に染まる。鼻が痛かった。

「うわっ！ い、いきなり止まるなよ一穂！
ばあん！」

聞きなれた破裂音。狙いが外れた弾丸が天井にぶち当たり、鈍い音を立てる。

渡り廊下の先には黒いスーツを着込んだ男達が八人立ち塞がっていた。それぞれの手には拳銃が握られ、有希と一穂を確実にロックしている。

「……逃げるぞ！」

振り返り、一穂が有希の右手を引っ張って振り返る。

しかしながら、絶妙のタイミングでもう一方の道もスーツの男達によって封鎖された。完全に逃げ道を封鎖され、一穂の足が止まる。

後ずさる。自然な流れで、有希と一穂は背中をくっつけるようにして敵と相對していた。

「……何ていうかさ、追い詰め方がワンパターンだと思わない？ 逃げ場の無い所におびき寄せらるって手法ばっかだよな」

「毎回引っかかっているヤツが言う台詞か……」

じりじりと包囲網が縮んでいく。見えない空気の圧力を感じる。

前に八、後ろに八。十六の銃口がゆっくりと近づく。有希は思わず喉を鳴らした。心臓が高鳴っている。

「何ていうかも、問答無用な位に……大ピンチだね」

「こうなる覚悟はしているだろう？ 最初っから負け戦だ」

「そうだね。……よしっ！ 史上最強のジタバタっぷりを見せ付けてやるっ！」

一穂は左手に胸ポケットから取り出した玩具のような拳銃を、右手にコートの裾から取り出した鋼色の肉厚な銃をそれぞれ握り締め、その銃口を敵に向けた。

有希は目を瞑り、左右に広がる夜空を思い浮かべる。吹き付ける夜風のイメージが思考をシャープにしている。

「……鳥よ、鳥よ、鳥よ……！」

呟きより小さい声で言葉を紡ぐ度、光の鳩の数が増えていく。緑色に輝く十六羽が有希の周囲を羽ばたくイメージを見る。

一定の距離を取り、包囲網の縮小が止まる。耳が痛くなるほどの静寂と、破裂しそうな緊張感が周囲の空気を包んでいく。

「お久しぶりですね、蒼腕の魔女の付属品娘様。初めまして、魔女のお兄様」

「出たな白衣フェチ！」

相変わらずの白衣を着込んだ二宮一刀が一步進み出る。相変わらずの茶髪とねっとりとした口調。人差し指は眼鏡のブリッジに添えられていた。

完璧な王手を指したかのように優越感に浸る表情。その額には、多奈の盾が直撃した事による一筋のアザが浮かんでいる。

「特にお兄様は、昨日は大変ご無礼を致しました」

「ねえ一穂。そーいや一穂って昨日、この変態にやられちゃったんだっけ？」

有希は右手は突き出したまま、背中越しの一穂に話しかける。一穂は両手の銃を握り締めながら悔しげに答えた。

「……所詮、俺は素人なんだ。奴のような本当の訓練を受けた人間には勝てない」

「多奈は一瞬でぶっ倒してたよ。頑張ってリベンジしようね、お兄ちゃん」

「……出来ればそうしたいものだな」

いつの間にか話から外されてしまったのが不満だったのかもしれない。二宮は胸ポケットから銃を取り出した。

華奢な体からは考えられない程に、その構えは様になっている。

「本日の業務は終了致しました。申し訳ありませんが、本日はお帰り願いますか？」

視線は冷たく、鋭い。しかし多奈は昨日、この視線に打ち勝っていたのだという事を思い出す。

有希はその視線を真っ向から睨みつける。右手が相手の銃口に重なる。

「……悪いけど、多奈を返して貰うまでは帰れない。……正直言って、足が震えるぐらい怖いんだけどね。でも、ここで退いたら、あたしの信念が崩れちゃうわけ。あたしは、自分の信念、性格が大好きだから、それを簡単にぐんにより曲げるわけにもいかないわけだよ」

起立状態での和平交渉はすぐさま決裂し、周囲に一時の静寂が流れた。

既に緊張感の限界までに膨らみ、破裂する瞬間を待ちあぐねていた。

息を深く吸い込む。

「……一穂。物凄く過酷な事をやり遂げるためのコツを教えてあげようか？」

お互い、視線は前方の敵を捕らえている。

「正義っていう銃を持って、覚悟っていう火薬を詰めて、決意っていうトリガーを引くの。そうするとね、行動っていう弾丸は勝手に真っ直ぐ飛ぶんだよ」

必要なのはその三点だけなのだ。

自分は自分の正義に純粹であると信じ、どんな痛みにも耐え抜くための覚悟をし、一歩足を踏み出すための決意をする。行動は勝手に後から付いてくる。

もう一度、息を大きく吸い込む。右手を上突き出し、ありったけの声で叫んだ。

「鳥達よ！ 踊れえええーっ！」

ミサイルのように、右腕から連続して十六羽の鳩が発射される。空中に輝きの軌跡が何本も描かれた。一秒にも満たない瞬間。男達の持っていた十六丁の拳銃は全て有希の目の前に移動し、落下していく。男達に驚愕の表情が浮かぶ。

ごっつ。最後の一丁が有希の足元に落ちた瞬間。

側頭部から血が噴き出した。勢い良く飛んだ血液の飛沫が窓ガラスに赤い斑点を描く。

こめかみ、背中、胸。至る所から血が滲み出ていくのを感じる。白いトレーナーが赤く染まっていく。太ももを流れる血液がブーツの中に入り込み、最悪に気持ちが悪かった。

スーツの男達が有希の異常な状態に困惑した声を上げた。突然血まみれになった自分は、きつとホラ

ー映画にだってノーメイクで出れるだろうと、そんな事を思う。一切、痛みも傷もない出血。有希は真っ赤に染まった右手を握る。

滴る赤の雫が拳銃に当たつて撥ねた。

「……覚悟つて、こういうことだよ、一穂……」

まるで有希以外の存在の時間が止まってしまったかのように、有希だけがゆっくりと動く。

平衡感覚が無い。頭を鈍器で殴られてるように痛む。体中が酸素を欲し、呼吸が勝手に速くなる。

奪い取つた拳銃の一つを掴み、血に濡れた両手で構えた。トリガーから血の雫が落ちていく。

「はあ……。はあ……。出来れば皆、逃げて欲しいな……。あたし、これでも普通の女子高生でさ、物凄く躊躇うんだよ、銃口を人に向けるのつて。撃ちたくないし、撃たれたくないし……。でも……。それでも、あたしは多奈を助けたくて、皆がそれを邪魔したいのなら……。あたしは……。あたしの意志で引き金を引く。躊躇うけど、嫌な気分だけど……。それでも、あたしはあたしの決めた事を曲げない。曲げたくない。だから……」

——自分の正義を貫く事。人生に妥協しない事。常に胸を張って歩く事。

揺るがない、揺るがせない信念を心の中で呟いて、大きく息を吸つた。

「……あたしは突破する！ あたしはあたしの全力をもって、あたしの望む方向へと進む！」

発砲音が月夜の下に響いて、戦争が始まった。



床を蹴る音。向かってきた男達に、有希は震える手でトリガーを引いた。強烈な罪悪感が走るも、銃撃を躊躇ったのは五発目までだった。

「はあっ……!! はあっ……!! はあっ……!! はあっ……!!」

床にはスーツの男が二人倒れている。武器を奪われ、丸腰で有希に向かってきた勇氣ある者たちの悲しい結末が倒れていた。

その状況に男達は突撃を躊躇し、顔を見合わせた。

有希は無傷で血まみれの両手で銃口を向ける。トリガーは血で滑り、震える腕では相手を正確にロックする事が出来ない。

ターゲットまでの距離は五メートル程。この距離でも、絶対に当たる事はないだろうと有希は確信していた。

「はあっ……。 はあっ……」

まるで酸素の薄い高地にいる気分。荒い呼吸が止まらなかった。体中で血液が不足し、酸素が行き渡らない。

「ばぁん！」

背中越しでは一穂の戦闘が行われている。破裂音と悲鳴。足音。人の倒れる音。腕を伸ばせば届くような距離の戦闘が、別世界のように遠くに感じた。

「相手は戦闘経験もない女子高生だ！ 何を躊躇う!?!」

二宮が叫び、黒スーツの男達に統率の空気が生まれる。

全員の武器を奪われる事など想定もしていなかったのか、どこかヤケクソな雰囲気纏いながら、三人の男が有希に向かって突撃を開始する。

有希はその男達へ向けてトリガーを引く。例え殺傷能力の低いゴム弾でも、腕に伝わる衝撃は本物のようだった。

一発撃つ度に両手がホップする。手の中から抜け出そうと暴れる拳銃を必死に握り締めた。

銃弾は一人の肩に直撃し、衝撃が敵を仰向けに吹き飛ばす。

残りの二人の足は止まらない。その内の一人が、レスリングのように足を狙ったタックルを仕掛ける。

「……鳥よっ！」

接触の瞬間。有希は意識の中で鳩を飛ばす。

ノイズのような高音が耳に響いた瞬間、移動した有希は彼らの右側でしゃがみ、銃口をその脇腹へと向けている。

容赦なく引き金を三度引く。男の着ていたスーツが派手に凹み、衝撃がその体を薙ぎ倒した。

「はあっ……!! はあっ……!!」

今度の出血は首からだだった。元々白かったトレーナーは既に赤の分布が大半を占めていた。ミニスカートから伸びる足に血液の筋が描かれる。

気を抜けば意識が飛んでしまいそうな失血の中、思考だけが加速していく。有希に流れる時間が鉛のように伸ばされていく。

突撃してきた男の一人が、床に落ちていた拳銃を拾い上げる。

銃口が有希に向けられ、乾いた銃声が響く。

——運べっ！

それは理性的ではなく、動物的な反応だった。

弾丸が到達するまでの刹那の時間に、有希はその男の後頭部付近の空中へと移動していた。

五十センチの眼下で、何が起きたのか理解出来ない男に向け、無慈悲なまでに引き金を引く。

「にあああーっ！」

ばぁん！

至近距離で放った弾丸は後頭部を直撃し、男を前のめりに吹き飛ばした。発砲の衝撃で銃が手からすっぽ抜ける。

二メートルの上空から落下するも、受身も取れずに思いつきり尻を打った。

「……つく、くうううっ……！！」

痛い。少しだけ涙が滲む。それでも床を這いずる様にして、奪い取った拳銃を掴み取る。間違つてトリガーを握り、発砲音と衝撃が腕に走る。

湿ったトレーナーが気持ち悪い。髪の毛が頬に張り付く。それでも、震える腕と足で立ち上がる。床に左手と同じ形の赤い手形が描かれる。

「はあっ……。はあっ……。はあっ……。はあっ……。」

立ち上がっただけの動作でも視点が揺らぐ。ぼやけた視界の中、スーツの男達は有希の姿に対し、何か恐ろしいものでも見ているような視線を向けていた。

今にも死にそうなくらいに血液を流す自分の姿は、もはや囚われの魔女を助けるヒーローには見えな
いのだろう。皮肉的に口元を緩める。

「あと……三人！」

視線だけで鳩を飛ばす。瞬間、有希は五メートル先にいたスーツの男の目の前に移動している。

相手が驚愕に目を開くまでの僅かな時間の後、有希が放った銃弾が眉間を直撃した。

倒れるのを確認する前に、有希はもう一人の男の背後へ向けて鳩を飛ばす。銃口をその後頭部に当て
る。放たれた銃撃が男の体を吹き飛ばした。

「ちいっ！」

二宮が銃を構える。

明らかに他の男達とは違うスムーズな動作だったが、射線が有希の額に到達する前に、鳩は二宮の背
後へと飛んでいた。

「運べっ！」

瞬間。紙芝居のように景色が一瞬にして変わる。

勝利を確信し、目の前の背中に銃口を向けようとした、その瞬間。

「ワンパターンなんだよ！」

二宮は体を捻り、右腕を横薙ぎに振るう。その手に握られていた拳銃のマガジンが有希の側頭部に直
撃した。

「あぐうっ！」

意識を刈り取るような激痛。視界に火花が散る。吹き飛ばされるようにして横向きに倒れる。

——撃たれる！

一瞬にして体中にアラートが流れる。反射的に片手で銃を構え、トリガーを引く。

ばぁん！

グリップは血で滑り、銃口はあらぬ方向へと曲がった。弾丸は二宮の腕輪をピンポイントで破壊する。大急ぎで握り直し、再度トリガーを引く。

がちっ。

「あ……あ……」

絶望の音が響き、周囲は一瞬だけ時間を止めた。

音は発射される弾丸が無い事を全力で伝えていた。右手を突き出した状態のまま、手から拳銃がこぼれ落ちる。

「さあ、お帰り願いますようか！」

銃口が向けられる。奇襲を破られたというショックが頭を廻り、逃げるといふ選択肢すら浮かばなかった。ただただ怯えの感情だけが溢れ出す。

首筋に血が流れた。右手から滴った血液が太ももに落下した。

血液。

有希の頭の中に一つの発想が浮かぶ。そして、自分はこのままにも残酷な事を考えられるのかと自責する。

「鳥よ……」

頭の中では『本当にやるのか』という質問が繰り返され、『やらなきゃやられる』という答えを何度も返している。

鳩は飛ぶ。音速で相手の体内を通過し、有希の右手の前で弾ける。

「……奪え……!!」
びちゃっ。

瞬間。真っ赤な液体が右手の先の空間に現れ、重力に従って落下した。床に叩きつけられ、飛び散った飛沫がブーツに赤い斑点をつける。

初めて有希は恐怖で目を瞑った。それは血であり、そしてそれは自分の血液ではなく……。

「……くっ……あ……っ」

有希を狙っていた銃が手から零れる。呻き声と共に、血液を抜かれた二宮は床に突っ伏した。

横向きに倒れたその顔は真っ青だったが、辛うじて呼吸はしていた。殺していない。その事実が有希にとつて最大の安心だった。

「はあっ、はあっ、はあっ……!!」

鼓動が暴れだす。体中の細胞が酸素を求めて悲鳴を上げているのを感じる。

ばあん!

何発目かも忘れた銃声。見れば、一穂は最後の一人を打ち倒していた所だった。

一瞬の安心感が強烈な疲労を生み、有希は思わず仰向けに倒れる。コートが床に広がる様はまるで昆虫標本だった。

数秒前が嘘だったかのように、周囲には静寂が広がっていた。

視界に映るのは天井の白熱灯。窓の先には月と夜空が広がっている。景色だけは変わらずにそこに有った。

「……遠野有希。無事か？」

「全然」

視界に一穂が現れる。見下ろすその顔には殴られた後が残り、髪の毛は乱れに乱れていた。有希は出来る限り精一杯の笑顔で、二人の勝利を確かめる。

「……やれば出来るじゃん、あたしたち」

一穂は笑顔で答える。初めて見た笑顔は多奈にそっくりな、はにかむような笑顔だった。

「……そうだな」

十八人を支える渡り廊下に、二人だけの声が響く。

一穂は右手を差し出した。血まみれなのを気にする事無く、右腕を掴んで引っ張る。立ち上がった途端に強烈な目まいを感じたが、何とか両足で支えきった。

「……後は多奈を連れて返るだけ。気合入れていこー……」

声に力が入っていないのは自分でも分かっていた。

歩き始めて数歩。

「あらら……。凄い事になっちゃったわね……」

渡り廊下の先に現れたのは、辻堂都だった。その右手には、数時間前に有希を撃ったショットガン風の麻酔銃が握られている。

「お久しぶりね、お二人さん。まさかこんな早くに」

「鳥よっ！」

話など聞かない。有希は右手を前方に突き出し、鳩を飛ばす。音速の光が辻堂都に当たり、目の前で戻って飛散する。

「呼べっ！」

瞬間。有希の目の前に移動させられた辻堂都は、突然の事態に目を丸くしていた。

「え……!?!」

その反応も考えない。有希は右手を振りかぶる。

「有希ちゃんすーぱーなつくるううううー！ーっ！」

的確にアゴを狙った全力のアップスイングが突き刺さり、眼鏡が飛んだ。

そのまま仰向けに倒れる辻堂都を見下ろしながら、有希は腕を組んで言い放つ。

「話はあるたをボコボコにした後で聞く！……これが正しい手順なんだよね？」

質問の返事は可愛らしい呻き声だった。

この娘は今日の自分の下着の色を知ってしまった。

そんな下らない事を一瞬だけ思いながら、仰向けに倒れる辻堂都の胸元を足で強く踏み付ける。その額に冷たい鉄の銃口を押し付ける。トリガーからぼたぼたと血液が雫となって落下した。

「これは拷問」

なるべく冷たく。自分に言い聞かせるように。

「……いい？ やたら黒くって無愛想で無表情で、あたしより一つ下なのにやたら冷静で、滅茶苦茶に強いんだけど、実は寂しがりで、甘ったるいココアを飲みながらニコニコするような女の子……。ええっと……」

そこまで必要以上に詳細に言いながら、もっと簡単な説明の言葉がある事を思い出す。

個人的にはあまりセンスを感じないネーミングなので、あまり言いたくなかったのだけでも。

「……蒼腕の魔女は、どこにいる？」

生まれて初めての拷問は、引き金を引くフリをする事で成功した。

4.

「うぐあああああああつ！」

月を背に、辻堂敦は獣の咆哮を上げていた。その右腕は痙攣したように激しく上下し、穴の開いた風船のように青色の光が噴出していた。

血走った目。端正な顔には汗が滲み、首筋には血管が浮き出ている。

摘出と埋め込みは一瞬で行われた。白衣の男が右手を伸ばし、小さく何かを呟いた直後、辻堂は右腕を押さえて奇声を上げ始めた。

多奈はそれを怯えながら見つめるだけしか出来なかった。手足の震えが未だに止まらない。

「ぐあああああああーっ！」

悲鳴に耳を塞ぐ事すら出来ない。六年間、多奈の右腕で眠り続けた種房はここぞとばかりに暴れ狂っていた。

どれだけの間、その光景を見続けていたのか多奈は分からなくなっていた。

——もう、何が何だか分からない……。考えたくない……。兄さん……。有希……。

多奈はもう、心体共に疲労がピークに達していた。何も考えたくない。安易な妄想に逃げたい。その考えが少しずつ侵食し始めていた。

その時、部屋に光の筋が差し込んだ。

振り向く。視線の先には、廊下の照明を背中に浴びて、血まみれの……。

「多奈っ！」

「……有希……。兄さん……」

瞳から涙が流れる。有希と一穂は多奈の元に走り寄った。

「多奈、大丈夫!? 怪我は？」

心配そうな有希の瞳を見つめ、多奈が答えようとした瞬間。辻堂敦から今までより一段階大きい咆哮が上がった。

「うぐおああああああっ！」

同時に、その右腕から青色の衝撃波が生まれる。

「うわああっ!?!」

ガシヤアアアン!

爆風。ガラスの碎ける音。可視の衝撃波は一瞬にして部屋の全てをなぎ倒した。三人は綿毛のように容赦なく壁に打ち付けられる。

「い、いたたたたあ……。あー、何なんだよもう……」

背中を壁に打ち付けた有希は、視界の先に、青く光る物体が浮かんでいるのを見た。その下には辻堂敦がうつ伏せでぐったりと倒れていた。

「……何、あれ……?」

それは、青に輝く鹿の角を何本も組み合わせさせて無理矢理に球状を作り上げたかのような物体だった。

大きさは直径五十センチ。多奈の腕に埋められていたとは思えないサイズが、重力を感じていないかのようにふわふわと浮いていた。

その中心部には無数の光の粒がランダムに空中を泳ぎ回っている。

「……鳳仙花の、種房です。私の右腕に埋められていた……」

多奈は呆然としながらその光を見つめている。

人に人以上の力を与える光が部屋全体を照らしている。心が落ち着き、癒されているような感触を与える光。

「綺麗……」

有希は思わず感嘆の溜息をつく。

瞬間。

音が止まる。青の光は一瞬にして縮み、球から点と変わる。

そして。

光が爆発した。音もない爆散は辺りに光を撒き散らし、視界は光の中に沈んだ。

*
*
*
*
*

十一月二十五日。その夜。関東平野全域に、青の光が降った。

雨というには速度が遅く、雪というには積もる事もない、光の雨。枯葉のように十一月の夜空に舞い、ゆっくと落ちていく。

それらは空から降り注ぎ、建造物を通過し、人体を通過し、大地に染み込むようにして沈んでいく。

その夜。降り注ぐ青の光を、何千万もの人々は一様に見つめていた。

ある者は光を指差し『綺麗』と言った。別の者は逃げ場の無い光を指差し『怖い』と言った。

その夜。降り注ぐ青の光を、何千万もの人々は一様に見つめていた。

二時間後には記憶から消えてしまう景色を見つめていた。

体を光が通過した途端、人々は道路だろうと床だろうと所構わず眠り始める。

電車の運転手は安全な所で停止し、安心した所で運転席に突っ伏した。

新4号国道の路肩には何台もの車が縦列停車を行い、その乗客は皆倒れるように眠っている。

コンビニの防犯カメラは次々に倒れこむ客を映していた。青の光はレンズに映る事は無かった。

音が消えていく。光が伝播していく。

テレビに映るニュースキャスターがいきなり倒れた。それを見た人々は同様に眠り始める。

国際電話の相手がいきなり倒れ、自分も倒れる。その倒れる様を見つけた人々もまた倒れ始める。

人を媒介とし、意識の中を伝播する光が世界を埋めていく。静寂が世界を包んでいく。

その夜。降り注ぐ青の光を、何千万もの人々は一様に見つめ、何億もの人々がその光を感じていた。

世界から音が消えた夜。ネオンの輝く街に、季節外れの鈴虫の音が響いていた。

* * * * *

有希はゆつくりと目を開けた。

暗かったパーティ会場に青の雨が天井から降り注ぎ、何の障壁もないかのように床に滲み、消えていく。

窓の外には輝く青が降り注ぐ夜景が広がっていた。

一穂と辻堂、白衣の男が床で突っ伏して気絶している。

静寂の世界の中で、直刀を握る多奈は辻堂の傍に立ち、その姿を見下ろしていた。

僅かに揺れる黒髪、薄い生地黒のドレス、黒の瞳。降り注ぐ雨に照らされる様は、魔女というよりもどこかのお姫様のようにだった。

ゆつくりと直刀を振り上げる。

「え……。だ、駄目ええっ！」

有希の叫びと移動は同時だった。タツクルの要領で多奈の腰に抱きつき、振り下ろそうとする直刀を止めた。

「……有希。この男は悪人なんです。この場で何とかしないと大変な事になるんです」

「駄目！ 絶対、絶対駄目！ それだけは何かあっても駄目！ 人殺しなんて……そんな馬鹿な事しち

や駄目だよ！」

必死にしがみつく有希。多奈の心に強烈な罪悪感が生まれる。柄を握る右手が開き、鈍い音を立てて直刀が床に落ちた。

「駄目……駄目だよ多奈……絶対に……」

「ごめんなさい、有希。……それでも、この男は許してはいけません。こんなチャンスは二度と……せめて、鳳仙花は潰させて下さい」

今にも泣き出しそうな有希に、多奈の胸が軋んでいた。それ故に、駆ける足音を失念していた。

「パパー!!」

辻堂都は全速力で父親の元へ駆け付け、その勢いのままに多奈と有希を両手で押し飛ばした。

そして、父親と多奈達を遮る様に両手を広げる。

「……っ!!」

無言のまま、辻堂都は二人を睨み付ける。レンズ越しの瞳には涙が浮かんでいた。

その眼力に二人はひるんだ。能力は使っていない、父親を守る娘の瞳。それは本当に人の持ちえる、視線の力だった。

「……平塚っ! 起きなさい!!」

視線はそのままに、辻堂都が叫ぶ。声が届いたのか、ぐったりと倒れていた白衣の男が起き出した。

「今すぐ! 今すぐさっさとどこかに飛ばしなさい! どこでもいいわ! とにかくパパと私を逃がしなさい!!」

「ま、待って下さい！」

多奈が直刀を握った瞬間。

キーン……ノイズ音を残して、辻堂親子、白衣の男はその姿を消していた。

静寂が部屋を支配した。深々と降り続ける青の光。吹き飛んだガラス窓の先には青白い月と夜景が広がっていた。

数秒の静謐な沈黙。多奈は無表情のまま、静かに有希を見つめた。

「……有希。何で、来たんですか」

「助けたかったから」

「私なんかの為に？」

「うん」

有希の笑顔が降る光に照らされた。その頬には一筋の血痕。

「……有希は、馬鹿です。私なんかの為に、そんな血まみれになって……」

「うん。でもあたし、こんな無理する自分が好きだから」

「……有希は、馬鹿です……」

雲のない雨空の下で。月を背に、現代の魔女は少しだけ、友達の前で泣いた。

5.

「すいませんが、エンディングを迎えるのはもう少し後になりそうです」

宿河原センタービルの非常階段に、駆け上っていく二人の硬い足音だけが反響する。

引つ張られるようにして繋いだ右手が暖かい。ハンカチ一枚を犠牲にして血は拭われていた。

照明の無い階段は、壁や天井から降り注ぐ光の雨で照らされている。

「……で、悪党が超能力者の人を発見出来なくする為に、サーチャーつてのをこれからはったおすつて事？」

走りながら頷く。早々と帰ろうとする有希に、多奈はこれまでのいきさつを説明した。

右腕の事、六年前の事、辻堂敦の事。降りしきる光の雨の意味。

結果、『あたしも行く』とせがむ有希を、多奈は断りきれなかった。多奈自身、それを甘えだと理解していた。それでも今は離れたくなかった。傍にいて欲しいと思ってしまった。

三十九階の標識が見える。重く分厚い金属のドアを開ける。

静寂と光の中、何の装飾も張り紙もないシンプルな廊下を無作為に走り抜けていく。時折、倒れて眠るスーツの男たちを飛び越えながら。

3910、3909、3908、給湯室、3907。足音が響き、視界の横を表札が通り抜けていく。

「あ、多奈！　ここだよ、さつき道端の人を無理矢理ぶん殴って聞き出した部屋番号！」

3905. ドアノブは無く、カードキーの差込口だけが壁に埋め込まれている。

多奈は右の手の平をドアにくっつけ、少しだけ息を吸う。種房の残滓なのか、右腕に青の光が浮かぶ事に変化は無かった。

押し込む。反発力のベクトルを真逆にされ、まるでパンの生地でも搦んでいるかのように多奈の手の平がドアにめり込んでいく。金属の軋む音が響く。

親指が埋まりきった時、突然ドアは横へと開いていった。廊下の光が筋のように部屋へと侵入していく。

「……あれ？」

有希の目に留まったのは、壁に貼り付けられていた子供用アニメのポスターだった。

手元には簡易なガスコンロとシンクがあり、その先には八畳ほどの部屋が広がっている。

テレビ、タンスが並ぶ。カーペットの床の上に、有希も幼い頃に遊んだブロック玩具が落ちていた。

照明を落とした静寂の部屋。敷かれた布団の中で、小さい男の子が平和な寝息を立てている。

オフィスの三十九階で、二人は生活感溢れる世界に飛び込んでいた。

「……やっと寝付いたの。静かにしてもらえるかな？」

落ち着いた女性の声は部屋の先、全開に開いた窓の向こうから聞こえた。

年は二十代後半。サイドで緩く縛った長い茶髪が夜風に靡いていた。

ブラウスの上にカーディガン、足にはストラップスと簡単な格好でベランダの手すりに手をかけている。月光と青の光が降り注ぐ街並みをバックに、優しい笑顔と視線を二人に向けていた。

「綺麗だよ、この光。直人……あ、私の子供なんだけど、『すげえー！』ってのはしやぎまくっちゃって。それはもう、寝かすのが大変だったんだよ」

眠る息子に送る優しい視線と笑顔。限りなく平和な口調は部屋の内装には合っていたが、今の状況には一切符合していなかった。

「知ってる？ 今ね、世界中の時間が止まってるんだって。この光って、不思議な力を持っていない人を寝かしつかせる効果があるらしいよ？ さっきね、テレビのニュース見てたらいきなりアウンサーの人が眠りだしちゃってね。すごい驚いたよ」

都ちゃんから聞いたんだけどね、と最後に付け加えて、ペランダから部屋の方へと歩く。足音を極力殺しているのが見て取れた。

「多奈ちゃんと有希ちゃん、だよ。私は真鶴成葉、現在二十八歳の未亡人です……なーんてね。直人が昨日っからずっと二人の事を感じ取っていてね。『寂しがりやのお姉ちゃん』とか、『元気なお姉ちゃん』とか言ってたけど、どっちも可愛い子でちよつと嬉しいよ」

目を線にして微笑む。思わず和んでしまいそうな、そんな笑顔。

「……真鶴……成葉……」

多奈は今日の夕方に聞いた名前を紡ぐ。相手の笑顔は崩れない。

「うん。もう六年ぶりなんだね、多奈ちゃん。大体は都ちゃんから聞いてちゃってるんだけど、一応聞くね。……今晚は何のご用なのかな？」

「……サーチャーの鳳仙花を潰しに来ました」

多奈の言葉ははっきりとしていた。その言葉に対し、真鶴成葉は、演技ではなく本当に悲しそうに顔を伏せた。

「……うん。そうなんだよね……。それ以外……ないもんね……。……ごめんね。場所を変えてもいいかな？ さっきも言ったけど、この子、やっと寝付いたの」

二人揃って頷く。行動は反射的だった。

誰も使わないエレベーターは、ボタンを押してすぐさま到着した。

真鶴成葉は最上階である四〇のボタンを押す。閉鎖空間ですら光が降り注ぐ中、慣性だけが上昇する。

三人の沈黙を乗せたエレベーターはすぐさま停止し、インターフォンのような音が響いた。

促されるままにエレベーターホールを抜け、ドアを開けると、そこには。

「ふふっ。何かドラマみたいな場所だよね？」

網目の大きいフェンス。地上二百メートルから望む、三六〇度の夜景。

周囲にめぐらされた強烈なスポットライトが、床に描かれた大きなアルファベットのHを照らしていた。

吹き付ける十一月の夜風。降り続ける光の雨の下。眼下の街並みからは車の走る音すら聞こえない。風音だけの静寂が広がっている。

真鶴成葉はその真ん中、丁度良く照明が一番交差する所へ走り、両手を広げ、踊るように髪をしならせて振り向いた。

「それじゃ、多奈ちゃん、有希ちゃん。お話をしようか？」

宿河原センタービル屋上へリポート。演劇の舞台のようにライトを浴びた真鶴成葉は、光の降る夜空の下、優しい笑顔で二人を見つめていた。

* * * * *

四方八方から叩きつける照明が眩しかった。二人の周りに複数のランダムな影が放射的に伸びていく。十一月の冷たい夜風がコンクリートを走る。有希のトレンチコートと髪の毛が大きく揺れた。

降り続く光の雨の中、多奈は一步步み出る。

「まず最初に……謝ります。六年前、私は貴方に」

「うん、感謝してるよ」

真鶴成葉は優しい笑顔で謝罪を遮った。予想外の回答に戸惑う多奈に、成葉の言葉が続く。

「あの時は確かにびっくりしたけどね。今は心から感謝してるんだよ。あの事がきっかけで、直人にサ―チャー能力がついちゃって、社長さんにスカウトされちゃってね。部屋付きの物凄い待遇なんだよ？ 丁度、旦那様を亡くしてから、これからどうやって直人を育てていこう……って困ってた時でね……。超能力だなんて、抵抗が無いって言えば嘘になるけど、私の手で直人を育てていけるなら、こんな贅沢は無いよ。だから、社長さんと多奈ちゃんには、感謝しても足りないよ」

照明が成葉の屈託のない笑顔を照らす。

多奈は少し俯きながら、さらに一歩進む。

「本当に申し訳ありません。……今度こそは、私を恨む結末になります。納得はしないと思います。ですが……道を開けて下さい。用があるのはサーチャーの鳳仙花だけです」

右腕の前に差し出す。一瞬の白光。二メートル七センチの直刀とポリカーボネイトの透明盾を、多奈は力強く握り締めた。

顔を上げる。蒼腕の魔女の瞳には、冷徹さと、強い意志が映っていた。

「抵抗するならば……私は貴方に対し、勝手に攻撃します。六年前のように、貴方の人生も何も考えず、容赦なく」

「……私は、多奈ちゃんと争いたくないよ」

「嫌なら抵抗して下さい。……貴方も鳳仙花持ちのはずです」

悲しげな視線を床へと落とす成葉。その姿は可愛そうな位に寂しげだった。

「確かにそうなんだけど……。戦うつもりなんて無いんだよ。ただ、直人を守りたくて、誰もを傷つけたくなくて……。だから、話し合おうよ。きっと、お互いに納得できる道があるはずなんだよ」

多奈は答えず、直刀の切っ先をゆっくりと上げ、成葉の顔面に突きつけた。

「……私はサーチャーの鳳仙花を潰す。貴方はそれを拒む。交渉は最初から決裂しています。貴方の選択肢は抵抗するか、しないか……。それだけです。禍根を残したくはありません。……選んでください」

巨大な刀の切っ先を目の前にしても、成葉は一切怯む事無く多奈を見つめていた。交錯する視線。風が静寂の夜を風いだ。しばらくの沈黙の後、成葉は寂しげに笑う。

「悲しいね……。何で世の中って上手くいかないのかな？ 皆幸せになりたいって思ってるのに、努力してるのに、何でこうなっちゃうんだろね。本当、悲しいよ……」

成葉は僅かの間だけ俯き、一呼吸の後に顔を上げた。

「でも……多奈ちゃん、ごめんね。私、精一杯抵抗するよ」

その声は悲壮な覚悟に満ちていて、それでも揺るがない決意を表していた。

成葉は三步後ろに下がり、瞳を閉じ、両手を組み合わせ、その手を唇へと近づける。

その姿は神様に祈りを捧げるポーズ以外の何物でもなかった。体中を金色の光が包み始めていく。

「……神様、私に直人を守る力を下さい……」

瞬間。成葉の周囲に金色に輝く槍が数十本出現した。

三角形の穂先、長い柄の全てにルーン文字のような紋様が描かれ、それぞれが金色に輝きながら浮遊している。

啞然とする二人を見つめ、光降る夜空の下、我が子を守るための金色の光を背に、シングルマザーは微笑む。

「先に言っておくよ。私、強いからね。……母の愛ってね、核ミサイルよりも強いんだよ？」

戦慄が走った。多奈は有希に振り返る。

「有希！ 逃げてください……さ……」

言い切れなかった。金色の槍が有希の体を貫いたのは、一瞬だった。

弾丸のスピードで射出された五本の槍は、有希の胸部、腹部を容赦なく貫通していた。

「ゆ……有希……」

両手から武器が落ちる。掠れた声しか出ない。有希は目の前の光の柄を見つめ、震える手で握る。

「あ、あれ……？ もしかしなくてもコレ……刺さってる？」

多奈の心に強烈な後悔が浮かび、膝が勝手に折れた。衝撃は意識から遠かった。

背中越しに、成葉の音が響く。

「……痛くないでしょ？ 傷も残らないから安心してね」

「へ？」

気の抜けたような、数秒間の沈黙が流れた。

「……あ、あれー？ ホントだ、全然痛くないし」

有希は困ったように頭を掻いた。軽いステップで一回転すると、体を貫く槍も大きな円を描いた。

その異常な光景を、多奈は愕然としながら見つめている。

「……有希、本当に大丈夫なんですか……？」

「うん。何も痛くないし。……っていうか多奈。多奈にも思いっきり刺さってるんだけど」

有希は多奈の足を指差す。多奈の太ももには金色の槍が貫通していた。痛みどころか、その感触すら

全く無い。

「二人とも、驚かせちゃってごめんね。……それね、槍じゃなくてアンテナなの」

「アンテナ？」

「うん。私、直人を守りたいけど、誰も傷つけたくなくて……。だから、そのアンテナに向けて、私の

気持ちを送るの。気持ちが通じれば、争うことなんてきつと何も無いんだよ。私、絶対に二人を説得するからね。力は無いけど、気持ちだけは負けたくないから……」

成葉はスポットライトの中心で胸に手を当て、微笑と共に二人を見つめる。

ゆつくりと瞳を閉じる。風が吹き抜け、その髪が光降る夜に踊った。

「……届け、私の気持ち」

子供に語りかけるような優しい声で、攻撃が始まった。

心臓に太い錐を突き立てたような痛み。それが多奈にぶつけられた最初のイメージだった。

映像と感情と感觸。アンテナの槍を通じ、成葉から伝えられる感情の波が五感を支配した。

「ありきたりな、ちよつとした悲しいお話だよ。……私ね、愛しの旦那様を七年前に亡くしたの。どこにでもあるような交通事故でね。本当にいきなり、ね」

線香の匂い。夫の遺影。夏の陽光。蝉の声。喪失感。幼い息子の温もり。伝う涙。両親も交通事故だった。周囲からの『まだ若いのに……』の声。夫の父からの殴打、罵声。駆け落ちの後悔。よく分からない保険の手続き。

「そこから、私の平和で幸せな駆け落ち人生は急展開。悲しんでる暇もない位に色んな事が起きちゃつて。お金がどんどん減っちゃったの。辛かったけど、直人のためにも一杯働いたんだよ。働いたんだよ……元々私、体弱くてね。倒れちゃったんだよ」

暈の匂い。解決の見えない金欠。周囲に頼れない。孤独。未来への失望感。夫への罪悪感。泣いた夜。

心中を考えた夜。鈍痛と過労と喀血。レジの液晶に血液の斑点。

「でも、六年前。あの事件をきっかけで、社長さんに呼ばれたんだよ。『直人君の力が必要だ』ってね。さっき、私の部屋を見たよね？ あそこね、この会社の人に無理して作ってもらったの。私はここで働かせて貰ってるし、何とか直人を育てていけるだけのお金を貰えている。もう、感謝してもし足りないよ。だから、直人が大人になるまではこの場所を死守したいんだ。……うん。一言で言えば……」

夜。黒髪の女の子。青の光。恐怖。辻堂敦の声。与えられた部屋。感謝で止まらない涙。

「生活がかかっているんだよ」

光の降る夜。多奈と有希。感情を叩きつける事への罪悪感。負けた場合に待ち受ける結末への恐怖。守りたいという、一途で強固な意志。

映像と感情と感触の全てを、多奈と有希は知覚した。

「……ごめんね」

成葉は申し訳なさそうな、儂い笑顔を浮かべた。その頬に涙が流れた。

「神様って平等が好きみたいだね。この力で相手の心を傷つけると、私も同じくらい傷ついちゃうんだよ。だから私、多奈ちゃんと有希ちゃんがどれだけ辛いのか、傷ついてるのか、ちゃんと分かっているからね。だから……ごめんね」

ぼんっ。軽い破裂音と共に光の槍は弾けるようにして消えた。

五感を取り戻し、多奈は視線を背けた。有希の瞳からは涙がボロボロと溢れていた。相手の攻撃意思を刈り取る。それが真鶴成葉の、優しい攻撃だった。

「ねえ、多奈……。もう、やめない？」

鼻をすすりながら、有希は懇願するように問いかけた。

「……嫌です」

「あたしだって、多奈の気持ちも分かるんだよ。でもさ、あたしは……。あたしは顔も知らない百万人よりも、目の前の怯える一人を助きたい。いくらなんでも可哀相だよ……」

有希の言葉を振り切るように、多奈は俯きながら一歩前に進んだ。

成葉が悲しげにその姿を見つめている。

「人と人は分かり合える。理解しあえる……って言うけど、難しいよね。私は私の正義があって、多奈ちゃんには多奈ちゃんの正義があって、お互いに理解出来た。でも、どっちも正しい事のはずなのに、その望む先が正反対になっちゃうんだから。お互いに妥協も出来ないし、譲歩も出来ない。……こういうったらもう、取っ組み合いの喧嘩をするしかないのかなあ……？」

成葉の周囲には無数の槍が浮かんでいた。オーケストラのように配置された槍の穂先は全て多奈へと向いている。

「ごめん、多奈ちゃん。私、容赦出来ない。多奈ちゃんよりも、私は私と直人が大事だから」

音もなく、多奈の腹部に光の槍が突き刺さった。それでも多奈は歩みを止めない。

「……そうです。交渉は根本から決裂しているんです。……私は」

二歩目。多奈の胸に光の槍が突き刺さる。両手に息子を抱く感触と、幸せな感情が打ち込まれる。その暖かさが、多奈の罪悪感を掻きたてる。

「お願い、多奈ちゃん。諦めて。私は嫌なんだよ……。こんな事するのも、直人の記憶を消されちゃうのも」

「……私は、顔も知らぬ百万人と、監視に怯える施設の仲間と、私の世話ばかりをさせてしまう兄さんと……」

三歩目。肩と脇腹に一本ずつ。鳳仙花を潰され、記憶が消される恐怖が打ち込まれる。

「……そんな正義感以上に、明日の私が罪悪感から逃げる為にも、飛び散ってしまった鳳仙花に対するせめてもの贖罪の為にも……」

多奈は自分に言い聞かせるように言い切った。

更に一步進む。迫る多奈に、成葉はゆっくりと後ずさった。

「やだ……。嫌だよ……。私の気持ち、伝わってるはずだよね……。？ それでも……」

「伝わっています。どれだけ貴方が優しく、強い人で、どれだけ怯えているのだという事は伝わっていません」

多奈は歩みを止めなかった。その胸に、腹部に、足に、感情の槍が突き刺さっていく。

「多奈……」

多奈は有希の声を背中越しに聞いた。その沈痛な音は多奈の歩みを止めるに至らない。

「多奈っ！」

叫びと同時に有希は光の鳩を飛ばし、多奈と成葉の間を遮った。

成葉をかばうように両手を広げる有希。その視線が至近距離で交錯する。

「こんなものって間違ってる……。何かよく分かんないけど、間違ってる……。正義じゃない！ あたしは納得出来ない！」

青の光が有希の決死の表情を照らしていた。額から一滴の血が流れ、頬に涙のような筋を作る。多奈はその表情に、母の三里の表情を見た。

「……有希……」

「多奈、もう帰ろうよ。あたしは多奈にこんな事させたくない」

「ありがとうございます、有希」

「……えっ？」

多奈は笑顔を浮かべていた。その表情は強く、淡く、寂しげで、儂かった。

「反対してくれて嬉しいです、有希。……この事は私の独断で、全て私の責任です。悪役は私だけで十分です」

「そういう意味じゃなくって！」

ぱんっ。

「え……っ？ うわわわわっ!?!」

軽い音。まるでお遊びのような裏拳が有希を二メートル横に吹き飛ばす。

有希に痛みは無い。瞬間的に有希の重力を変え、優しく押し出すだけの攻撃だった。

「ごめんなさい、有希。私は自分勝手に、他人なんて気にしない悪役なんです。嫌って下さい。私もその方が気が楽です……」

多奈は全力で努力したつもりだったが、その言葉には悲哀が満ち溢れていた。振り払うように歩みを再開する。

その姿と伝わってくる強烈な傷心に、成葉の目から涙が溢れていた。

「痛い……痛いよ多奈ちゃん……。今、多奈ちゃんが物凄く傷ついているのが分かるんだから……。多奈ちゃんばかりそんなに傷ついちゃ駄目だよ……」

「こんな私にも、譲れないものがあります。守りたいものがあります。だから……」

静寂の夜に足音が響く。多奈が成葉の目の前にまで歩み寄った途端、突き刺さっていた槍が霧散した。視線が絡まる。多奈は右手を成葉の胸元へと突き出した。右腕が青く輝く。

「私は貴方の感情から、正義から目を背けません。逃げます。私は私の為だけに、私だけの卑怯な正義を貫く為に、逃げて、そして、抵抗します」

成葉の顔に驚愕と絶望が映った。

「いや……。いやあああつ！」

瞬間、数にして四百八十六本の槍が多奈へと襲い掛かる。

多奈は瞳を閉じ、右腕の青を一層輝かせる。降り注ぐ感情の槍は多奈の周囲でベクトルを変えられ、地面へと突き刺さり、弾けるようにして消えていった。

気持ちは届く事無く、一方的に弾かれ、光の粒子となって空へと上っていく。

「……ごめんなさい」

呟くように、多奈は最後に謝罪を告げた。その反応を待つことなく、多奈の力が成葉の意識を刈り取

る。

前のめりに倒れる成葉を、多奈は優しく抱きかかえた。

「……貴方の抵抗に感謝します」

静寂の世界。多奈の声は弱々しく、風に掻き消えた。

光の降り注ぐ月夜の下。吹き付ける風は冷たく、眩い照明が劇場の舞台のように二人を悲しく照らしていた。

遠野有希による、我儘で身勝手な戦争が終わる。

6.

その夜。真鶴直人は鳥のようにゆっくりと空から降ってきた人物を見つめていた。窓が勝手に開く。夜風が吹き込む。

照明が付いていない部屋。空から降る青色の光だけが辺りを照らす中。

黒色のドレス、黒色の長い髪がふわふわと揺れる。月光を浴びたその姿は、まるで御伽話の魔法使いのように見えた。

「……おねえちゃん、誰？」

魔法使いは笑った。それは、母親の次くらいに優しく、寂しげな笑顔だった。

そして、光の降る夜空を背に映しながら、小さな声で言った。

「……悪い魔女ですよ」

その夜。その後の記憶を、真鶴直人は憶えていない。



遠野有希三大行動原則 その4

Escape 6.

1.

「あたし、落下しながら熟睡した、最初の人間になれたよね？」

見慣れた住宅街路にゆっくりと着地していく。コンクリートの地面に軽やかな足音が響く。

光の雨は降り終え、世界は正常な静寂の中に包まれていた。

時刻は午前五時。夜明けが近づいている。

遠くの空が僅かに明るみ始め、雲は藍色と白の幻想的なコントラストを描いていた。

始まるの時間。周囲に立ち並ぶイチョウ並木は、未だに残る薄い闇に隠れていた。

二時間続いた落下飛行。有希の髪はボサボサで、体は冷風に冷やされきっている。握りつばなしの右

手だけが温かかった。

バイクで新4号国道を走って帰ってくる一穂は、まだ到着しそうにない。

「……あははっ」

「? どうしました？」

「……なんか、さつきまで必死の戦争をしたのが嘘みたいでさ。緊張の糸がぶつ切り切れたら、何か面白くなっちゃって」

指が拳銃の引き金の感触を憶えている。走りすぎた足がパンクしそうに張り詰めている。

お気に入りのトレーナーもトレンチコートも血まみれで、ブーツの中では血液が固まり、動く度に粉

末へと変わっていく。

服は先程までの現実を冷淡に伝えているが、それらはもう終わった事であり、これから先に再びこんな事があるとは伝えていない。

夜明け。一日が終わって、一日が始まっていく時間。

藍色の空を望み、両腕を大きく広げる。

「ああー……。もう終わっちゃうんだ。平凡なあたしに降り注いだ、心躍るバイオレンスとアクションの日々はもう終わっちゃうんだ」

「喜ばしいことじゃないですか」

多奈は不思議そうに有希を見つめていた。

「……まあ、そうなんだけども」

きつとこれは、ハッピーエンドなのだ。捕まった魔女を助ける勇敢な女子高生と兄の物語は、これできつとハッピーエンドなのだ。

けれども。有希はどこか、胸に切なさを感じていた。

「きつとあたしは、今日も学校に行くんだよ。まったく血に汚れてもいない、普通の制服を着てさ。訳分からない数学の授業を受けて、休み時間に無駄話して、家の机で待ち受ける参考書に向かって帰っていくんだよ。こんな血まみれになって戦うような事をして、あたしの周りって物凄く頑丈だから、全然変わってくれないんだよ」

「不満なのですか？」

有希は首を横に振る。

「ううん、すつごく楽しいよ。生きてるって事は、物凄く楽しい事だよ。人生面白くないって言うのは、面白くしようとする努力をしてないだけだからね。あたしは人生に妥協しない女だから。面白くなかったら面白くするの。馬鹿な事でも本気で挑んで、すんごい苦しんだ挙句に本気で泣いたりしたいし、泣き虫の友達とかと馬鹿な話して笑っていたいと思ってる」

有希の満面の笑顔に対し、多奈は少しだけ笑って、少しだけ寂しそうに目を伏せた。

「……私は、有希が羨ましいです」

「羨むだけなら誰でも出来る。本当に羨ましいなら、まず行動だよ、多奈」

有希は俯き気味の多奈の右頬をつまんだ。柔らかい頬つべたが容赦なく引つ張られていく。多奈は驚いて目を丸くした。

「……ひゅ、ひゅひ……?」

「多奈は笑顔が硬いんだよ。もつとこう、にぱーっと笑えばとっても可愛くなると思うんだよね?」
ぐにぐにぐにぐにぐに。

「ほーれ、ほれほれ〜」

「ふひ……」

上下左右に引つ張られる頬。当初は驚きで一杯だった多奈だが、少しずつやられっぱなしの状況を打開し始める。

目が鋭くなったかと思うと、その両手は有希の頬を挟んでいた。

「……そういう有希は、表情が柔らかすぎなんです。もっと、真面目な顔が出来るようになった方がいいと思います」

ぎゅううううううう。

多奈の両手によつて頬が挟まれていく。

「むぎゅう……」

對抗するように、頬をつまむ指に力を込める。それに反応して、多奈が挟み込む手の力も強くなつていった。

視線がぶつかる。睨みつけるようにして見つめ合う。お互いの手に込める力はどんどん強くなつていく。緊張の糸は一気に張り詰めていく。

「……ぷっ」

糸が切れる。

「……あ、あはははははっ！」

「……つく」

終了のゴングはお互いの笑い声だった。

腹を抱えて笑う有希と、手の甲で必死に笑いを堪えようとし、堪えきれていない多奈。

「……ま、まったく、何やってるんでしょうかね、私達……」

「あははははっ！ いやー、こんな感動的なエンディングシーンは他にないと思うよ多奈ー！」
「そんなわけ……っ！」

再度押し寄せた笑いの波が多奈を押し流した。釣られるようにして有希の馬鹿笑いの声が、夜明けの閑静なイチョウ並木に響き渡った。

二人はしばらくの間、何だか訳の分からない理由で笑い続けた。

数時間前の出来事は遠い昔のように、二人が出会ったのも遠い昔のように。

「あははっ！ 初めて見たかも！ 多奈がそうして涙目で笑ってる所！」

「み、見せたくて見せてるんじゃないやありません！」

数時間前の出来事は遠い昔のように、二人が出会ったのも遠い昔のように。

数分後に別れが訪れる事など、夢物語のように。こんなにも楽しくて仕方が無い感情が全て何も無かつた事にされる事など、考えもせず。

十一月の夜明け空の下、どうしようもなく馬鹿な二人が、ただただ笑っていた。

横隔膜が痙攣しそうな程に笑った後、有希は柔らかな笑みを添えて、多奈に問いかけた。

「ねえ、多奈。多奈はこれからどうする？ 多奈を監視する人はいなくなっただし、一緒に学校行く？」

「行きたいです……。いえ、行きます」

「よし！ 多奈なら美少女転校生として大賑わい間違いなしだね！」

勢いよく手を握る有希に、多奈は寂しげな笑顔を浮かべた。

「ただ、その前に私は……飛び散った鳳仙花の駆除をしていきます。全部は無理ですが……開花した種だけでも潰していかないと」

「あたしも手伝う！」

「絶対駄目です。……有希ならそう言うと思っていました」

多奈は緩やかに手を離し、真剣な視線を有希に向けた。

藍色の空を背に、長い黒髪、黒のドレスが冷たい風に揺れていた。

「有希。私はこれから有希の鳳仙花を潰します。……鳳仙花の事は、そもそも有希にとって関係のない世界の話でした。だから」

「超拒否っ！ だって、鳳仙花つてのが潰れたら多奈の事忘れちゃうんでしょ!!」

「潰さないと、有希は私の手伝いをしたりしますから。もう私は有希の血液を見たくないんです。それに、有希は言いませんが、私がサーチャー……真鶴親子にした事を、有希は一生引き摺っていくでしょう？」

目を逸らさず、多奈は柔らかい笑顔を作った。

「……そのくらいは私、有希を知っているつもりですから」

二人の間を強い風が吹いた。多奈の言葉の後、有希の言葉の前に踊る風は、イチヨウの葉を数枚巻き込んで空へと躍らせていく。

「……多奈がそんな攻めの言葉を言うなんて、あたしは知らなかったからね」

少し頬を染めて目を逸らす有希を、多奈は微笑みながら見つめた。

「有希。私は有希の事が好きです」

「ふええっ!?!」

「……たった二日間でしたけど、大切な、初めての友達でした」

「び、びっくりするなあもう……愛の告白だと思っちゃったよ。……うん、あたしもそう思ってるよ。でも、友達でした、じゃないよ。現在進行形。今日で最後にしたくないし」

多奈はゆっくりと首を横に振る。

「有希は普通の女子高生としての生活をして下さい。私はそれが望みです。後の事は私がやります」

「……やだ。多奈に全部押し付けるのも、あたしだけ逃げるなんてのも、嫌。やっぱりあたし、記憶は消させない」

「有希……」

「あたしはね、この先に苦難があるとかはどーでもいいの。ただ、目の前の友達を忘れちゃうってのが堪らなく嫌なの。……多奈がどう言おうと、この意思を曲げる気は無いつ!」

「私の気持ちも察してください……」

悲しげな多奈の視線が重なる。

数秒の沈黙の後、有希はゆっくりと溜息をついた。

「……ねえ、多奈。こうなったら、勝負をしようか!」

「……勝負?」

「そう、勝負。多奈が勝ったら鳳仙花潰し。あたしが勝ったら鳳仙花潰し無し。負けたら文句も言い訳

も無し。……もう、解決策はこれしかないと思うんだよね」

「……何の勝負をするんですか？」

有希はにっこりと笑った。

——最後を飾るのは、これ以外に考えられない。この二日間、これしかしてないのだから。

「鬼ごっこ。制限時間は五分。あたしが逃げきったらあたしの勝ち。多奈が捕まえられたら多奈の勝ち。能力でも何でも使用オーケーね。……どう？」

「何でもって……ま、待ってください！ 有希、またあの能力を……！」

驚いた多奈が有希を捕まえようと手を伸ばす。

既に有希は時計で時間を確かめ、そして前方の空へ向けて鳩を飛ばしていた。

「スタートっ！」

有希の耳にノイズ音が走る。上空二十メートルの空から望む、視界一杯の空が一瞬にして広がった。髪が浮く。慣性が働く前の一瞬の浮遊感が堪らなく心地よかった。

十一月二十六日、午前五時四十五分。藍色の夜明け前の空の下。辺りは静かで、風は冷たかった。

有希は視界一杯に広がる空を見つめる。重力加速度に従って落下を始めた体から、五分後には納得のいく結末が有る事を強く願ひ、信じていた。

「有希っ！」

右腕を青く光らせ、多奈が飛んでくる。

有希は逃げるために、自分の正義を貫くために、光の鳩を遠くまで飛ばした。

蒼腕の魔女と女子高生の、盛大な鬼ごっこが始まる。

2.

たんつ。

鳩を飛ばし、誰かの家からも分からない瓦屋根に着地する。

東の空は少しずつ明るくなっていた。雲が藍色から少しずつ白へと変わっている。夜明けが近づいている。

「次っ！」

鳩を精一杯遠くまで飛ばす。最大射程は五十メートル前後だという事を、今頃になって知った。

「有希っ、もうその能力は使わないで下さい！　こんな所で無理をしてどうするんですか!？」

空中を水平に落下する多奈が追いかけてくる。ヘリコプターにすら匹敵するスピードは、有希の最大射程を一秒で埋めていた。

「多奈っ！　勝負ってのはね、お互いに全力を尽くしてこそ勝負なんだよ！」

多奈が有希を捕まえようとした瞬間、鳩は有希を前方の空へと運ぶ。後方五十メートルで多奈は空気を抱きしめていた。

上空二十メートル。所々でイチヨウが並ぶ見慣れた街を見下ろし、落下が始まる前に前方の空中に鳩を飛ばす。

まるでスライドショーでも見ているかのように、視界が一秒単位で変わっていく。

首元に流れる血液の熱さを感じる。右手から落ちた血の雫が二十メートル下のコンクリートの道路へと吸い込まれていく。

夜明け前の凜とした冷たい風。冷えていく頬と足が心地よかった。

——あと、三分二十八秒。

空中で時計を確認したのは初めての経験だった。

そんな僅かな時間でも、有希の事を心配するという理由で現代の魔女は捕まえにやってくる。

「有希！ 無理をしないで下さい！ これ以上能力を使ったら、死んでしまいます！」

悲壮な声が有希の胸に刺さる。

——それでもあたしは止められない。この逃亡戦は勝たなければならぬ。……もう、持たないかもしれないけど……。

昨日の夜、自分はどれくらい血液を失ったのだろう。人はどれくらい血液を失うと死んでしまうのだろうか？

体はひたすらに警告音を鳴らし続けていた。

「鳥よっ！」

それでも、有希は逃げる為の鳩を飛ばす。

ここで勝負に負けたら、今の自分は死ぬのだから。伊勢崎多奈という、無愛想で心配性で、笑顔の可愛い友達の記憶を持った遠野有希は死んでしまうのだから。

——我ながら、どーしよもない位に頑固だなあ……。

頭が割れるように痛い。視界が暗い。腕がやたらと重く感じる。

その状況の中、有希は頬を緩ませていた。

二分五十三秒。

見下ろす視界に千年谷駅が映った。見慣れたホームに始発電車が滑り込んでいた。気づけば一駅分も飛んで来てしまったらしい。

あと数時間後に自分は、いつもの制服を着て、あのホームを歩いているはずだが、何故か物凄い遠い出来事のように感じた。

何羽の鳩を飛ばしたのかは憶えていない。多奈の声も遠くに聞こえる。

流血は止まらず、じつとりと血に濡れたトレーナーの感触が気持ち悪かった。

「……あははっ。さすがにもう限界みたい……」

分の悪い賭けだったのかもしれない。体がこれ以上は不可能だと冷淡に告げ、有希はそれに納得した。

「鳥よ……」

最後の抵抗。広がる空に向けて最後の鳩を飛ばした。
右腕を滑り、輝く鳥は藍色の空へ向けて羽ばたいていく。

「……届け……」

瞬間、有希の視界一杯に夜明け前の空が広がった。

上空三〇〇メートル。何の隔たりもない、藍色の空。

——ああ……。

それは感動だった。ただ綺麗な空を見つけた事の、素直な感動だった。
二度と見れない空。記憶に残されない空が、視界一杯に広がっていた。

既に飛ばす鳩も無く、体は落下を始める。糸の切れた人形のように、手足も何も動かなかった。
落下の中、有希は遠くなっていく空を見つめ続けていた。

「有希っ！」

垂直に落下する有希を、時速二〇〇キロで水平に落下する多奈が捕まえた。

車に轢かれたかのような強烈な衝撃すら、どこか遠くに感じる。

空中で急ブレーキがかかり、二人は空中で制止する。

体をへし折られそうな位に、多奈の両腕は強く有希を抱きしめていた。

「……有希は、馬鹿です！」

多奈の泣き顔を見たのは初めてだった。

顔を上げた多奈と視線が重なる。その目に大粒の涙が溢れ、頬を流れていた。

この瞬間、有希は本当に負けたのだと思った。

「……ごめん、多奈。あたし、我儘だからさ……」

「……っく、ひくっ……」

千年谷市上空。太陽は登り始め、藍色の空は少しずつ色を変えていた。

有希は、自分の事を心配して泣いてくれる友達を優しく抱きしめていた。

「……ひくっ……。ぐすっ……」

鬼ごっこの勝者は、残った競技時間の二分三十一秒を超えて泣き続けていた。

3.

「多奈、憶えてる？ 一昨日のあたし達、このイチヨウ並木を突っ走ってたんだよ」

勝負の後、たまたま降り立った場所は、この街で一番綺麗なイチヨウの並木道だった。

トラックが一台通過出来るくらいの道は石のタイルが敷き詰められ、その上に無数のイチヨウの葉が覆いかぶさっていた。

周囲には等間隔でイチヨウの木が植えられている。それぞれが夜明け前の光に照らされ、鮮やかな黄色を映していた。

「……綺麗ですね」

「うん。最後の舞台としては、なかなか悪くないと思うよ」

二人は明け始めた空を見上げる。未だ藍色の雲。冷たい朝の風が吹いて、薄い青の空に黄色の葉が舞った。

「……綺麗ですね」

「うん」

湿度を帯びた強い風が、イチヨウ並木を通り抜けた。

風圧で巻き上げられた黄色の葉が、雪のように周囲に降り注いでいた。

しばらくの間。二人は空を見上げ続けていた。忘れてしまう光景を、一緒に見上げ続けていた。

朝日は昇り始め、イチヨウの葉の隙間から無数の淡い光の柱が映り始めた。石と葉の道に、長い影が映る。

黄色と青の幻想的な光景の中で、二人は静かに空を見上げ続けていた。

「……有希」

「うん」

多奈が差し出した右手に朝日が陰影を映す。

有希はコートで血を拭い、その手を握り返した。何度も握った手は、冷たい空気の中で唯一の温もりを与えてくれた。

視線が交差する。光が差し込み、イチョウの舞う静寂の世界で、別れの瞬間が近づいていく。

「ごめんなさい、有希。私は良い友達になれませんでした」

多奈の右腕が淡く輝き始めた。同時に、有希の中で何かが削られていく感触が走る。

「全くだよ。まさか最後に記憶消されちゃうなんて、思いもしなかったよ。これからもっともっと楽しい事が待ってたかもしれないのにさ」

冗談交じりの口調。笑顔。普段と変わらない言葉。記憶が、思い出が、少しずつ削られていく。

「……一緒に遊びに行きたかったな。駅前の甘味屋とか。友達も紹介したかったし。色々、これから、色々……」

「……ごめんなさい……」

手を繋いだまま、多奈は顔を伏せた。

一回だけ肩を震わせて、一粒だけ涙を地面に落として、右手を強く握り返した。

僅かな間を置いて、多奈は顔を向けた。その顔にはいつもの淡い微笑が浮かんでいた。

前髪が揺れ、朝日に照らされたその顔は、素直に綺麗だと有希は思った。

「私は、有希の事を忘れませんか」

「ええー。それって物凄く不公平。あたしは忘れちゃうんだよ？」

「そうです。私は卑怯で、正義なんてどこにも持っていないです」

多奈の意地悪な言葉を聞いたのは初めてだったのかもしれない。

その中で、少しずつ記憶が削られていく。多奈と一緒に飛んだ街の名前が思い出せない。一穂と一緒

に走った道路が思い出せない。

「……有希、ありがとうございます。私は、有希に出会えて良かったです」

魂を握られるような、そんな強烈な笑顔だった。この笑顔とも、右手の暖かさも、あと少して離れ離れになる。

「あたしも、多奈と会えてよかった。この二日間、本当に楽しかった。多奈。そういう笑顔を、数分後も、明日も、一ヶ月後も出来るといいよね……」

記憶が消えていく。夕陽を背に、巨大な刀を持った現代の魔女の姿が消えていく。ビルの十六階、渡り廊下から見下ろした夜景が消えていく。

右手の感触だけを便りに、必死に消えていく記憶をかき集めている。

「……あたしはあたしの選択を後悔しない。あたしはあたしの信念を今も貫いているもの。遠野有希は、自分の正義を貫いて、人生に妥協しないで、胸を張って歩いていけたから……」

最後の最後まで、何て自分は意地っ張りなんだろう。そう思って、思わず頬を緩めた。

自分は……遠野有希は、こういう奴なのだ。どうしようもなく馬鹿で、頑固で……。

多奈が有希を優しく見つめている。その瞳は明らかに潤んでいた。それでも、ずっと有希を見つめ続けていた。

「……あ、あははは……。思ったより、コレ、結構……キツイね……」

記憶は既に大半が削られていた。青の光の降った夜の記憶が消える。多奈と出会った理由が思い出せない。

何かがあったはずだと必死に記憶の糸を辿るも、それらが次々に切断されていく。

記憶が消えていく。この胸を強く締め付ける、感情だけが残されていく。

忘れたくない大切な思い出が消え、その反動だけが心に残っていく。

「あ……」

有希の中で、バイクに乗った暖かい背中的人物が光の中に消えた。名前が思い出せない。一回しか見せなかった笑顔も、背中への感触も……もう、思い出せない。

「多奈……」

有希に残ったのは、目の前の多奈の記憶だけだった。伊勢崎多奈。無愛想で強くて、夜空を見上げるのが好きな……。

がりっ。

頭の中で、爪音が響く。残された最後の記憶を削り取るための爪が、目の前に迫る。

本当に失いたくない思い出が削られていく。

「……有希。……さよなら、です……」

泣きそうな表情で多奈は有希を見つめ、右手を強く握り返した。

消えていく記憶の中、ただ、『この子は泣かせてはいけない』という意志のベクトルだけが生き残っていた。

「多奈、最後の最後ってのはね、お互い笑顔で別れるんだよ」

目の前にいるはずの多奈の声が思い出せない。さっき見たはずの笑顔が思い出せない。

ただ、最後は笑顔で、相手の名前を呼んで別れたい。そのベクトルだけが有希を動かしていた。だから、最後は、笑顔で。

「多奈。……ばいばい。また会おうね」

瞬間、最後の記憶が消えた。もう自分は、目の前の女の子の名前を思い出せない。ただ、大切な……大切な人だったような、そんな感触だけが残っていた。何かを失ったはずなのだが、失ったのが何なのか、それすら分からない。ただ、感触だけが、失ってしまったのだという感触だけが、残っていた。この感触だけは失ってはいけないという感情だけが、残っていた。

だから、自分は。遠野有希を構成する意志に、一つを追記する。

遠野有希行動三大原則、その4。

自分の正義を貫く事。人生に妥協しない事。常に胸を張って歩く事。そして。

「……ひくっ……えぐっ……」

泣きたい時は、素直に泣く事。今この瞬間の感情を忘れないために、刻むために。

全ての記憶が削り取られ、有希の視界は真っ暗になった。

倒れそうになる有希を、誰かが優しく抱きとめる。

有希の頬に暖かい雫が落ちた。有希の涙ではない、別の誰かの涙を、消えかかる意識の中で感じていた。

イチヨウの並木道。差し込む朝の木漏れ日。冷たい風。

世界が始まる時間の中で、消えかかる意識の最後の瞬間で。

有希を暖かく抱きとめた誰かの、優しい声が響いた。

「貴方の沈黙に感謝します」



Last Steps, Sounding.

「……あれ……？」

気づいた時、有希はイチヨウ並木の真ん中で立ちすくんでいた。

風も無く、はらはらと落ちる黄色の雨の中に朝日が差し込んでいた。

——何で私、ここにいるんだっけ……？

記憶を辿っていく。幼馴染と電話をして、受験勉強にうんざりして、散歩がてらイチヨウでも見に行こう……そんな事をしようとしていたのを思い出す。

家を出た後から並木道までの記憶がすっぱりと無いが、何故だか不安には思わなかった。

「うわっ……」

自分の格好を見直す。白だったはずのトレーナーが真っ赤に染まっていた。ブーツの中も赤に染まっている。

それが自分の血液だと、何故か瞬間的に理解した。首元に固まった血を爪で削り取る。

「うーん……」

いきなり服が血まみれになっている。悲鳴を上げてもいいはずの状態なのに、有希は冷静だった。

理由は分からない。ただ、問題ない、という感触が漠然と、それでいて確実に残っている。

——家に帰って、シャワーでも浴びよつと……。

夕方に出かけたはずなのに、腕時計は二日後の朝の七時を指していた。

不思議で溢れ返る状態の中、有希は自分の信念を貫けている事を何故か確信していた。そんな感情だけが、ただ心に刻まれていた。

朝日を浴びながら、イチヨウ並木を歩いていく。落ちたイチヨウの葉を踏む音が響く。

一本のイチヨウの木の下。一人の女の子が、イチヨウの舞い散る原色の青空を見つめていた。

長い黒髪と黒のミディドレスが特徴的な女の子は、有希に気づいて視線を送る。

瞬間、並木道を強い風が吹き抜けた。

黄色の葉が踊る。青空へと舞い上がったイチヨウは明るく冬の日差しを浴びて、ゆつくりと雪のように降り注いだ。

幻想的な光景の中。女の子は有希を見つめ、柔らかい笑顔を作った。通行人に向けるには優しすぎる、そんな笑顔だった。

「……綺麗ですね」

「うん」

しばらくの間。二人は空を見上げ続けていた。これからも憶えていく光景を、一緒に見上げ続けていた。

不思議なほどに優しい、沈黙の時間。見上げた空は、どこまでも青く、広がった。

十一月二十六日。その朝、たったの数分だけ、雨が降った。雲ひとつ無い空から、大粒でまばらな雨粒が降り注いでいた。遙か遠い所から上空の風で流された雨は、冬の眩しい光を反射しながら落ちていく。

イチヨウ並木を一人、歩いていく。

空から降り注いだ雨粒が朝日を反射し、街中を輝かせていた。

コンクリートの地面が輝く。水たまりには青空が広がっている。木々の葉に浮かぶ水滴は宝石を散らしたかのように輝いていた。

空を見上げる。雨粒に輝く原色の青空にイチヨウの葉が踊る。

その光景を、笑顔で見つめていた。

——今日もきつと、楽しい事があるに違いないっ！

登り始めた太陽の光を背中に受け、少しだけ強く足を踏み鳴らした。

そうすれば重力が変わって飛んでいけるんじゃないかと、そんな事を考えていた。

雲のない雨空——天気雨の下で。

遠野有希のこれからに立ち向かうための足音が、十一月の空に響いた。





あとがき(改稿前版)

「戦ってる？」

平日の午前5時。シャワーを出た後はいつも、脳にその言葉が響きます。

熱いお湯で飛ばしきれなかった眠気のまま、「あー……うー……」と答えになつてない答えを返す日々。

仕事の疲れを栄養剤で誤魔化し、休日もロクに遊びにいくことなく、PCに向かってカリカリと執筆……といった生活が約半年。

無理が祟ったのか、時折寝ながら鼻血を出しつつ。そんなこんなで出来上がったのが、この本です。

二〇〇六年の「第十九回 ファンタジア長編小説大賞」に投稿予定だったりします。(追記・駄目でしたー)

読了、お疲れ様でした。

楽しかったでしょうか？ 後にも先にも、気になるのはこの一点です。

さて。初めましてな方もいると思いますので、アバウトに自己紹介します。

名前は吉村麻之。1982年生まれ。本名ではなく、高校時代に演劇部で演じたキャラクターの名前

です。茨城にて限りなく地味で普通な学生生活を終え、今は横浜でシステムエンジニア三年生やっています。キツイ事でお馴染みの、あの職業です。

インターネット上では『でばー』という炭酸の抜けたラムネのような名前で、ノベルゲームやFLASHを作ったりします。興味を持った方は覗いてみてほしいかもしれません。ピアノを弾く巫女さんが待っているかも。

基本的にそういったデジタルなコンテンツのクリエイターっぽい事をしていた訳ですが、

何故にいきなり紙媒体の「小説」というジャンルに踏み込んだのかと言えば、理由は物凄く単純で。自分の作ったノベルゲームの感想に、「文章がプロ並」といった文字を多数見つけ、いい気になっちゃったからです。「本当にプロ並か、白黒はつきりさせてやろうじゃないか！」という、よく分からないタンカが根っここの所で切られているようです(笑)

もう一つの理由としては、大きな舞台で挑み戦ってみたかったという所。

かれこれ、十歳の頃にスーフアミの『RPGツクール』を触って以来、ずっと『創る』という事ばかりを考え続けていた訳で。数個の作品を作り上げた今、それらが形になり始めてはいます。「ファンです！」と言ってくれる方も結構いたりします。

しかし、だから、もっと。さらに高みを望みたい。人の欲求は止まる事を知らないのです(笑)
遠野有希も吉村麻之も、人生に妥協しないのです。

今は投稿すらしていない訳ですが、既に私は勝利を確信しています。もしも受賞出来たら、それは大勝利。

落選したら、きつと私は二十三歳とは思えない程にえぐえぐと泣くでしょう。それはもう、小さい子供のように。しかしながら、その悔しさとか、「負けたままでいられない」という感情が、次の作品への糧になります。

勝っても負けてもプラス。何ともオイシイ図式が広がってしまったものです。

次に、イラストを担当して頂いた今野隼史さんについて。

今野さんといえば、富士見ファンタジア文庫『七人の武器屋』のイラストレーターとしてお馴染みです。そのような方に挿絵をお願いし、それを富士見ファンタジアさんに送りつける……というこの図式。「なかなかに姑息なインパクト狙いだなっ！」というツツコミがきそうですが、これは結末的に出来上がった構図だったりします。

今野さん（ハンドルネームの「辺境紳士」さんの方が個人的に馴染みやすいのですが（笑））とは数年前から仲良くさせて頂いています。

二〇〇四余年年二月二十九日（細かい）に私のゲーム作品のイラストを描いて貰って以来、事あるごとにイラストを描いて貰っちゃいます。その度に大興奮です。

今もなお、現在進行形でねっつりとファンをさせて貰っています（笑）

さてさて。

この「雲のない雨空の下で」の文庫化にあたり、どうしても挿絵として描いて欲しい空があったので。一つは夜明け前、もう一つは晩秋の夕焼け。

自分の中のイメージが今野さんの画風と激しくマッチしたため、今回の挿絵をお願いしました。

「親しいから」という理由がメインではありません。こちら辺に妥協はしていません。

『武器屋』の挿絵描きの中、かなりハードな状況で描いて頂いた挿絵達。

貴方の想像の中に遠野有希と伊勢崎多奈が跳ね回っていたのなら、これ以上の感謝はありません。

最後に感謝を。

まずはイラストの今野隼史さん。打ち合わせの際、川崎在住の私が川崎を案内して貰うという謎な構図になってしまい、申し訳ありません(笑) 貴方がいなければ、あの空は生まれなかったでしょう。溢れんばかりの特大的感謝。

その他、私と波長の合ってしまった会社の同期共。小学校以来からの腐れ縁共。茨城の田舎に住む両親と妹、そして愛犬。

ネット上で「応援してます!」「期待してます!」と、私の背中を力強く押してくださったファンの皆様。

そして、この本を手に取り、読み終えた貴方に。

「貴方の声援に感謝します」

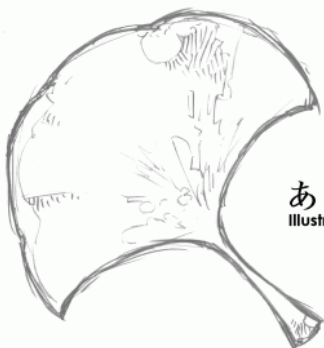
このあとがきの続きは、この本が書店に並んだ時に書きます…とか言ってみます。果てしなく僅かな可能性ですが、ゼロじゃない未来で会えたなら。

「戦ってる？」

その自問に対し、そろそろイエスを返したいと思います。それはきつと、物凄く楽しい事なのだから。今はきつと、物凄く幸せなのだから。

2006年、雲のない夏空の下で。

吉村麻之



あ と が き

Illustrator's Postscript

「今回はネット上での知り合いにお願いするのではなく、あくまでも、プロのイラストレーターに依頼するというスタンスです」

そんなメールを貰ってから始まったこの仕事、一通り絵が描けた今振り返ってみると、こちらはその心意気に完全には応えきれなかったかもしれません。やはり自分は、挿絵描きの前に作品世界の一ファンなのです。

前作「星のない空の下で」を夢に見るくらい遊んだ(実話)時は、後に有希さんを挿絵で描かせてもらうことになるとは予想もしなかったなあ。

そんなお願い——「依頼」を受けたときはとても嬉しかったし、楽しかった。改めて、今回の巡り合わせに感謝します。

夏が終わり、イチョウの葉が色づいたらこの素敵な企画をふたたび思い出すことでしょう。

今野隼史 2006.7.6 遠慮のない締切の間で

アンケートはがき。



アンケート調査
名前: 真田
Q1. 面白かったですか？ (どちらかに)
Yes No
Q2. 面白い事があったら書いてください。

「おもしろい」って思ってるんですけど、
また「おもしろい」って思ってるんですけど、
自分の信念の為に戦う
希望、希望、希望の決定
変化、変化、変化
希望、希望、希望の決定
希望、希望、希望の決定
希望、希望、希望の決定
希望、希望、希望の決定

アンケート調査
名前: 山田
Q1. 面白かったですか？ (どちらかに)
Yes No
Q2. 面白い事があったら書いてください。

「おもしろい」って思ってるんですけど、
また「おもしろい」って思ってるんですけど、
自分の信念の為に戦う
希望、希望、希望の決定
変化、変化、変化
希望、希望、希望の決定
希望、希望、希望の決定
希望、希望、希望の決定

アンケート調査
名前: 山田
Q1. 面白かったですか？ (どちらかに)
Yes No
Q2. 面白い事があったら書いてください。

「おもしろい」って思ってるんですけど、
また「おもしろい」って思ってるんですけど、
自分の信念の為に戦う
希望、希望、希望の決定
変化、変化、変化
希望、希望、希望の決定
希望、希望、希望の決定
希望、希望、希望の決定

+ forever smile +
"Thank you for your endeavors."
アンケート調査
名前: 山田
Q1. 面白かったですか？ (どちらかに)
Yes No
Q2. 面白い事があったら書いてください。

「おもしろい」って思ってるんですけど、
また「おもしろい」って思ってるんですけど、
自分の信念の為に戦う
希望、希望、希望の決定
変化、変化、変化
希望、希望、希望の決定
希望、希望、希望の決定
希望、希望、希望の決定

あとがき(中身の薄い改稿版)

熱い後書きを書いて一年後。書店で並ぶ事無く、続きを書く事になっちゃいました。

(一般書店ではなく、メロンブックスさん店頭には並びましたが(笑))

この本は改稿版ということで、初版配布後に送られた感想や指摘を元に、修正をたっぷりと加えたものとなっています。コンテスト応募ということで、量を相当に削っていたりします。

かなりの追加修正がされていますが、初めて読む方も改稿前版を読んでも、お楽しみ頂ければ幸いです。

この改稿版までの道のりの裏側には、なかなかステキなドラマが色々展開していました。思い入れも沢山あります。そんなわけで、修正の質はともかく、量はかなりのモノになっています。強烈なアドバイザーさん達に感謝しながら、鼻血と汗と涙をどばどば流した結晶となっているはず。……はず。

初版を刷ってから、早くも一年が経過しました。

この本は不思議と注文が多く、この改稿版にて夢の二〇〇〇部印刷を達成してしまいました。

初めての印刷物でオリジナル小説という人気の薄いジャンルにしては、結構凄い事だったらしいです。

まあ、これも一重に、フアンの方々の声援、イラストレーター今野隼史さんの力、そして、私のいやらしい広報能力(執筆能力に非ず)があつたからだと確信しています(笑)

改めて、皆様の後押しに感謝します。アンケートはがき、頂いた半分も載せられて無くてスイマセン。

さて、目の前の作業が呼んでいるので、後書きは早々と終わりにします。

これを書いて一カ月後には、『栃木の田舎でいとお姉さんに世話されたり世話したり』なFlashノベルが出来上がってる頃でしょう。

その後に、またこうして本という形で何か作ってみるのも楽しいかもなあ……。

どうにしろ、こんな趣味を続けている限り、楽しくも過酷な眩しい日々が笑顔で待っていてくれるみたいです。何と楽しい人生か。

跳ねるように一步。眼差した空の遠さに、満面の笑顔で。

それでは。次の作品でお逢い出来たら半笑いで逢ってやってくださいな。

2007年、巻層雲の広がる五月の空の下で。

吉村麻之



See you again!

改稿版刊行を祝して。

KONNO Takashi 2007.5.2





雲のない雨空の下で

著者 吉村麻之 + 今野隼史

2006. 7. 22	初版発行
2006. 9. 2	再版発行
2006. 12. 18	再々版発行
2007. 1. 20	再々々版発行
2007. 5. 2	改稿版発行
2007. 11. 28	改稿再版発行
2009. 11. 14	改稿再々版発行

印刷所 株式会社ポプルス

むきりよくかん。

<http://mukiryokukan.sakura.ne.jp/>
debar@mukiryokukan2.sakura.ne.jp

辺境紳士社交場

<http://www2.chokai.ne.jp/~frontier/>
frontier@chokai.ne.jp

本書の無断転用・無断転載を禁止いたします。

©Mayuki Yoshimura + Takashi Konno